
魔法少女リリカルなのは-Eternal Activity-

ティーレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは - Eternal Activity -

【Nコード】

N42220

【作者名】

ティーレ

【あらすじ】

ある事故を境に妙に影が薄くなってしまった少年と、幸か不幸か魔法に出会った少女の物語。その出会いは二人を正しく導くのか、それとも・・・

無力、無計画存在皆無の主人公が時々シリアス、大概ギャグで頑張ります。

オリキャラ×メインキャラ、ダメ絶対↑二次創作小説を書くにあたっての信条。

この小説は原作を知っていると仮定して執筆しています。

この作品は魔法少女リリカルなのはの二次創作小説です。

これは無印、A、s、Strikers編を経てようやくEternal Activityに到達するため、基本的に原作ブレイクをすることはありません。

しかし、少しくらい変わらなきゃ逆に面白みに欠けるので、入れるところは入れていきます。

また、飽きられることのないように頑張って行きたいと思います。

でわでわ、

魔法少女リリカルなのは Eternal Activity 始まりまーす！！

第一話 始まりは出会いだったりする（前書き）

アニメが好きで悪いかああああああああああああああああ！！
→前書きが浮かばなくてサーセン

第一話 始まりは出会いだったりする

始まりは至極単純だったのかもしれない。

そこは確かにそうあるべきだった世界。

悲劇も、感動も、夢も、友情も、正義も。

運命の齒車はだんだんと狂い、しかしそこに合っているかは分からない部品で塞がれていく。

その先にあるものを誰も知らないし、誰一人気付かない。

二人の少年がいた。

片方は首からカメラをかけ、帽子を深く被り、眼鏡をかけた少年。もう片方も少年だった。しかし、彼は何処と無く外れているように見えた。

いたって普通の服装、いたって普通の顔、至って普通の黒髪。なのに、それに違和感を感じるのは何故だろう？

そうだ。路地から顔だけ出しているからだ。なんて言うとな非常にあほらしくなるのでやめておこう。

「……よし今だ!!」

「……分かった!! うおりやああああ!!」

帽子を被った少年の合図で黒髪の少年は風のように駆け抜ける。

いや、まあ実際にそれだけ早かったら嬉しいな、なんて思いながら真っ直ぐ駆け抜ける。

その先にいたのは……ミニスカートの女子高生。少年がそれを横切る際、手をふわりと浮かせ……

「おっとサーセン」

「きゃああああああ!!」

少年の速さは風を起こし、スカートを巻き上げる。

少し見たいな、と衝動に駆られながらもわき目も逸らさず駆け抜け

る。

後には女子高生の怒りが轟くばかりである。

「……いたいた。零弥さーん!」

先程まで首にかけていたカメラ片手にこちらへ寄ってくる男は少年を零弥と呼んだ。

ここは待ち合わせのコンビニの前、若干イライラした様子を見せながら零弥は指を指した。

「遅い!! あんなことまで俺にやらせておいて自分は暢気に遅刻か!!」

「まあそう言うないでよ……あれは君にしか出来ないんだから。俊足の零弥にしか」

「その鬱陶しい呼び方をやめろ!!」

「はいはい……報酬はメロンパンと焼きそばパン、ミルクティーでいいんだよね?」

「……ああ、そうだよ」

それを聞くと少年はいそいそしく、コンビニに駆け込んだ。零弥はふんっ、と鼻を鳴らす。

こうやって彼が依頼を受けるのはたまにあることだった。いじめられた恨みを晴らしてほしいなりあの娘の家を調べてほしいなり、ちよっと犯罪っぽく聞こえるがようはバレなきやいいのだ。

まあ今日のはもしもバレたりしたら女性の敵として嫌悪対象になりかねないが。

零弥はあの少年の名前も知らない。今日始めて依頼の為会ったのだ。おそらくあの少年は明日には零弥の存在すら忘れているだろう。少し大袈裟かも知れないが、それがいつものことだ。

それほど特異的にも、この世界において零弥という存在は透明、と言った方が正しいだろうか。長所とも短所とも呼べるもの。

それを自覚しながらも零弥はこうして人と関わるようにしてきた。もしかしたら、もしかしたらと。例外はなかった。

コンビニの入り口のそばで少年を待つ。出てくる人が驚いた表情を浮かべるが関係ない。どうせすぐに忘れる。

「……うおお！！ いたのか！？」

「……いたよ」

出てきて早々驚いた少年から袋をひったくるように奪い、背を向ける。

「……そうだ。聞きたいことがあった」

零弥は一度振り向き、尋ねる。

「俺の名前、分かるか？」

「はっ？ お前の名前って……」

当然のように口を開きかけた少年は何も言えなくなり、口を嚙む。口をへの字にし、如何にもしてやったりと言った顔で再び足を進める。

—— 本当は自分自身に対する皮肉でしかないのだが。

海鳴市、零弥が住むこの町の名前だ。

コンビニやらの都会じみた施設がありながらも隣接する海がきれいな上、自然も多い町。

零弥はこの町が好きだった。

中途半端、といえは悪く聞こえてしまつかもしれないが、ちょうど半々で得した気分にもなれる。

下手に偏っていたりするよりはずっといい。

そんな町で、零弥は13年間生きてきた。

だが、それなりに楽しく生きていたはずの人生も今では非常につまらないモノになっていた。

（そういえばこっちは神社があつたな）

コンビニのレジ袋片手に零弥は思考する。

たしか景色も最高で、戦利品を食するには最高だ。

そのまま特に考えるでもなく、零弥は神社への階段を上っていく。

——これが自らに人生の転機になるとは思いもせず……

「風がいいねえ……」

いい年してたそがれた若人のように呟く自分にあほらしさを感じながら零弥は階段を上り続ける。

言うならば、疲れたこんちきしょーだりー、って気分なのだ。なんで自分はこんなところまで来ているんだろうと頭では思っけていても今更引き返すのもなあ、という思いが足を進めていた。

わざわざ来ないで家で食べばよかった。

——自分一人の家で？

不意にそんな考えが過ぎる。分かっている。分かっているからこっちに来たんだ。

漸く上り終えたそこには誰もいなかった。そのほうが好都合だが。高い高いそこから町を見下ろす。

「……悪くないな」

一言呟き、神社の境内に座り込むと袋から焼きそばパンを取り出す。人がいないのを確認してから。

「……いただきます」

抑揚のない声、しかしぎらついた目で嚙り付く。声は出さない。だが嬉しそうに頬張る。

と、階段を上ってくる人がいることに気がつく。

だが特に気にする必要はない。零弥は影が薄いのだから。

上ってきたのは犬の散歩中と思われる女性。零弥には気付く様子もない。真正面にいるのにな。

（はいはい、お約束）

半ばやけくそに焼きそばパンを頬張ろうとする零弥。しかし、異変はその時起こった。

ビリッ、とまるで体に電気が走るような感覚、空気が激しく振動し、寒気がする。零弥は思わずその手を止めた。突然の女性の悲鳴。そして、見た。

女性のペットと思われる犬がどんどん巨大化し、姿を変えていく様

を。

先ほどとは比べ難いほどこつこつで棘が生え、四つある目を血走らせている。

「……………はい？」

思わず目をこすった。三回くらい目をこすった。それでもそれは消えない。それはつまり夢じゃないと言っ事で。

（夢じゃなければなんだ？ 幻想？ それともこんなところで飯食った天罰ですか？）

動揺は隠せない。隠せるはずがない。
とりあえず悲鳴を上げて気絶した女性を助けなければと言っ思いが先走った。

「オラこの犬っコロがあ！！」

その手に握りめていた焼きそばパンを投げつける。
べちゃ、と嫌な音を立てて焼きそばパンが落ちる。こちらを睨む四つの目。

……………もしかしたら、自分はとんでもないことをしてしまったんじゃないか？

気付いたときには遅く、こちらに向かって唸る犬。零弥の手にあるのはメロンパンとミルクティーが入ったレジ袋。

自分になにが出来る？ 何をするべきだ？ 答えは単純明解。――
――逃げろ！！

飛び掛ってくるドデカい犬を間一髪で避け、気絶した女性の方へ歩み寄ろうとする。だが、視界の端に映ったのは小さな、小学生程度の女の子だった。あきらかに動揺の隠せない、そんな少女を怪物が見つけたとき、ターゲットは既に零弥から変わっていた。

「なっ！？ 逃げろっ！！」

腹一杯に叫んだ。だが怪物は自分も気絶した女性すらも無視して少女へと飛び掛った。

――過去の記憶がフラッシュバックする。

やはり自分は何も守れないのか？ 何を救うことも無く？

届かないと分かっているながらもその手を伸ばす。

『Stand by・Ready・Set up・』

聞こえたのは短い悲鳴、聞きなれない言葉。

零弥が目を開いたとき、そこにいたのは先ほどまでの少女――
が、まるでおもちゃのような杖を握り締め、戸惑う様子の少女と目を眩ませた怪物だった。

（……なんだ？ いたい……）

零弥はその空間において一言も喋る事が出来なかった。そんな余裕すらなかった。

再び怪物が少女に飛び掛かろうとする、と。

「なのは！ 防護服を！」

何処からとも無く聞こえた高い少年の声、無論零弥ではない。

よく見ると少女の方に乗ったフェレットから声が聞こえていた気がする。

『Barrier Jacket』

またしても聞こえた声、だがそれをどうこう思う前に少女は怪物に突撃を食らう。土煙で姿は見えない。しかし何と無く零弥は少女が

無事な気がした。

土煙が消えたとき、少女はその場に座り込んで息をついた。よく見ると服装が変わっている。白と青を基調にした服。その様はまるで

「魔法使い……いや、魔法少女か？」

そう呟いた時、怪物の姿が見えないことに気がついた。雄叫びが響く。怪物は鳥居の上で少女を見下ろしていた。再び少女へ飛び掛る瞬間、少女の周りをピンクのドームのようなものが囲う。バチバチと鳴る音。やがて音が消えるころ、怪物が倒れ伏していた。

「……すげえ」

思わず声を出していた。目の前の衝撃的な場面に。少女の杖が形態を変える。まるで翼の様な光を放っている。その杖を向けたとき、光が怪物を絡めとる。

「リリカル・マジカル！ ジュエルシードシリアル　？？！　封印
！！」

少女が何らかの呪文を唱えたかと思うと怪物を中心に眩い光が辺りを包む。

それが消えた時、少女は明るい茶髪のスインテールの髪を風に靡かせ、一息つく。

これが少年、零弥と少女、なのはの出会いだった……

第一話 始まりは出会いだったりする（後書き）

まず漸くと言った感じに一話終わりました。
思ったよりかなりきついですね。

さて、これからどうなっていくのやら。作者も分かりません↑オイ
ともかく！ 感想、間違いの指摘等沢山のお言葉お待ちしております！
す！

第二話 何かが始まったり始まらなかったり（前書き）

さて、更新頑張っていきましょう!!

声を発したのがそのフェレットと言うのは意外と察しがついていた。しかし、だからと言って驚かないわけにはいかない。

「え……？ あれ？ やっぱり……夢？」

そう呟いてみてから自らの両頬をバチーン！！ と叩いてみた。痛かった。すごく痛かった。

夢じゃない、それは分かった。しかし、目の前のこれは些か信じ難い。

——魔法少女が俺を助けてくれたなど……しかも年下の子供に。

「それで……君達は魔法使って事でいいのか？」

「え！？ あ！ はい！」

少女はまるで仕事の最中に呼びかけられたように返事をした。

零弥にはフェレットと見つめ合っていた様にしか見えなかったのだが……

もしかしたらこの一人と一匹は目を合わせるだけで会話が出来るのかも知れない、とあてずっぽうに結論づけた。

実際にたかがアイコンタクトだけで全て理解できる様な物ではなく、『念話』という魔法を使って会話していたのだ。

『ど、どうしようユーノ君。この人、なにも関係ない人だよね？』

『う、うん。こんな可能性も考えてはいたけど、こんなに早く起きるなんて……』

『・・・魔法、見られちゃったよ？ 大丈夫かな？』

『なのはみたいな例として扱うことは出来るかもしれないけど……この人は魔力が……』

そこでユーノ、零弥から見てフェレットが疑問を抱く。

確かに目の前にいる人から魔力を感じることは出来ない。しかし、妙なのだ。

零弥の体のどこかにまるで、もやもやと黒い煙のような物が蠢いていることに。

不確定ながらも直ぐに気付いた。この、目の前にいる人は……普通じゃない。

「あー、黙っているとこ悪いんだが……」

そんなユーノの気持ちを知ってか知らずか（恐らく知らない）零弥は咳払いすると、腕を組んで二人の顔を見る。

「俺は別に君達の事を言いふらしたりしないよ。仮にも命を救ってもらったんだからさ。だから説明しろなんて命令的な事も言わない」

そもそも言う相手がいない。いや、例え街中で叫んだとしても明らかに痛い人間だし信じてもらえるわけもない。例え信じて貰ってもすぐに零弥の存在すら忘れられるだろう。

……この少女達も、分かれて直ぐ零弥の事を忘れるかもしれない。

「だから、出来ればいい。話してくれないか？　もしも出来るなら、なにか恩返しくらいしたい」

自分に出来ることなど少なすぎるだろう。だが、なんとなく、放っておけなかった。

理由は……なんとなく分かる気がしたが。

「……分かりました。お話しします」

「いいの？　ユーノ君」

「うん。魔法を見られたからには仕方ないし、そもそも僕はこの人を助けたなんて言える立場じゃないからね」

意を決したように言うユーノをなのはどこか不安そうに見ていた。零弥は今ユーノが言ったことを少し疑問に思いながらも次に口を開いた。

「俺は零弥。黒野　零弥だ」

「……僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名で名前がユー

ノです」

「わ、私は高町なのは！ 小学3年生です！！」

（……高町？）

自己紹介を終えて、妙に複雑なフェレットの名前。やはり自分より更に年が下な少女、だが特に『高町』という名前に聞き覚えがあった。胸騒ぎとはまた違って心がざわめいた気がした。しかし気のせいだとも思い、何かを口にしたりすることは無かった。

「……出来る限りですが、お話します。全てを……」

フェレットなのにもまるで人間を相手にしているような雰囲気にな若干たじろぎながらも確かにユーノの目を見て頷いた。

……そんな気持ちになるのは寧ろこいつが喋るフェレットだからだろう。零弥はそう結論付けた。

「まず最初に、僕はこことは違う世界から来ました」

「結構いきなりだな」

「その世界では魔法はごく一般的に使われているんです」

「そりゃまた怖いな」

「僕は故郷で遺跡発掘を仕事にしている、そしてある日、遺跡でジュエルシードと言う宝石を発見したんです」

（どうやって遺跡発掘してるんだ？）

「そのジュエルシードは人の願いを叶える力があるんですが、単体では非常に不安定で歪んで願いを叶えてしまうんです」

「セットでお呼びなのか」

「僕は調査団に依頼して、保管してもらったんですけど……」

「なにかあったのか？」

「はい……運んでいた時空艦船が事故か、なんらかの人為的災害にあってしまって……21個のジュエルシードはこの世界に散らばってしまいました……今まで見つけられたのは先ほどのを含めて三つ」

「あと18個もあるのか……」

「僕はそれを回収するためにこの世界に来ました。しかし、僕の力は到底及ばず、力尽きてしまいました」

「そこでなのはちゃん登場、ってか」

「はい！ まだ魔法使いになったばかりだけど、頑張ってユーノ君のお手伝いをしたいと思うから」

「本来、この世界の人達は魔力を持ってはいません。しかし、なのははとても凄い力を持っていました。そこでなのはには僕の変わりにジュエルシードの封印をお願いしたんです」

他にもジュエルシードは人や動物に取り付き、歪んだ願い、すなわち暴走を引き起こすこと。

なのはの持っている杖の名称はレイジングハートと言う名の宝石、デバイスと言う魔法の使用補助をする役割があるということ。

「……そっちの事情は大体は分かった」

「……あまり驚かないんですね」
「まさか？ 驚くどころか胸の内がバクバクだぜ」

訝しげに見るユーノに肩を竦めて見せた。何と言つか、思ったよりスケールがでかすぎる。フェレットが喋るところまではまだ素直に驚けた。

「まあ……そうなったらやっぱりありがとうだわな。助けてくれたんだからさ」

「僕は礼を言われる立場なんかじゃない。責められる立場なんだ！ ジュエルシードを見つけてしまったのは僕なんだから……」

ユーノはかなり真面目なにんげ——フェレットだ。しかしそれに関心もあれば呆れもある。

「あのなあ……自らの責任を放棄しないのは評価するけど、自分を追い詰めすぎてないか？」

「え……？」

「まあ確かにユーノがジュエルシードを見つけないければ俺もここで飯を食えてたし、なのはが魔法使いになる事なかったかもしれない」

「零弥さん……！」

「だがな……！」

若干怒りを表し、その手のレイジングハートをチャキ、っと鳴らすなのはに對してビビリながらも零弥は自分の事を言い切った。

「そこにいるのはが、そして俺が、お前を迷惑と怒ったか？」
「ッー！」

「事故なんだろ？ お前が時空艦船とやらを壊したわけじゃあるまいし、ちよつとは隣にいるなのは気持ちを考えるー！」

「なのはの……気持ち？」

ユ一ノはなのはの顔を見る。心配げに自分を見るその目を見つめる。

「——と、お節介なお兄さんに言えるのはこれくらいかな」

「……零弥さん」

「さつきも言おうと思ったけどやめてくれその呼び方。俺みたいな若造にさん付けは早すぎる」

「……じゃあ、零弥くんー！」

それを聞いて妙に恥ずかしくなる。四つも年下の少女にくん付けも違和感あるが、まあ構わない。

「……どうせ一時の夢だ。」

「———なにか手伝えることがあったら呼んでくれ。出来る範囲内なら相談にでも乗ってやる……覚えてたら、だけど」

そう言つと自分の携帯の電話番号とメールアドレスの書いてある紙

を手渡した。

「じゃあな。なのは、ユーノ。縁があつたらまた会おうぜ」

手をひらひらと振りながらビニール袋片手に帰っていく。

さようなら、なんて久しく聞く言葉をその背に受けて、階段を降りていった。

「……なんなんだろうね、あの人」

「分かんない。でもいい人だね」

なのはとユーノは零弥の姿が見えなくなったのを確認すると口を開いた。

なのはからはなかなか嬉しい評価をいただいたが、ユーノの表情は明るくない。

（あの人の体の中にあつたあれはなんだつたんだろう？）

ブラックボックスとしか言えない謎の何か、正体は掴み切れない、それほど驚いた様子を見せない人。

「ユーノ君？」

「ああ、ごめんなのは。なんでもないんだ」

ユーノはただ、零弥が帰っていった方向を見ていた。

（……なんで）

零弥は自分が戸惑っていることに気付いた。いつもなら連絡先なんて教えるはずがない。それが例え命の恩人だろうと。

（……なんで）

いつも最後に自分の名前を自虐気味に聞くのに、なぜ今回は聞かなかったんだろう？

聞いて、自嘲しながら帰るのがいつもの自分だったはずだ。

(……もしかしたら、俺は……)

思った事をそのまま飲み込み、零弥は自分が降りてきた階段を見上げた。

頂上は見えない。

そして再び歩き出そうとする。そこで思い出した。

「あ、気絶してた人忘れてた」

——後にはカラスが鳴くだけである。

第二話 何かが始まったり始まらなかったり（後書き）

第二話、終了しました。

書くのに二時間かかってしまった。やっぱり難しいね。
今後も頑張って行こうと思う。

第三話前編 自称空気、他称俊足の誰か（前書き）

誰も読まないと分かって書き込みます。

就職試験落ちたorz

こんなことやってていいのか俺よww

第三話前編 自称空気、他称俊足の誰か

その日の天気は晴れ。比較的気持ちよくすごせそうな日。

「・・・ねみい」

そんな日の昼近くにもかかわらず欠伸をしながらコンビニの前に立っている彼の名は黒野零弥。一週間ほど前に魔法少女に命を救われた少年。人呼んで俊足の零弥らしいが本人は当然のようにその名を嫌っている。もしも何故？ と聞かれたならば彼はこう答えるだろう。

「あんたが俊足の零弥——」

「やめろそのおもいきり格好つけようとして失敗した名前で呼ぶのは」

……だ、そうだ。

しびしびと言うか嫌々と言った感じに零弥は声がした方を向いた。そこにいたのは零弥と大して年も変わらなそうな少年だった。幼さを残した顔付きをつば付きの帽子で隠すようにしていた。

「……七不思議の零弥がまさかほとんど年が変わらない奴だとは思わなかったぜ」

「……お前、名前は？」

「？ 12歳で小学6年だ」

「なんだ。俺のが年上じゃん」

「……何？」

少年は零弥を見下ろした。と、言うが別にこの目前の少年の身長が高い訳ではない。
逆に零弥の身長が小学6年の平均以下なのだ。

「それで、依頼は？」

「……ああ、それは――」

零弥はとある事情で一人暮らしをしており、ぶつちやけ金はほとんどない。

なので、地元の小、中学校の掲示板等に自らのメールアドレスを貼り付け、こう書いたのだ。

『依頼受けます。 内容次第で万事解決』

他にも依頼料は500円以下、とも書いており、悩みに悩んだ少年少女が藁にも縋る思いでメールしてくるのだ。依頼後は零弥と言う

人間（？）の性質上みんなきれいさっぱり忘れてくれるので特に問題は無い。今まで落し物探しから始まり、先日の子子高生の件まで様々な事をしてきた。どうやらいつのまにか七不思議まで昇華してしまったようだ。

「有名な喫茶店のケーキねえ……」

依頼は要約するところだ。駅前にある翠家と言う喫茶店にあるケーキがすごい旨らしい。しかし自分は用があつて買いに行けないので代わりに買いに行つて欲しいとの事。

「翠屋……翠屋……あれか」

その看板を見つける事は出来たが、その下には沢山の子供たちが集まっていた。日曜日でかなり繁盛しているのかと思つたが、よく見るとみんな同じようなユニフォームを着ていた。まあ開いているんだろうと翠屋に近よつていく。

「――では！ みんな解散！！ 気をつけて帰るんだぞ？」
「「「ありがとうございます！！」」」

どうやらなんらかの集まりだったようだ。おそろくなにかのスポーツのクラブだとは思うが、いなくなったのでよしとしよう。

「すいませ〜ん」

「ん？ なにかな？」

「この喫茶店で今日やってるんですかね？」

「あゝ。もしかしてお客さん？ ごめんな。今日の営業は午後の二時頃からなんだよ」

申し訳そつに頭に手をやりながら苦笑いする店員と思われる若者。それを聞いて零弥はがっくりと肩を落とした。

（て言うかアイツ、事前に休みだったこと調べとけよな。とんだ無駄足を踏んじまった……ま、どうせ向こうも俺の事忘れてるか）

そんな調子でどうやって依頼を終わらせるつもりだったのだろうなんて激しく疑問だが、ザマーミロと思いながら零弥はお構いなくと頭を下げた。兎にも角にも今日の食事はパーになってしまった。どうするべきか？ と悩んでいたときだった。

「おつ、みんなも解散か？」
「あつ！ お父さん！！」

考え中に耳に入った声。先ほどの店員が店の前で談笑して今解散しようとしていた少女達に話しかけた折、聞き覚えのある声を聞いたのだった。

（この声、まさか……）

そちらに目を向け、存在に気付く。

「あれ？ 零弥くん！」
「高町なのは……！」

そこにいたのはつい最近命を救ってもらった魔法少女、高町なのはだった。その胸には喋るフェレット、ユーノも抱かれている。前回会ったときの様な魔法少女の服装ではなく、私服に身を包んでいる。

「なんだ？ 友達か？」
「うん。ついこの前知り合ったの！」
「奇遇だな。まさかこんなところで会うなんて」
「今日はうちのお父さんがコーチ兼オーナーをしているサッカーチームの応援に行ったの」

「ああ、なるほど。どうりで……お父さん？」
「うん！」

そう言えば先ほどもそう呼んでいた気がする。しかし、お父さんと言った年には非常に若いように見える。

「なあ、お兄さんの間違いじゃないのか？」

「ううん。お父さんだよ？」

「……おお神よ。私は今世界の神秘を目撃しています」

「紹介するね。この人は黒野零弥くん」

「あれ？ スルー？ ごく自然にスルー？ まいいや。黒野零弥です。どうぞお見知りおきを」

「月村すずかです」

「アリサ・バニングスよ。いつの間に友達になったの？」

軽くお互いに自己紹介を済ませるといきなりな質問をされた。なのはさんには命を助けてもらいましたなんて言えない！ いや、いけるか……いけるのか？

「ああ、ちょっと困ってたところを助けてもらったんだ。なのはには感謝してるよ」

「ふーん。そうなんだ」

流石にそのままは別の意味で大変なことになりそうなのでやはり伏せておいた。チラッとユーノを見てウィンクして見せる。

「それじゃなのはちゃん。私達はもう行くね」

「月曜日に話してあげるからね」

「うん！ 楽しみにしてるね」

「帰るんなら送っていいとか？」

「いえ、迎えに来てもらいますので」

「同じくです！」

「そうか。なのははどうする？」

「私は・・・ちよつと零弥君とお話してから帰るね」

「そうか。父さんは一度帰るよ。なのはも気をつけて帰ってきなさい」

「うん！！」

いつのまにかご指名をもらっているのを少し疑問に思いながらも零弥はまあいいかと考えていた。

「「じゃ〜ね〜！！」」

「また明日〜〜！！」」

帰っていく二人に手を振り、その姿が見えなくなるとなのはは零弥を見た。

「じゃあ行こうか！」

「行くつて、どこへ？」

「う〜ん。近くの公園なんかいいかも」

そう言つとなのはは歩き出した。零弥はそれに着いていく。

第三話後編 優しすぎる心

「今日はお仕事休業か？」

「うん！ 日曜日だし、ちょっと疲れちゃったからね」

公園に着いた二人は近くにあったベンチに並んで腰を下ろした。間にはユーノが立っている。

「ジュエルシード集めもけっこう進んでるんだろ？ 昨日で6つ目だっけか？」

「5つ目だよ零弥」

今まで黙っていたユーノが言葉を発する。ちなみに零弥がそれを知っているのは昨夜なのはからメールが来たからである。アドレスを渡したその日にすぐメールが来たことを零弥は素直に驚いた。今までの経験上とくに忘れられていると思うていたからだ。それからジュエルシードを手に入れた事を地道に教えてくれて、久しぶりに他人とメールすると言うことを思い出していた。なんの影響かは分からないが、彼女らにはちゃんと零弥が確認、存在感があるように感じるそうだ。

「まあ順調そうだなによりだ。ジュエルシードも残り16個。いい感じじゃなか」

「まあね。零弥は僕たちの事誰かに言いふらしたりしてないよね？」

「するかバーカ。……そもそも言う奴がいないつーの」

その言葉は誰にも届かないまま、寂しく消えた。

「ま、昨日の夜もお疲れさんだわな。小学生ならもう寝てる時間だつたろ」

「うん。だけど急がなきゃ困る人がいるし、それになんとか出来るのは私だけだもん」

「そうか……偉いな」

えへへ、と年相応の笑顔を見せるなのはに零弥はふっ、と息をもらした。

「——ちょっと待ってください!!」

突然ユーノが声を荒げる。それを二人は驚いた様子で見る。

「確かなのはが君にメールしたのは夜中です。だけど何故、なのはが夜中にジュエルシードを封印しに行ったのを知ってるんですか?」

「何故って……なんでだ?」

「どうして貴方がジュエルシードが発動した時間を知っているのか

と言つことです!!」

それを聞いて零弥は首を傾げる。別に理由と聞かれても彼にしてみるとそんな複雑な理由はない。普通に昨日も、少し前も、初めてジユエルシードが発動した時の電気が走るような、空気が振動するような、寒気のような感覚があった。更にそれとはまた別に何かが遠くで高まるような感覚もあった。それがなのはの魔法を使った瞬間だと気付いたのはまた別だが。

「どうしてなんて言われても――」

瞬間、零弥の表情が固まる。感じる……体が少しビリビリ言つて、空気の波のような物が来て、寒気が起こる。

「……来る」

「え……?」

直後、なのはとユーノも察知する。二人が感じたそれは間違えようの無い、ジユエルシードが発動する気配。ユーノは零弥をキツ、と睨みつける。

（魔力もないのにジユエルシードを察知した……しかも僕やなのはより早く。ただの人じゃない。この人は……）

「なのは、ユーノ、お前らも感じるんだよな。この寒気みたいなの

を」

「も、って零弥君も？」

「ああ……なんて話してる場合じゃなかった！！ 急ごう！！」

零弥の言葉でユーノはまずジュエルシードをなんとかすることが優先と判断し、なのはの肩に飛び乗った。

二人が駆け足で上っていたのはこの辺りではそれなりに高いビルだった。それに上ったのも辺りを見回す必要があったからだ。

「レイジングハート！ お願い！！」

『Stand by・Ready・Set up』

一瞬で魔法少女の服装に着替え、その先を見る。その視線は、真っ直ぐに町を覆う大樹に注がれている。大樹は巨大な根を張り、町は

それに押しつぶされていた。

「でけえ……なんだありゃ」

「……ひどい」

「……多分、人間が発動させちゃったんだ。強い思いを持ったものが願いを込めて発動させたとき、ジュエルシードは一番力を発揮するんだ」

「じゃあこれが、ジュエルシードの本当の力なのか……？」

零弥が自分の住む町の惨状に息を吞んでいたとき、なのはは思い出していた。一人の少年からジュエルシードの気配を感じていたが、それを気のせいと思ってしまったこと。

（やっぱり、あのときの子が持ってたんだ。私、気付いてたはずなのに……こんなことになる前に、止められたかもしれないのに……）

なのはの中で後悔の念が渦巻く。そんなことは露知らず、零弥はただ大樹を見ていることしか出来なかった。ユーノが心配げになのはを見る。そんな時、レイジングハートがピンク色に光り始める。

「ユーノ君。こう言う時はどうしたらいいの？」

「えっ？ あ……」

「ユーノ君……」

いつもとはどこか違う、しかしいつも通り真剣なのはユーノはたじろいだ。

今だけ目の前の少女が別人に感じられたからだ。零弥も驚いた目では見たが、それより見るべきものはある。

「あ……うん。封印するには接近しないとダメだ。まずは元となっている部分を見つけないと。だけどこれだけ広い範囲に広がっちゃうとどうやって探したらいいか……」

「元を見つければいいんだね？」

ユーノのえ？　と言う声は妙に小さく聞こえた気がする。

なのはがその手のレイジングハートを振り、デバイスはそれに応える。

『A r e a S e a r c h』

なのはを中心に大きなピンクの魔法陣が展開される。

「リリカル・マジカル！　探して！　災厄さいやくの根源を！」

その声とともに杖を振り下ろす。するとその先端から数え切れないほどのピンクの細い光が四方八方へと飛んでいく。おそらくそれで元となっている場所を探そうと言うのだろう。

ユーノも、もちろん零弥も何も言えずにそれを見ていた。
そして――

「見つけた！」

「「本当！？」「」

そう言ったなのは視線はぶれることなく、真っ直ぐある地点を見ていた。

「すぐ封印するから！」

「ここからじゃ無理だよ！ 近くに行かなきゃ！」

「出来るよ！ 大丈夫！ ……そうだよねレイジングハート？」

『Shooting Mode・Set up』

レイジングハートはなのはの言葉に答えるようにその形態フォームを変えていく。

零弥は直ぐ近くで高まる力を感じていた。今までにないほど、強い力を。

「行つて！ 捕まえて！！」

――レイジングハートの先端から、ピンク色の砲撃のような魔法が発射される。

『Stand by・Ready』

「リリカル・マジカル！ ジュエルシード、シリアル？！ 封印
！」

そして、先程の砲撃ですら霞むほどの直射型砲撃魔法が、発射され
る――

零弥はただ口をあんぐり開けて見ていた。ジュエルシードはなのは
の手により封印され、彼女は先程までの私服に戻っている。物事は
一件落着、に見えた。

「いろんな人に、迷惑かけちゃったね……」

ポツリとなのはが呟く。少女は本当に悲しげに夕日を見つめていた。

「な、何言ってたんだ！ なのはは、ちゃんとやってくれてるよ！」

「……私、気づいてたんだ……あの子が持っているの。でも、気のせいだと思っちゃった……」

「なのは！……お願い！ 悲しい顔しないで！……元々は、僕が原因で……なのははそれを手伝ってくれてるだけなんだから……っ！！」

二人がそんなことを言い合っているのを見て、零弥は少し頭が痛くなるのを感じた。なのはが心優しい少女である事は分かっていたつもりだ。だからそう言っただけで悔やむ気持ちは分かる。だが元々は事故が原因で落ちてきた物だ。なのはに義務がある訳ではない。

……そう簡単に割り切れないのは分かっていたが。

「……悔しいか？」

「……うん」

「そうか……このミスをしてしまったのは確かにお前かもしれない。でも、お前じゃなけりゃこれは解決できなかったんだ。覚えておけ」

そう言うと零弥はユーノを手招きする。うなだれた様子で近づいてくるユーノにしか聞こえない声で零弥は口を開いた。

「なのはは優しい。優しすぎるんだ。そういう子は強いけど、崩れてしまったら立ち直るのには誰かの力が必要になるんだ。そばにいて、元気付けてやれ。それはお前にしか出来ないことだ」

「でも……僕はどうやって励ましてあげたら……」

「お前が思うことを言え。ただし悲観的な事は抜きでな。今は、そ

れで十分だ」

頷き、なのはの方へ駆けていくユーノを見送り、零弥は夕日を見た。そして、公園での出来事を思い出す。

『どうして貴方がジュエルシードが発動した時間を知っているのか
と言うことです！！』

ユーノはそれが普通不可能であるかのように言っていた。だが、零弥はそれを感じることが出来る。

（俺は普通じゃないのか？ それとも普通じゃなくなってるのか？
どっちだ？）

そんなことを思いながら零弥は帰っていた。

「なのは、僕の話聞いて」

「ユーノ、君？」

「大丈夫。君だけの責任じゃないよ。なのはがいてくれたから僕はここにいれる。こうやって一緒にいることが出来る。確かに今回は沢山の人に迷惑をかけてしまったかもしれない。だからこそ、次は絶対失敗しないように頑張ろう。僕も頑張るから」

「……私、今までユーノ君のお手伝いをしようって思ってた。でも、それじゃダメだね。私が、私自身の意思でやろうっておもわなきゃ。……ありがとうユーノ君」

夕日は一人と一匹を照らし、思いを残す少年をも照らし、崩れた町をも照らしてくれていた。

第四話前編 出会いと記憶（前書き）

主人公が別に無気力ではない気がしてきた……

第四話前編 出会いと記憶

その日もまた、朝焼けの日が海鳴を照らし始める頃、少年は珍しくも朝早く、目を覚ましていた。
しかし、それになにか小奇麗な（待ち合わせなどの）理由がある訳ではない。

「……は、腹減った」

金銭面の問題による空腹が零弥の胃袋を捻るように苦しめていた。

あの樹が大量発生してもしかしたら少し地球温暖化に貢献したんじゃないかなあ、と思われる事件が終わり、一週間が経とうとしていた。

なのはとのメールも三日に一度ほどにはするようになり、少しは相談等もしてあげてなんだか力になれているような気になっているのを本人は気のせいじゃないと思いたい。実際には零弥がいてもなのはやユーノも大丈夫だろう。少し時間がかかるだけで二人は立ち直れていたはずだ。だが少しでもそれを短縮してあげたのなら、零弥としては本望だった。

（なのは達に会うのは明日か・・・）

どうしてもユーノは実際にあって確かめたいことがあるのだと言う。言われずともそれがジュエルシードの発動を察知した事だろう。そもそもこうして察知できるようになったのはなのは達に初めて会ったあの日からだ。その前まではそんなものを感じることは無かった。その辺りで零弥は考えを打ち切る。どうせいくら考えても分からないことだ。明日になればユーノが教えてくれるだろうし、今日はこれからすることを考えなければならぬ。

「……食い物を探しがてら、家の中を掃除するか」

零弥は一人呟くほどの声で言った。零弥が住んでいるその家は一人で暮らすには大きすぎる一軒屋。そこに住んでいることには当然理由がある。今は、関係のない事だが。

「……やっぱり流石に疲れるか」

自分一人で結構な時間をかけて掃除をした。長い間使っていない洋室を拭き掃除し、和室の畳を軽く掃く。余分なゴミをまとめ、それをまとめているところだった。零弥は一つの部屋の前を通りがかる時間が止まってしまったかのようにも感じられ、頭の奥が熱くなる。大きく口を開いた可愛らしいくまのシールが貼られ、ちょうど口の部分には丸い字でこう書かれている。

『
るみの部屋』

胸の奥が軋む。痛む。熱くなる。過去の記憶がフラッシュバックする――

その手をドアノブへかけることはしない。――出来ない。
体が拒否する。開けと思っても体が嫌がる。

結局はその部屋を通り過ぎ、次に物置部屋へと向かった。ただでさえゴミが多く、それでいて長い間放置していたので煙たいのは仕方がない。口を袖で押さえながらその部屋を見渡す。一番最初に目に入った物をその手に取った。

まだ新しい細長い皮の入れ物、中に入っていたのは二つ。竹刀に木刀だった。

「こんなところにあつたのか……」

思わず呟いた。どちらも子供用にしては大きく、背負うと腰についてしまうのではと考えてしまう。

『お父さん!! これ大きすぎだよ!!』

『そうか? ごめんごめん。今度は子供用のやつ買ってくるからな』

――過去のささやかな思い出がフラッシュバックする。今の自分に出来ること。自分にしか出来ないこと。あの少女に関わって初めて考えた。自分は魔力などもなければ存在感が薄いと言うマイナス要素が目立つ人間だ。そんな自分が彼女達になにかしてやりたいと思うのは、愚かなことだろうか?

——まだ九歳の子供が

その時、気付く。かすかに感じる感覚。かなり遠いところでジュエルシードが発動した。奥歯を強くかみ締める。

——まだ九歳の子供が戦っているのに、それに目を逸らすことなどできる訳が無い……ッ！！

零弥はその手の物を握り締め、家を飛び出した。

その日、なのははユーノと兄の恭也と共にすずかの家へ呼ばれていた。すずかの家はなのはの住む場所からはそれなりに離れたところにある。森に囲まれた大きな屋敷だ。

この日も魔法少女としての仕事はお休みのつもりだったが、突然近くの森の中でジュエルシードの反応を感知し、なんとかその場を濁

してユーノとともにそちらへ急行した。

「ッー!!」

「発動した!!」

「ここだと人目が……結界を作らなきゃ!!」

「結界……?」

「最初に会ったときと同じ空間! 魔法効果の生じている空間と通常空間の時間進行をずらすの! 僕が少しは、得意な魔法」

ユーノを中心に緑色の大きな魔法陣が展開する。

「あまり広い空間は切り取れないけど……この家の付近くらいならッー!!」

ユーノの魔法が発動すると同時に周りの風景が灰色に変わっていく。

なのはは少し驚いたように色が変わった風景を見回す。

と、直ぐ近くでジュエルシードの力が高まっていく。それは視認できるほどで、直ぐ近くで光の柱が立ち上る。

……そこにいたものを見て、なのはとユーノは目を点にした。

——余談だが、月村家は捨て猫などを全て回収し、家の近くに放し飼いにしていた。

何が言いたいのかと言うと、まずジュエルシードを発動させたのはその猫達のうちの一匹だった。

しかし、彼女達が目を何も言えず驚いたのは、巻き込んでしまった後悔からではない。

——彼女らの前にいたのは木よりも高い、子猫だった。

『ニャーオ』

「あ、あ、あ、あれは……」

「た、たぶん、あの猫の大きくなりたいて思いが、正しく叶えられたんじゃないかな？」

「そ、そっか」

ずしんずしんと歩いていく猫を見て戸惑いを隠せない。なのはは頭を抱えた。

「——だけど、このままじゃ危険だから元に戻さない」と

「そ、そうだね。流石にあのサイズだとすずかちゃんが困っちゃうだろうし……」

『ニャーオ』

「襲ってくる様子はなさそうだし、ささっと封印を……」

なのはがいつものようにレイジングハートを取り出し、セットアップしようとする。その時。

—— 一線の光の矢が飛来し、猫へ直撃する。

なのはは驚愕しながら光の飛んできた方向を見る。

そこにいたのは電信柱の天辺に立ち、黒いマントに身を包み、光を
発射しただろう黒い杖をこちらに向けた、金の髪の少女だった。

第四話後編 すれ違う思い、高まる気

自分の家からそれほど遠くない場所にある公園。

零弥は今そこにいた。手には木刀を持っていた。目を閉じ、一度大きく深呼吸する。

ずっと遠い場所で感じる気配、強まる魔力、零弥はなににもできない自分を悔やんでいた。

なんて自分はちっぽけな存在なんだろうと、今なら思える。少し前の自分ならそんな事など考えず、その日の食事をなんとかすることだけを考えていただろう。だが、今は、あの子供達と関わってしまった今なら分かる。

閉じていた目を開き、その手の木刀は力強く振り始める。

俺は今の自分が嫌いだ。大嫌いだ。でもなにもしなかった。なにもしないで機械の様にどうすれば生きれるか考えていただけだった。恐らくあの少女に出会わなければ今も家で寝転がっていたはずだ。何もしないのは楽に決まっている。何も出来ないのとは全然違う。

今、何も出来ない自分が憎い。何をしようとしなかった今までの自分が憎い。

こうして木刀を振ることに何か意味があるのか？ それは激しくイエスとは言い難い。だが、知っていて何もしないことが罪だと言うなら、せめて少しでも力を付け、あの子達の為に何かをしてやりたい。

それが俺の――

「ッー!! この感覚は……」

木刀を振るその手を止め、耳を澄ますかの様に感覚を研ぎ澄ませる。
――なのは並に大きな力が二つ……しかもほぼ同じ位置から。

「……なのは」

けれどもどうすることも出来ず、ただその名を呟いた。

金色の髪の少女は遠い場所にいるジュエルシードの影響を受けた猫を見据えていた。

その瞳から感情をうかがうことは出来ない。

「バルディッシュ。フォトンランサー連撃」

『Photon Lancer・Full auto fire』

少女がバルディッシュと呼んだデバイスの先端より、先程撃たれた光の矢が連射される。それは一発も外れることなく猫に直撃する。だが決して猫を射抜くような事はなかった。基本デバイスには非殺傷設定と言うものが設定されているのだ。そもそも砲撃系統の魔法は魔力の塊がビームのように飛んでいくのだ。余程強いものでない限り、人の体は壊れない。

だがそんな状況をただ見過ごせる人間ではない。高町なのは……

「レイジングハート！　お願い！！」

『Stand by・Ready・Setup』

いつものように魔法少女の姿に変身し、レイジングハートを握り締める。

『Flier Finn.』

レイジングハートの音声と同時になのは足に一对のピンクの翼が羽ばたく。それで飛び上がり、猫の背中に飛び乗り、

『Wide Area Protection.』

今までにないほどの大きさのプロテクションを発動させ、光の矢を阻む。

「魔道士……」

金色の髪の少女は感情の感じられなかった表情に少し戸惑いを作る。だがそれは直ぐに無くなり、狙いを少しずつらす。引き続き発射された光の槍は猫の足に直撃し、鳴き声を上げながら横倒れになる。

「ふあ！ ふ、ふわああああ！！」

当然上に乗っていたなのはもバランスを崩す。しかし再びピンクの翼を羽ばたかせ、叩きつけられることなく着地し、その手の杖を構える。瞬間、なのはのいる場所より高い、木の枝の上に金色の髪の少女は着地する。少女の年齢はなのはとそれほど変わらないだろう。しかし、そこには年相応の笑顔などなく、ただ無表情だった。腰まである金色の髪をツインテールにしてまとめ、黒を基調にした防護

服に身を包んでいた。そしてその手には漆黒の杖、バルディッシュが握られており、感情の感じられない目でなのはを見下ろしていた。なにを思っているのか分からない表情になのはは少しばかりたじろいだ。

「同系の魔道士……ロストログアの探索者が……」

起伏のない声で少女はそう呟いた。

「間違いない……僕と同じ世界の住人。そしてこの子、ジュエルシードの正体を……っ!」

ユーノが小さい目をいつもより細めて呟く。予想していない第三者の介入。

少女の瞳がなのはの持つレイジングハートを捉える。

「……バルディッシュと同系のインテリジェント・デバイス」

「バル……ディッシュ?」

二人はお互いの手にあるデバイスを見る。なんとなくだが、似てる。なのははそう思った。

「……ロストログア、ジュエルシード」

『Scythe form・Setup.』

少女の手のバルディッシュが形を変える。杖の先端から固定されたエネルギーが噴出し、大鎌の形態へと形を変える。それを構え、少女は呟いた。

「……申し訳ないけど、いただいでいきます」

そう口を開いた直後、少女は躊躇無くバルディッシュを振りかぶる。

『Evasion・Flier Finn.』

先程の魔法が緊急で発動し、一瞬前までなのはがいた場所がバルディッシュによって薙かれる。

そのまま高く飛び上がり、少女を見下ろす。しかし、少女の次の行動は早い。

『Arc Saver.』

何も無い空間を大きく薙いだバルディッシュの刃はまるで飛来するブーメランのようになのはへと向かう。

「ッ!!」

『Protection.』

飛来した刃をピンクの壁が打ち消し、更に上昇する。しかし、いつの間にかなのは同じ高さにいた少女はなのはに向かってバルディッシュを振り下ろす。か細い悲鳴を上げ、反射的にレイジングハートで受ける。お互いのデバイスが悲鳴のようにバチバチと音を立てながらも二人の視線が交差する。

「なんで……なんで急にこんな……？」

「……答えても。たぶん、意味が無い」

ガキイン、と金属特有の音を出し、弾かれた二人は着地するとデバイスを再び構えなおす。

『Device form・Photon Lancer, get set.』

『Shooting mode・Divine Buster, Stand by.』

お互いのデバイスを射撃型に変形させ、それを向け合う少女達。辺りが自ずと静かになったように感じる。

そんな中、意識を相手からずらす事はなかったが、なのはは思考に浸っていた。年齢は自分と変わらない程、綺麗な目に、綺麗な髪、

だがこの子は……

そんな時、なのはの耳に入ったのは横倒れになった猫が今立ち上がろうとして上げた鳴き声だった。

思考に意識を傾けていたなのははついそちらを見てしまった。

——少女の目がわずかに細まる。

「——」

少女は何かを呟いた気がした。だが、聞こえなかった。

ハッとした時はもう遅く、バルディッシュから発射された攻撃魔法、フォトンランサーはなのはの目下の地面をも砕き、空高くへ打ち上げた。

間一髪落下してきたなのはをユーノが魔法を使って受け止める。気を失っているなのはを見て少しホッとしながらもユーノは少女を探した。

少女は今尚立ち上がろうとしている猫に向かって杖を向け、そして

……

『Sealing form・Set up.』

「捕獲」

バルディッシュが形態を変える。それはなのはがジュエルシードを封印する際の形に似ていた。先端にエネルギーが溜まっていく。

——少女はそれを強く振り下ろした。

終わった時には猫のサイズは元通りであろう子猫のサイズに戻り、そのそばにはジュエルシードが転がっていた。少女は何も言わずにバルディッシュを近づける。それだけでジュエルシードは吸い込まれていった。

少女はやはり感情のない瞳のまま、少し視線をずらす。そこには先程自分が吹き飛ばした少女が眠っていた。少しの間黙って見ていたが、微かに目を悲しげに歪めたかと思うと、踵を返し、去っていった。

なのは目が覚めたのは夕方頃だった。ユーノがアリサやすすか、恭也を呼びに言ったのだ。皆にはユーノを探していたら転んだとまた嘘をついた。

結局その日は帰って休むことになり、送ってもらう事にもなつてしまつてなのは心はごめんなさいと言う気持ちでいっぱいだった。

両親や姉に事情を説明し、直ぐ休むことになった。その前にユーノに話を聞いた。あの少女は間違いなく自分と同じ世界から来た住人で、あの少女も恐らくジュエルシードを狙っていると言うこと。様々なことを考えながらもいつものように携帯を充電しようとした時、メールが来ている事に気が付いた。

『送信者 黒野零弥』、送信されたのは大体あの少女と戦っている最中の時間で、なのははなにかと思いメールを開いた。

『なにがあつたのかは分からないが、今日はゆっくり休め。明日も無理して来る必要はない』

恐らく彼もなんらかの異常性を察知し、心配になつたんだろう。零弥からそう言われるとも思わず、少し予想外で口元を緩ませる。

『大丈夫です。明日待ち合わせの時間に会いましょう』

それだけ送って、なのはは眠りについた。

同時刻、零弥は未だに木刀を振っていた。滝のように汗が流れようが、腕の感覚がなくなろうが、零弥はなのはからの返信が来るまでその手を止めないと密かに誓っていた。しかし、時間が経てば経つほど嫌な予感が増大していくことを考えず、ずっと振り続けていた。

そんな時、漸くと言った感じで返信が届き、片手で竹刀を振りながら携帯を開いた。

返信されてきた内容を見てようやくその手を止め、汗だくの顔を袖で拭う。

日などとつくに沈み、明日は確実に筋肉痛確実と思いながらも零弥の中には安心感が充満していた。

一息つき、木刀をしまうと零弥は帰路に着こうとする。しかし、遠くに立つビルに違和感を感じ、その足を止めた。ぼんやりと光を放つビルは、そもそもそこにあつたのだろうか？

だが、今は疲労が溜まっており、思考を中断までして結局帰路に立つ。

——明日はなのはとユーノに会う日だ。

第四話後編 すれ違う思い、高まる気（後書き）

さて、ようやく主人公がそれらしくなってきましたね。
・・・就職先どうしよう？

第五話 過去・明るみに出られぬ者（前書き）

この辺りから主人公が大きく物語に関わっていく・・・予定です。

第五話 過去・明るみに出られぬ者

なのはとユーノは朝早く、海が見える公園に来ていた。そこはとも有名な場所で、観光スポットと言っても過言ではない。そんな場所だった。

金色の少女と戦闘した次の日、なのは達は零弥に諸々の理由を説明してもらったため、待ち合わせをしていた。もっと早く、平日などの時間でもかまわないと零弥は言っていたが、そこはなのは自身学校や塾で忙しい為、前日の事があっても今日この日会うと決めていたのだ。

などと言っているが、実は今の時間は待ち合わせより一時間程度早い。

なのはの提案、いや、お願いだった。

「ユーノ君、私、もっと強くなりたい。強くなって、あの子とお話できるようにになりたい」

当初、ユーノは反対だった。わざわざこんな疲れているときに魔法の修行をする必要はないのだから。だが彼女の真剣な表情に結局押し切られ、無茶はしないと言う条件付きで承諾したのだった。

「じゃあユーノ君、お願いね」

「分かった。零弥が来る一時間だけだからね」

そう言うとユーノは結界魔法を発動させる。辺りにちらほら見られた人達はいつのまにか消えていた。

「うん！ お願い！ レイジングハート!!」

『Stand by・Ready・Set up・』

「うゝ。けっこう寒いな」

なのはが修行を始めて三十分が経過するかしないか程度の時間、零

弥は自分の家の前に立って身震いしていた。その背には昨日と同じ、竹刀や木刀の入ったケースを背負い込んで。

「まだ時間には早いけど、木刀でも振って待ってりや体も温まるだろ。いや、その前にダッシュで行こう。それは名案だ。はは」

少しテンションが上がりすぎてよく分からない事態になっている零弥は自らの異変に気付かず、走って待ち合わせの公園へ向かった。

意外と待ち合わせの場所と零弥の家の場所は近い。物の五分で見えてくるが、零弥は違和感を感じていた。言うならば、魔力が見えない様に隠されている雰囲気。それは円状にまるでその中を隔離するかの様に作られている。

なにかあったのか？ そんな思いが過ぎり、速度を速めた。

「どうぶふ！？」

速めたその瞬間、零弥は何も無い空間に捕まる。確かに何も無いように見えるが、まるで水に突っ込んだような抵抗に零弥は抗う。

「どおおおおあー！ー」

少してこずったが、無事にそれを突き抜ける。そして目を瞬くとそこにあったのは灰色の空間だった。

更に少し遠くを見てみると、零弥は一つの人影を見つけた。服装からそれをなのはと判断するが、ぽかんと口を開いた。その理由は単に少女が飛んでいることからなのだろう。

「……うわぁ。飛行する非行少女になっちまったのか」

寒いギャグと笑うことなかれ。彼なりに驚きを示す表現なのだ。ともかく心配はないようなので、零弥はそれに近づいていく。

昨日も使っていたが、つい最近使えるようになった魔法、フライアイフィンと言う魔法を用い、なのは空を飛んでいた。使うには問題ないが、空を飛ぶにあたってそれなりの問題はまだある。まず、臨機応変に動くことができないこと。なのはは資質こそ秘めてるものの、圧倒的に経験が少ない。それでも恐ろしい成長速度で今までやってこれた。だが理論は分かっても体が分からない。元々運動音痴な上について最近ただの小学生だったのだから。無理もない。今しているのは反復練習のようなものだ。

そんな様子を見てもう驚くことはないが、しかし関心が絶えない様子でユーノは見ていた。この年でここまでの魔法の才能を持っているのはもちろん凄い、としか言えない。だが不安にもなる。強くなりたい、と言うなのはの意思は尊重したい。しかしあの少女と話したい、と言うのは些か無理があるのではないかと。もしかしたら、いや、もしかせずともあの少女とはまたぶつかることになるだろう。また問答無用で斬りかかってくるかもしれない。そんな時、話がしたいと言う考えで無事にいられるのか。

ふとユーノが上を見ると、空を飛んだままなのは手を振っていた。微笑ましいそれにユーノは手を振り返す。

と、なのはの表情がなんとも言えない表情のまま固まっていることに気付いた。その視線はユーノの少し後ろを見ていた。

なんだろう、とユーノは振り向こうとする。だが、振り向く必要もなかった。

「ん？ ああ、こっちは気にせず、続けていいぞ」

なにやら聞き覚えのある声。嫌な予感が高まる。意を決して振り向く。そこにいたのは本日の待ち合わせ相手、黒野零弥だった。

「れ、れれれ、零弥！？」

「なんだ人をお化けのように」

「な、なんでここに……」

「なんでって、ここが待ち合わせ場所だろうが。少し早めに来てみれば魔法の練習してるし、見学しようかなあ、なんちって」

「え！？ だって、結界は！？」

「結界？ ああ、あのうによーんってやつか。力一杯で入ったら突破できたぞ」

「え！？ いや！ でもそんなことできるはず」

「できたんだから仕方ないだろ」

ユーノはもうなんと言ったらいいか分からず、頭を抱えた。目の前の人の異常性は理解していたつもりだった。しかし、今回ばかりは予想外だった。

そんな様子をぽかーんとなのはは見ていた。

待ち合わせにはまだ少し早いが、二人と一匹はベンチに座り一休みしていた。とは言っても今の今までびゅんびゅん飛び回っていた彼女だ。少し息切れしていた。そんななのは様子を見ながらユーノは零弥を見上げるようにして質問した。

「単刀直入に聞かせてもらいます！！ 貴方はいったい何者ですか！？」

少しお怒り気味の様子、しかし零弥は、

「知らん」

そんな一言を発し、ひゅーん、と風が流れる。ユーノはこめかみを押さえる。

「じゃあ誰に聞けば教えてくれるんですか？」

「さあ？ 誰に聞いても分からないと思うぞ」

「……貴方は何故ジュエルシードの発動した瞬間に気付くことができるんですか？」

「前に聞いておきたかったけど、それって誰でも感じるんじゃないの？」

「感じませんよ！！ 特に魔力が持たない人なんかは絶対に！！」

「そうなのか。お前らと出会って以来毎度のごとく感じるんだが、病気かな？」

「……もしも本当に感じるんだったら病気じゃすみませんよ」

「それは困ったな……」

ため息をつくユーノの隣で零弥はやや真剣に考え始める。

「零弥さんって剣道やってるんですか？」

会話が途絶え、少しばかり静かになった空間になのはの聲が響く。

「ん？ この事を言ってるのか？」

零弥はベンチに立てかけたケースを持ち上げる。なのはは頷き、興味深そうにこちらを見ってくる。

「……妹がやってたんだ。いや、やる予定だった、かな」
「だった？」

零弥は少し言葉に詰まる。一瞬苦しげに変わったその表情はすぐに朗らかな物へと戻った。

「ああ、死んだんだ。去年」

辺りを沈黙としか言えない空気が支配する。目を見開いた一人と一匹を見て零弥は更に口を開く。

「不幸な事故だった。家族全員で旅行なんて言って、初めての飛行機ではしゃいで……生存者は俺だけだった」

「……それニュースで見ました。でも、確か生きてる人はいなかったって」

「ああ、俺もやばかったからな。意識不明で命を繋いで。奇跡的に生きてたって感じ。……皮肉ってみると不幸中の幸いって言うのか」
「……ごめんなさい」

謝るなのは頭を撫でてやる。ユーノも申し訳なさそうにしゅんとしていた。

「いいんだよ。もう、終わったことだ。……そうだ。一つだけ俺が異常な事に心当たりがあった」

ユーノの頭を優しく撫で、零弥は笑って言った。

「俺、一度死んだんだ」

「……え？」

「意識不明の中で一度だけ心肺停止状態になって。俺は事実上死んだんだ。そして、その日から俺の周りは変わった」

零弥は心の底から嬉しそうに笑った。でもその目だけは悲しげだった。

「こんな話をしたのはお前らが初めてだ。なのは、お前は俺にとって最高のヒーローで、最高の友達だ。だから……そんな顔しないでくれ」

なのはの頬を涙が濡らす。あまりにも悲しすぎないだろうか？ 悲劇と呼べるほどのなにかになのは遭遇したことはない。だが一時期、父が大怪我を負って家族に構ってもらえなくなった際、酷く寂しい気持ちになった。一人は寂しい。それを知っている。今は無事復帰した父、家族みんなに優しくしてもらっている。

だからこそ分かる。

彼がこの先、家族の温もりを得る事はない。

永遠に。

「なあ、なのは。もし良ければいいんだけど。俺にもジュエルシールド探しを手伝わせてくれないか？」

「で、でも！ 危険なんだよ！？」

「だからだよ。お前らが危険な目に会うと考えると怖くなるんだ。だから俺はこれを持ってきた」

零弥はケースから木刀を取り出して見せる。それがジュエルシールドに対抗できるとは到底思えない。でも、何もしなきゃ苦しいし、ただ待つてるだけじゃ怖い。

「力になりたいんだ。俺も、友達の為に何かしてやりたい……ダメか？」

「……そう言われたら、ダメって返せないの。でも、本当にいいの？」

「ああ、何を隠そう。俺は七不思議にもなっている俊足の零弥だぜ？」

それを書いてしまったと口を噤む。今は蛇足だったかもしれない。

「俊足……？ よく分からないけど、凄いんだね。じゃあ、これから一緒に頑張ろう!!」

『いいよね？ ユーノ君』

『……そうだね。放っておいたら一人でジュエルシードがある場所にいきそうだし』

『うん!!』

そこには少年少女達の笑顔が。少年の願って止まない『友達』がいた……

第五話 過去・明るみに出られぬ者（後書き）

今回結界内の魔力を感じられないのは使用したのが飛行魔法で気付
けなかったから、なんていい訳を言う。

間章 平和な一時（前書き）

ストーリーに直接は関連しない部分です。

後悔はない。

間章 平和な一時

それは時刻が午後を回ろうとした辺りだった。

今の今まで飛行する練習をしていたのははベンチに座って眠たげに目を擦っていた。

「少し休んだら帰ろうね」

ユーノにはそう言ったのはだったが、蓄積した疲れの為かそのままベンチで眠りについてしまったのだ。寄りかかってくる姿を見て零弥は仕方がなさそうに苦笑いする。

「おいおい。風引いちまうぞ」
「うゝん。あと五分」

ありがち過ぎる言葉にユーノと共に嘆息する。疲れた彼女を起こすには気が引ける。そうなる一つの考えにぶつかった。

「ユーノ。結界を解除してくれ」
「とっくにしてるよ。どうするの?」

「俺の家、結構近いんだ。そこまでおぶってく」

「……なんか変なことしたりしないよね」

「たとえば？」

それを言つとユーノは口を噤む。少しばかり顔が赤く見えるのは気のせいだろう（フレットだし）

「少し起きろ。これからうちに連れてくから背中に乗れ」

「ふえ〜？ うん〜」

寝ぼけた様子でこくこくと頷き、零弥が背中を向けてやると離さなように服を掴んでいた。ユーノも零弥の肩まで上ってくる。……意外と軽い。

それからすたすたと歩き出す。辺りはいつの間にか人で賑わっていた。

帰路の途中、零弥はふと昔を思い出した。一度だけ、たった一度だけだが妹をおぶって家まで運んだ記憶。いったいいつ頃だっただろう？

『ふえ〜ん！！ 痛いよおにい！』

『ああもう分かった分かった。今回だけだからな』

『うわぁ〜い』

今考えてみるとめったに使わないような言葉を使っていた。もしかしたらはめられたのかもしれない。だが、そうか。

——妹が生きていれば、このくらいなのか。

妙に切なくなるのを感じた。忘れることが出来ずとも、せめて悲しまないようにこの一年間努力していたはずなのだが……

「零弥？」

「ユーノ、お前はなのはを見ててくれ」

自分の顔を覗き込もうとしたユーノを叱咤するかのように命令した。頬に流れる熱いもの。それを見られたくはなかった。

「あ！　なのは。目が覚めた？」
「あれ？　ユーノ君？　ここって……」

起床一番、辺りを見回したなのは自分が今いる場所が見覚えのない場所であることに気付いた。更に自分が寝かされていたのはソファで、見る限りここはリビングであると分かった。

「えつとね、ここは……」
「俺の家だよ」
「「わぁ！！」」

二人の死角に立っていた零弥は別に驚かせるつもりで声を出したわけでもないのだが、ずいぶんと驚かれてしまった。

「…………おはよう」
「お、おはようございます」
「もう昼過ぎだけど」
「えっ！？　嘘！？」

なのはは焦って壁に掛けられた時計を見る。時計はもうすぐ一時を

指そうとしていた。

「大変！！ お昼ごはんの時間過ぎちゃったよ！？」

「ああ、そう言えば何度が携帯が鳴ってたな」

「ふえ！？ そんな！」

「まあ大方お昼ご飯だから帰ってきなさい、とか返信しないけどどうかしたの？ とかだろうな」

「ううう。ホントだ……」

「それでもってそろそろ電話が来る頃だと予想する」

「ふわわわわ！ ほ、ホントに！？」

焦って携帯に出るが、向こうからは冷静にいさめるような声が聞こえ、なのははそれに対して謝っていた。

「そうだユーノ」

「何？」

「飯食っていかないか？ 少し余分に作ってな」

「僕はそんなに食べれないし、なのはに聞いてみてよ」

「それもそうか・・・なのは」

「ああ、ちよつと待ってね。何？」

「飯、食ってくか？」

「え？ でも私これから帰らなきゃ……え？ なに？」

なのはが再び携帯に耳を当てる。

「今？ 友達の家だよ？ ご飯食べていってもいいって？ でも作ったんでしょ？ お父さんが全部食べちゃった！？ そんなあ……うん分かりました。遅くならずに帰りまーす」

「……まあ結論としては」

「いただいでいきまーす！」

「ふわあああ！！ 零弥君お料理上手だね！！」

「ま、伊達に一人暮らしじゃないってことさ。……しかしユーノ、それしか食べなくていいのか？ おつきくなれないぞ？」

「れ、零弥には言われたくないよ！！」

「なに！！ 気にしていることを！！ 貴様にこの俺の身長問題が分かるか！！」

零弥とユーノはにらみ合いを始める。それこそ子供の喧嘩のようだなのはあははと笑いながらもその表情は苦笑だった。

「ったく。俺もなんでかしらねえけどよ。去年から身長が伸びねえんだよ。ただでさえ平均以下だったのに」

「好き嫌いがあるからじゃないの？」

「ぬかせ。俺は子供か。いや子供だけだよ」

零弥は一人でぶつぶつと呟く。そんな時なのはは聞きたかった事を一つ聞いた。

「零弥くん13歳って言うてたけど中学生だよね？ どの学校に行ってるの？」

特に悪気もなしに聞いた質問に零弥はわざわざ爆弾を落とした。

「ん？ 俺学校に行つてないけど？」

「ふえ？ ええええええええええええ！？ な、なんで？ どうして

！？」

「どうしたもこうしたも……ああ、お前らは分からないのか」

「え、えーと……」

「どうせ、俺の居場所はないからな」

「……どうして。そんな悲しいこと」

「帰ってからお父さんに俺の事を聞いてみな。そうすりゃ分かるから」

「？」

「さて、今日はもう帰って休め。明日からお前は学校だろ？」

「う、うん。そうだけど」

「送ってってやるから。そんな顔すんなって」

零弥は食器を水に投げ入れ、壁に立てかけた木刀を手を取った。

「零弥君はまだ練習するの？」

「だって俺明日も暇だもん」

けらけらと笑う零弥をなのはなんとも言えない様子で見っていた。

「ここまで送れば大丈夫だろ？ またな」

と家の随分近くまで送ってもらったのは達はお疲れモード全開で玄關を開いた。

「ただいま」

「おおなのは。お帰り」

「お父さん！ 私のご飯なんで食べたの！？」

そこには昼の休みを利用して一時帰宅した高町士郎だった。

「いいじゃないか。父さんはなのはが友達に会いに行くって言うからてつきりお昼ご飯もいただいてくるかと思っただんだ」

「もう……すずかちゃんとアリサちゃんじゃないよう……今日は零弥君とお話に言ってたの」

ほとなのはは会話が途切れた事に気付いた。顔を上げて見てみるとその目は怒りに燃えていた。

「なのは！！」

「は、はい！！」

「男の子のお友達と遊びに行ったのか！？ それも父さんに紹介もなしに！！」

「ごめんなさい！！……ってお父さん。私ちゃんと紹介したよ！！」

「なに？ それはいつだ？」

「少し前にサッカーの応援に行ったときだよ。覚えてないの？」

それを聞くと士郎はこめかみを押さえ、そう言えばと言う様な顔になる。

「サッカーの試合……ああ、思い出した。と言うよりなんで思い出せなかったんだ？　こんなに鮮明に思い出せるのに……」

なのは動揺する父を心配そうに見つめていたが、ふと零弥の事を思い出した。

『帰ってからお父さんに俺の事を聞いてみな。そうすりゃ分かるから』

（零弥君が言いたいのはこのことだったの？　じゃあこうなることが分かっていたの……？）

なのは頭の中はあの寂しげな表情で埋め尽くされそうになっていた。

第六話前編　ここは湯のまち、海鳴温泉だ（前書き）

更新遅れてすいません。
就職難なんです（涙）

第六話前編　ここは湯のまち、海鳴温泉だ

さて、現在日本国内では全国的に連休だ。

なのはの父、士朗が経営する喫茶翠屋は基本的には年中無休だが、連休の際は店員に留守を頼み、家族旅行に出かけるのだ。

今回はなのはの家族（父、母、姉、兄）とアリサ、すずかとその姉、そして月村家のメイド姉妹が参加していた。

たまにはのんびり温泉につかって、日ごろの疲れを取ろうと言うことで一同はとても賑やかだったが、なのはは一抹の不安を抱えていた。

それは、少し前に零弥に会った際に起きたことだ。

「家族旅行？」

「うん！ だからその日は休みってことでもいいかな？」

「ま、いいだろ。引き止める理由もないし、ゆつくりくつろげば良いさ。それで、何処に行くんだ？」

「海鳴温泉に行くの！ お土産買ってくるから楽しみにしててね」

「……いや、土産はいい」

「どうして？」

少し考える素振りを見せる零弥の顔を覗き込んでみると、特に気にする様子もないように言った。

「ん？ ああ、俺も行くからな」

「ふえ？ ええええええ！？」

「なんだその驚きようは。俺が行くと都合が悪いのか？」

「い、いや。そういうわけじゃ、ないんだけど……」

「心配せずとも別に一緒に連れてけとも宿代払えと言ったわけでもないだろ。俺は俺で個人で行くんだから。だから別に宿の場所を言う必要もないし、見かけたら声をかけるくらいでいい」

「ああ……うん。分かった」

いまいちなんと返したらいいか分からないまま、二人は別れ今に至る。

共通の秘密であるジュエルシードのこともあるのかもしれない。

先週協力すると約束してからは零弥は毎日をジヨギングと称した散策でつぶしている。空いた時間だってほとんどを剣の鍛錬に回し、体は随分悲鳴を上げているだろう。

しかし、一向に見つかからないジュエルシードに焦りを感じていたのはなのも零弥も同様だった。

そして、そこから無茶が生まれなはずがなかった。

零弥は努力している。墮落した体と精神を叩きなおしながらジュエルシードを探し続けている。

だが成果がない、それが余計に力を使わせた。

（零弥も今回はしっかりと休んでくれればいいんだけど……）

なのはに念話でしっかり休むように言うとユーノの頭にはそれが浮かんだ。それに彼を疑う様子はもう見られない。いや、正体も素性も、性質すらも異常と言う面ではなんらかの危険性は危惧していた。しかし、なのもユーノも、零弥と言う人間の底と悲しさを知ってしまった。

いろいろもろもろ異常な部分はあれど、零弥は白。そう判断をしたのだ。

高町家ご一行が向かっていた宿は森に囲まれた自然多き場所だ。空気はとても新鮮で、最高に快晴と言うこともあって、なのはは友人達に囲まれ笑顔でいた。

それを見てユーノはようやっと心から安堵の息をついた。

「じゃあさっそくお風呂に行くわよ!!」

「「「さんせー!!」」」

アリサの声でみんなが高らかに声を出す。わいわいきゃあきゃあしながら風呂場へと向かっていく。

一方、男二人は……

「よし！ 恭也も風呂に行くか？」

「そうだね。行くよ」

『じゃあなのは、後で』

『なんで？』

『なんでって、僕は恭也さんや土朗さんと一緒に男湯に……』

『別に一緒にいいじゃない？』

『えっ！？ でも僕は……』

『いいから、わたしと入るのいや？』

『いや、そう言うわけじゃないけど……』

結局明確な答えを言えないままユーノは女湯に連れて行かれた。

「うん。やっぱりここが正解だな」

なのはの父、高町士朗はタオル一枚で重要な場所だけを隠し、風呂を見回す。同じく恭也もそう思っただけでなく一つ頷いた。

どうも今は二人以外誰もいないらしい。体を流し、女湯から聞こえる楽しげな声を背景に二人は湯につかる。

「……楽しそうだな」
「そうだね」

そんなことを言う士朗の顔には達成感に似た喜びの入った笑顔だった。今年もこうして旅行が出来て、尚且つ喜んでくれれば一家の大黒柱としての冥利に尽きる。

「——ぷはっ」

ばしゃ、と水を弾くような音に気づき、二人は少し向こうに視線を向ける。

ぜえぜえと息を荒げながら肩まで湯につかった少年がいた。もぐつていたらしい。横顔しか見えなかったが、その顔はどこかで見たことがあるような気がした。

少年は視線か、はたまた別の何かに気付いたのかこちらを見た。

「いたんですか。すいません……あれ？　もしかして、なのはのお父さんですか？」

そんなことを言い出す零弥に士朗の目は鋭くなる。よく見ると年はなのはと大して変わらずに見える。更にこのはつきりしないもやもや感がなにやら不快だった。

「父さん。この子はなのはの知り合いかい？」

「……だったはずだが。どうしても思い出せない。すまない少年」「黒野零弥です。人に覚えられにくいのは今に始まった事でないのでお氣遣いなく」

士朗はハツとする。そうだ。一度この少年とは会っている。なのはからも数回話を聞いていたはずなのに……

（何故、覚えることが出来ないんだ？）

「そこの方はなのはの兄さんとお見受けしますが……まさかなのはも？」

「ああ。高町恭也だ。この声を聞いたら分かるかな？」

零弥は耳を澄まし、女湯からの喧騒の声を聞く。

「ああ……アリスやすすかも、ユーノも一緒か。面白く偶然だな」

零弥は立ち上がり、一言「お先に」、と言って出て行くとする。
その際、士朗は見た。彼の手、そこには無数の肉刺^{まめ}があつた。しかも全部治りかけ。つい最近より無茶を始め、今に至ると言う痕跡が見て取れた。

しかしそんな物を完全にチャラにするような物があつた。

隠せるはずもない、背中にある肩から腰まで届くほどの巨大な傷跡。更に胸にも背中に比べると大きくはないがやはり傷跡。

士朗は何も言えず、零弥を見送つた。恭也に至つては言葉を失つてしまったようだ。しに傷が見掛け倒しなどでないことはすぐに分かつた。しかし、心がこう言う。

『彼に関わるな』、と。

「……父さん？」

「……なんでもない」

なのはの友人を助けたいと言う気持ちと本能に近い心の悲鳴に士朗は戸惑っていた。

そして、運と自分を頼りに生きてきたからこそ、今回は見送つた。

(さて、どうしたもんかな……)

零弥は思わぬ偶然に笑顔を浮かべていた。なのはの父が自分を覚えていなかったことは少し残念だった。高町家全員がなのはのように覚えていてくれる訳ではないようだ。

風呂も上がってしまい、暇になる。散歩なんてせずとも零弥は昨日――
――連休が始まる前からこちらに來ているために、辺りは歩きつくしてしまっていた。

『ジュエルシールドがここにならあるような気がする』

それは直感であり、ある種の願いでもあった。休んでいても零弥にはプレッシャーがあった。未だなのはの力になれていないと言う重

責が。

それも踏まえて今後の方針を考えながら旅館の中を歩いていた時の事だった。

「君かね。うちの子をアレしてくれちゃってるのは」
「……？」

道を曲がろうとした寸前に聞こえた話声。たちの悪い嫌がらせにか聞こえない言葉に我関せずと言うように出て行こうとするが……

「なのは、お知り合い？」

若干苛立ちを含めた強気な言葉。それには結構前だが聞き覚えがある。その上に聞き覚えのある名前。

道から顔半分だけ出してそちらを見ると赤く長い髪を一つに束ねた女性がなのは達三人を見下ろすようにしていた。

（助けは……いらなそうだな。それより、なんだあの女……）

別になのは達につつかかっていることになにかを違和感を感じるわけではない。しかし、そいつからはなんらかの異常性を感じる。そしてなのはに対してなにか言うということは……

(……敵……か?)

つい最近なのはに聞いた黒くて金色の髪の少女魔道士の事。もしかしたらその関係者かもしれない。

(……だとしたら、何故ここにいる?)

なのはを見に来た。と言うのもあるが、わざわざそこまでするのか。敵の偵察の必要性なんて戦術理論は分かりはしない零弥は一つの答えにぶつかる。

(ジュエルシードがこの辺りにある……?)

だとしたらなのはの協力を仰ぐ必要があるが……零弥は赤髪の女性が去っていくのを見てから文句を言うアリサとそれを諫める二人を見る。

——いや、休日とは休日のままでいさせてやろう。

零弥はなのは達が赤髪の女性に念話で話されていた事も知らず、一

人で探すことを決めた。

第六話前編　ここは湯のまち、海鳴温泉だ（後書き）

11月21日に傷の修正。

第六話中編 強き願い、守りたい物

夜も遅くなり、零弥はようやく散策を始めた。するならばなのは達が寝静まってからと決めていたからだ。

発動したら何も出来ないのに、今回は発動前に止められるような自信があった。

とは言ってもブラブラしていることに大した意味はない。発動の瞬間に感じるだけでジュエルシードの現在地が分かるわけでもないのだから。その背に背負う木刀もなんだか弱弱しく感じてしまう。

そういえば、と零弥は森の中を歩きながら思考する。ユーノはジュエルシードは願いを叶える力があるが、元々不安定な力なために暴走すると言っていた。

では最初の怪物も、あの大樹も、いったい何を願ってああなったのだろうか？　なのは達が先週出くわした猫は巨大化しただけで願いが正しく叶えられたのだと言っていた。

それほどまでにとんでもない力を秘め、更に暴走しかけなジュエルシードが普段何も起こらずにいられるだろうか？

零弥は一つ思い当たる。もしも近くにあるのなら少しくらい力が漏れてもおかしくない。そしてそれを頼りに黒い少女がこの辺りにいるならば……

少し歩いて大きな川に出る。心地よい川の流れる音に零弥は耳を澄ませる。

ユーノは自分を異様の存在のように言っていた。こちらからすれば喋るフェレットの方が異常だと言ったことも考えながらそれを聞いた。

魔法使いでさえも異様に敏感な自分ならば、見つけられるはずだ……っ！！

座り込み、目を瞑る。川の音を聞く気で力を探れ、見回すように心の目を開け。

そうすれば……

そうすれば、俺はあの子の力になれるはずだろう？

——闇の中に輝く、一抹の光を思わせる力。

（これは……かなり近い！！）

目で見たわけでもないと言うのに直感で分かる。耳鳴りが鳴り、まるでなにかの胎動のようにも聞こえる。

音が聞こえる方へ……ゆらりゆらりと揺れるように歩いていく。だんだん大きくなる耳鳴りに確信を持ち、零弥は川に沿って歩いていく。

そして鼓膜が破れるほどの耳鳴りは唐突に止む、そして目の前にあった草むらを書き分ける。

「……ジュエルシード」

青い、小さな宝石。紛れもなく、それはジュエルシードだった。

「落ち着け……手で触ったら危険っぽい」

零弥は懷から小瓶とピンセットを取り出す。……なかなか頼りな

い。だがそれも彼なりの配慮だ。

あとは発動さえしなければ……

零弥は発動するなと念を込めながらピンセットを近づけ、摘む。

すると、

特に、何も起こらなかった。

「……ふう、驚かしやがって」

実際冷や汗だらだらで心臓ばくばくなのだがあくまで口には出さない。いや、どちらにせよそんな余裕はないというべきか。

それを布に包み、小瓶に収納する。絶対とは言わないが、これでかなり心は軽くなった。

自分にだって、出来る。

そうして頷き、帰路に着こうとする。

「ちよいとそこのアンタ、待ちな」

そんな声が聞こえなければは、本当に心から安堵していたはずなのに・・・

恐る恐る振り返ってみると、そこにいるのは昼間なのは達につつかかっていた赤髪の女性だった。

流石にこの可能性を考えていなかった訳ではないが、迂闊だった。

「こんばんは美人さん。こんな真夜中にお散歩ですか？」

「そうだねえ。あんたみたいな子供を食べちゃう為かも知れないよ？」

そう言って怪しく光った目には友好的な物とは絶対思えない感情があった。

「おお、それは怖い。では俺は早々に立ち去らせてもらいますよ」

そう言って川に沿っていくように歩いていくとする、が。

「その瓶の中身をどうするか。お姉さんに教えちゃあくれないかい？」

「……さて、なんのことやら」

「とぼけるんなら……痛い目見るよ？」

鋭いその目は零弥を射抜く。

・・・殺気っ！！

冗談抜きで、今にもこちらへ駆けてきそうだ。

なのは達は、たぶん無理だ。携帯を取り出したところで邪魔されるだろう。

「ああ、うん。そうですね。友人へのプレゼントってところ……ですかねー！」

「っ！？」

即座に足元の地面を蹴り上げ、逃げの体勢に入る。ジュエルシードの入った小瓶をポケットに入れて全速力で走り出す。

捕まったら……はつきり言って勝てる気がしない。

確かこの先には橋がある。そこから……

——そこからどうする！？

「無計画過ぎるだろ俺よ!!」

とりあえず走るのをやめると言う選択肢は頭になかった。それこそ無謀だ。魔法使いと正面から戦うなんて冗談じゃない。

その日の満月は強く辺りを照らしていた。それは良くも悪くも視界を良好にしていたのだから転ぶことはない。そしてようやく見えた橋。だが、あの影は……？

いや、その影は揺れていた。闇夜を称するような黒いマント、金の髪、そして黒い杖。

なにもかまがなのはの言っていた通り、黒い魔法少女はいた。

(どうするどうするどうするどうする——ッ!!)

その時、森の中から急に飛び出してきた赤髪女は完全に獲物を追う目になっていた。そして愚かにもそれを間違った方向に避け、橋の上に飛び出してしまった。

完全に挟み撃ち。ここに来て詰んでしまった気になってしまう。

「さあて、もう逃げられないよ?」

「……そうみたいだな」

「おや? 案外冷静だねえ?」

赤髪の女が勝ち誇った目でこちらを見る中、黒い魔法少女は無表情だった。——いや、目の中のどこかに、零弥を疑う様子が感じられた。

疑われているのは正体ではなく、

「……貴方は何故それを見つけられたのですか?」

「……それを答える義務はないと思うが?」

「馬鹿だねえ。ここまで来て今のアンタに黙秘権が通る訳ないだろ」

「……それもそうか。別に、ただの直感さ」

半分嘘で半分ホント。元々自分の能力を信頼してる訳でもないし、なのは達の役に立つためにあるような力だ。だがそもそも一度隠そうとしてから直感なんて言葉が通じるだろうか?

「……言う気はない、と取らせてもらいます」

「どうぞご自由に。で? 俺はもう帰っていいのかな?」

「あなたの持っているジュエルシードを渡してくれたなら、見逃します」

「意外とお優しいねホント」

このままうまく逃げれるなんて元々思ってはいない。だが戦ったところで勝てるのか？　なのはも勝てない相手に？　この俺が？

ほぼ100パーセント無理だろう。魔法なんか使われたら五秒で塵になれる自信がある。

「……はあ。ま、いいか」

諦めがにじみ出る呟きを吐きながら背の木刀に手をかけた。

「なあ、嬢ちゃん」

「……なんですか？」

「どうしたって守りたいもの、あるか？」

「……？」

少女が戸惑った様子でこちらを見る。いかしそんなのお構いなしに零弥は口を開く。

「俺もあつたんだ。守りたいもんがさ。それが今じゃこんなザマ。でもよ、意外と悔いはなかったりするんだぜ？」

自分の命に代えても守りたいもんがある、今ならよお！」

背の木刀を強く引き抜き、少女に斬りかかる。罪悪感はある。だが
そうしなければジュエルシードはもって行かれる。

「!!! つく!」

「はあ!!!」

あまりに咄嗟のためか杖を盾にされる。そして疑問に思う。この
まま力を入れたら倒してしまえそうだ。そう、この少女はなのはと
同じだ。魔法なんてとんでもない力を持っているようが、体はただの
少女だ。

「フェイトから離れな!!!」

後ろから聞こえた赤髪の女の声。そうか、この少女はフェイトと言
うのか。

そんな事をのんびり考えながらも体は動いていた。フェイトを強く
押し倒すと振り返り、迎撃する。

撃たれた拳を木刀で受け、勢いがなくなっ たところでそれを振り払
う。

そして、気付くと最初と変わらない状況になっていた。ただもう二
人が油断している訳もないが。

「……けっこう、うまうまいかないもんだな」

「……魔力もない一般人にしては上出来すぎると思うけどね」

「お褒めに預かりどうも」

軽口を叩いて見せてもその目に余裕はない。

「——あなたは先程聞きましたね。守りたいものはあるか、と」

「……ああ」

「今、その答えを返します」

フェイトの目にはある一つの強い感情が浮き出ていた。決意にも似て取れるような、そんな気持ちだ。

「私にも大事な物があります。そして、それを守るためなら……世界を敵に回しても悔いはありません」

「……言っじゃん」

「アルフ、下がってて」

「わざわざフェイトがやらなくても」

「アルフ、お願い」

「……へいへい」

正真正銘の一对一。そして、今自分にあるもの全てを出し切り、戦

わなければならない。

『Scythe form・Setup』

フェイトの手にあるバルディッシュは形態を変え、大鎌を形作る。

「うつわ。いいもん持つてるなあ」

「……心配せずともこれはあなたの体を引き裂いたりしません」
「そりゃ、ありがたい心遣いで!!」

二人は同時に走り出し、己の武器を振るった――

第六話後編 過去の誓い

ユーノとなのはは一抹の不安を抱えていた。

それはその日、ある人物にあつたことからだった。

赤い髪をしたその女性は唐突になのはに話掛けてきた。

絡まれた、と言った方が正しかったのかもしれない、客観的に見たら・・・だが。

『今のところは挨拶だけね。忠告しとくよ。子供はいい子にしてお家で遊んでなさいね。おいたが過ぎるとがぶつと行くわよ』

それは実際に声として聞こえたものではなく、念話と言う特殊な方法での声。

それは魔力を持つものにしか聞こえず、使う事は出来ない。

夜、皆が寝静まる頃、なのははそれを思い出していた。

間違いなく、魔法に関連のある人物。それは間違いない。だがその正体は不明。

——いや、一つだけ覚えがあつた。

先日あった自分とそう年頃の変わらないもう一人の魔法少女。その子を思い出していた。

何も起こらなければいい。祈りにも似た感情であるそれには少しのあきらめが混じっていた。

「はあああああ!!」
「つあああああ!!」

激しい剣戟とはとても言えず、しかし力強く、二つの小さな影はその手の武器を振るっていた。

片や高機能なデバイス、片やただの木刀である。接近戦だけの戦闘

たとえば、やはり限界がある。

「だらああああ!!」

「やああああ!!」

なんと打ち付けただろうか？ 機械的な硬さを誇るバルディッシュに対し、零弥の武器は貧弱すぎる。

ミシミシと言う木刀の悲鳴を聞き、零弥は少し多めに間合いを取る。

このままではダメな事は目に見えていた。しかし、巨大なバルディッシュを振り回されることなく使いこなすフェイトが相手では、分が悪すぎる。

突攻は一度限りの切り札。だが、今はそれを使う他ない。

「これで最後だ……行くぞ!!」
「っ!!」

強く地面を踏みしめ、零弥は懇親の力で木刀を振り下ろす。
今までになく大きく踏み込んできた零弥に驚くことこそあれど、フェイトは冷静さを失うことはない

「おおおおおおおおおお!!」

雄たけびにも近いような声が響く。完全に受けの形を取っているフ
イトに対し、更なる力を注ぎ込む。

だんだんとバルディッシュは押されていく。如何に強い魔法だろう
が、如何に高性能なデバイスだろうが、使わなければそれで終わっ
てしまう。

あと一押し、そんな状況で零弥は見る。見てしまふ。

苦しげに滲む、少女の顔を。

『お兄ちゃんは、るみが困ってたら助けに来てくれる？』

完全に力が緩む。そしてその機を逃すはずがない。

弱まったそこから、バルディッシュで押し返される。
大きくのけぞり、そのまま背中から橋に叩きつけられ、顔を苦悶に
歪める。

そしてその際、懐からこぼれる小さなもの。

「しまっ——」

伸ばした手は届かず、ジュエルシードを入れた小瓶は川へと落ちる。

感じる寒気、それを意味するのは。

「……発動する……っ!」

直後、光の柱が天に届く勢いで立ち昇った。

(……ジュエルシードが)

少女、フェイト・テストロッサは立ち昇る光を見上げていた。

だんだんと細まるそれを見て、次は光の立ち昇る場所を見る。

元々ジュエルシードは発動を待つつもりであった。発動していない状態のジュエルシードの搜索は困難であり、発動したその瞬間が一番はつきりしていた。

しかし、それは一人の人物に妨げられる。最初はアルフが近くに人がいると言っただけだった。実際には大した問題になることはない。見られたからと言って困ることはない、そう思っていた。

しかし、突如気配が薄くなったジュエルシードとアルフの行動で予定は狂った。

近くにいた人物がジュエルシードを発見し、隠したと言うのだ。あまりにも予想外な事態に結局こんなことになってしまった。

ジュエルシードを確保したのは一人の少年だった。年も自分と余り変わらないように見えたし、何より魔力を感じられない少年を偶然とまで考えた。

だが、まじめに考えて来たばかりの人間が偶然にも小さな宝石を見つけ出し、偶然持っていた小瓶に入れるだろうか？

先日の少女はもちろん、ロストロギアの探索者に関係するものには到底見えない。

しかし、警告する体が本能が。

まともに扱うな、と。

今はその少年を気に留めている暇はない。目の前の暴走したジュエルシードを再度封印し、持ち帰る。
それが……

立ち昇った光が消えた時、そこにいたのは水で形作られた巨大なうなぎのような生物だった。ただひれの部分が片方二本の触手のようになっている、うねうねとうごめいている。

「っ！！ アルフ！！」

「おやおや。ようやく私の出番だっ」と

アルフはのんびりした様子の割にはすぐにフェイトの言葉に反応し、動く。

それを確認したフェイトはバルディッシュを握りなおす。

が、

(……手に……力がっ！)

零弥が最後に放った一撃はフェイトにあたることはなくとも、その衝撃を腕に伝えていた。

そんな時、怪物の触手がフェイトを穿つ勢いで放たれる。

「フェイト！！」

まさか動けないとは思わなかったのだろう。アルフが悲鳴に近い声でフェイトを呼ぶ。

迫り来るそれに目を見開き、更に腕の痺れでバルディッシュを落とす。

抗うこともできず、フェイトは強く目を閉じた。

(……？)

いつまでたっても痛みなどこない。恐る恐る開いたその目には小さな少年が映っていた。

『お兄ちゃんは、るみが困ってたら助けに来てくれる？』

先程頭に響いたその声は、今度は力へと変わる。

「当たり前…手だっつーのっ!!」

触手を受け止めた木刀がミシミシと音を立てるのが聞こえる。だが引かない。自分だけ逃げるなんて選択は二度としない。

「気絶した訳じゃないんだろ？　ならさっさとそれ拾え!!」

「……どうして？」

「どうしてもこうしてもあるか!!　俺は負けた。お前に負けた。でもそれは、お前を見捨てる理由には絶対ならねえ!!　増してお前みたいな子供ならなおさらなあ!!」

触手を押し返す事は出来ない。その為には力が足りない。

なら苦しげながら後ろで膝をつくフェイトを頼るしかない。

「お前と俺は戦った!!　でもそれはお前が敵である理由にはならねえ。敵じゃないなら助ける。それが俺の、せめてもの誓いだ!!」

そんな言葉を口にしながらも少しずつ押され始める。その表情に余裕がなくなっていく。

そんな時だった。それが聞こえたのは。振り向く余裕など零弥にはない、しかし分かった。

零弥を真横から風ぐように触手が振りかぶられる。だがもう時間稼ぎは必要ない。

防ぐすべなどなく、零弥は真横から与えられた衝撃に甘んじて意識を閉じる。

最後に、バルディッシュを怪物に向けたフェイトを目の端に捉えながら……

第七話 因果な関係（前書き）

最近1ページ書くのに3時間くらいかかっても気にしなくなってきました。

第七話 因果な関係

「ん……んん？」

暗いその部屋で零弥は目を覚ました。

窓があつたが日が入ってくる様子はない。それは未だ夜であることを示していた。

気を失う直前までの記憶は驚くほど残っていた。怪物に横殴りにされたのを最後にそれは途切れている。

「気がついたかい？」

わずかな月の光で照らされた場所から聞こえた声に零弥は表情を強張らせる。聞き間違いじゃなければその声は……

「なんだい？ 変な顔して」

「……いや、別に変な意味はないんだ」

いたのはフェイトと言う少女と共に行動していた女性、アルフだった。いまだ暗い部屋ではその顔以外が暗くて見えない。

「助けてくれたのか？」

「別にあたしが助けたかった訳じゃないよ。あの娘がどうしてもって言うからね」

「そうか……あとで礼を言わなきゃな」

零弥はそんなことを言いながら窓の外に視線を向けた。

「あー、そうそう。あんた寝てたからしらないと思うけど、もうあれから二日も経ってるんだよ」

「二日！？ そんな大怪我したつもりはなかったんだが……」

「吹っ飛ばされたその先にでっかい岩があつたと知らなかったらそうだろうねえ」

それを聞いて零弥はとことんついてないと顔を伏せた。少し体がずきつとするが大した問題ではない。

「あんた、もう少し安静にしてなよ。骨が何本か折れてるんだから」

そう言っただけで慌てたように近寄ってくるアルフはフェイト同様悪い人間ではないことが伺えた。戦ってみたから、なんてそれだけで相手の意思が分かるほど剣の腕はないが、戦いにかける思いは伝わった。

「……って、ん？」

「……あたしの頭になんかついてるかい？」

「いや、なんかっ言うか……耳が」

アルフの頭には犬のような獣の耳が付いていた。魔法使いの間で有名なファッションかなにかだろうか？　と零弥は少し考える。

「ああ！　なるほどね。これは元から付いてるんだから気にしない気にしない」

「……気にしない方がいいなら、なるべく気にしないけど」
「そうそう。子供は素直に、ね」

耳を隠すことなくあははと笑うアルフを若干理解できないように見える。

そんな時、扉が開く音がしたかと思うと部屋に明かりがついた。

「……起きたみたい、ですね」
「ああ、おかげさまでな」

明かりをつけたのは金の髪をツインテールにした少女、フェイトだった。少しホッとした様子が伺える。

「なんで俺を助けたんだ？」
「あなたがそれを私に問いますか？」

そう言ったフェイトの顔は困ったように苦笑いしていた。
それを見た瞬間、零弥は悟る。

—— ああ、この子もなのは何も変わらない女の子だ。

「それはそうと、あんたはあの白いおちびちゃんの知り合いなのかい？」

「白いおちび……ああ、なのはの事か？ まあ俺はあの子の為にジュエルシードを探していたからな。知り合いと言えば知り合いだ。会ったのか？」

それを聞いた瞬間、二人の表情がやや暗くなったことに気付いた

「……ごまかさないんだね」

「命の恩人になら流失していい情報くらい流すさ。大体、俺は君達が嫌いじゃない」

「嫌いじゃない……？」

「嫌う理由もないからな。そっちもこっちも自分の目的の為に戦ったんだからな。だから暴れだして返せなんても言わないさ。あると半ば気付いて一人で探しに行った俺の落ち度だ」

「……貴方もジュエルシードを感じることが出来るの？ それも魔力もなく。どうして？」

「……それに関しては俺も良く分かんないんだけど……」

零弥は簡易的に自分がジュエルシードに反応できるようになったきっかけを話した。

もちろんそれだけの要因でそんな特殊な反応をするようになった前例はない。
納得のいかない様子の二人に零弥は蛇足かもしれないと思いながらも付け加えた。

「一度死んだのが、原因かもしれない」

「どういうこと？」

「事故で。一回心臓が止まったんだ。その時に、父さんも母さんも、妹も皆失って。妙に妹の姿が君やなのはに被るんだ。……いまでも助けてって声が聞こえる気がする」

「……あなたは……」

ふと二人の悲しげな視線が自分に向いていることに気付く。こんな空気にするために話したんじゃないのに。まるで言い訳のようだ。

「悪い。初めて話すにしては関係ない事を話した。とにかく俺はジユエルシードを感じることが出来る。どこまで出来るのかは自分にもいまいち分からないけど」

「いえ、貴方は悪くありません。発端はこちらです。すいませんでした」

申し訳なさそうに頭を下げる。ツインテールが大きく揺れる。

「黒野零弥だ。年も変わらないみたいだし、変に敬語を使う必要もないさ」

「……はい、零弥。私はフェイト。フェイト・テストロッサ」
「アルフだよ。って言わなくてももう分かってるか」

一端の自己紹介を終え、そこにいたのは先日まで敵とは思えない三人だった。

なのははずっと悩んでいた。

先日、海鳴温泉で再び金の髪の少女と遭遇し、再び負けた。
しかし、負けたから悔しいなんて気持ちな訳ではない。理由はそれだけではない。

それ以来連絡が途絶えた零弥の事、取られてしまったジュエルシードの事、金の髪の少女の悲しげな瞳。

そして、アリサに怒られてしまったこと。

なのはの中では様々なことがぐるぐると周り続けていた。
だが、それでもはつきりとしていることが確かにあった。

「なのは・・・大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ。今日は塾もないし、晩御飯までゆっくりジューエルシード探しできるよ。一緒にがんばろ」

コーノはそれを聞きながらもなのはの顔を見、口ごもる。

無茶なんてしていない、言葉にするならそんな表情をしていたからだ。

「ジュエルシードを探しに行くのか？」

「……うん」

「そうか……」

零弥が見たのはマントを羽織り、グローブをしたフェイトだった。手の甲にはインテリジェントデバイスであるバルディッシュもついている。アルフは今はいなかった。何故なのかは零弥には分からなかったが。

「……こんな事を俺が言えた事じゃないけど、言いたい事が二つほどある」

「なに？」

「なのは、あの子の声に少しでいいから耳を傾けてやってくれな
いか？ いろいろ理由があつて対立してるみたいだけど、あの子の
言い分を聞いてやって欲しい」

「……分かった」

「あともう一つは……無茶はしないでくれってことだ。友人として、
最低限の心配だが」

「……友人として……」

「フェイト！ あたしは準備できたよ！！ ……ってなんだか妙な
雰囲気だね。零弥、あんたフェイトになにか変なことをしたんじや
ないだろうね！」

「心外だ。アルフも、無茶すんなよ」

「へいへい。一応考えといてやるよ」

「……いまいち信用できないな」

少しばかり和やかな雰囲気のまま、二人は出発した。零弥はそれを見送り、ソファアーへと腰掛ける。そこには巨大な窓があり、覗くことで町を見下ろせた。

（……胸騒ぎなんて今まで感じたことないけど）

「今回ばかりは妙に嫌なことが起きそうな気がする」

零弥は窓から、見える空を見上げる。
まだ赤いその空は嫌な事ばかりを連想させた。

第七話 因果な関係（後書き）

なんか主人公口調代わったっぽいな。では次も張り切っていこう。

第八話 笑顔と後悔と

なのは既に封印が完了したジュエルシードを見上げるようにたたずんでいた。

アリサやずずかと初めて会ったときはまだ友達じゃなかった。

話を出来なかったから。
分かり合えなかったから。

アリサが怒ったのも、自分が本当の事を、本当の思いを隠していたから。

「やった！　なのは！！　はやく確保を！！」
「そつはさせるかい！！」

後ろから聞こえたユーノの声、上から聞こえたアルフの声。

落下するように飛び掛ってきた獣状態のアルフをユーノが障壁を張って受け流す。

しかし、それは脆くも砕け散った。

見上げたそこにいたのは金の髪の少女、フェイト・テストロッサ。

目的がある同士ならば、ぶつかり合うのはまた、仕方ないのかもしれない。

だけど、知りたい。

なのはは二歩ほど歩を進め、フェイトを見たまま口を開く。

「この間はちゃんと自己紹介できなかったけど、わたしなのは！
高町なのは。私立聖祥大附属小学校3年生！！」

『Scythe form.』

なのはの言葉が無駄と言うかのようにバルディッシュの形状を大鎌へと変化させる。

それを見てなのはもその手のレイジングハートを構える。

（どうして……そんなに寂しい目をしているのか……）

そして、二人の戦闘が始まりを告げる。

零弥は一人、夜の街を見下ろしていた。そこから見える建物ほとんどに見覚えがある気がするが結局は分からなかった。体の一部はまだずきずきする場所があるが、特に行動には問題はなかった。アルフはどこかの骨が折れていると言っていたが、もしかしたら魔法などで修復してくれたのかもしれない。

この建物にいて、つい先程気付いたことなのだが、なのは達の魔力、と言うかそんなものが感じる事ができなくなっていた。自身の力の認知としては魔力やジュエルシードの場所が分かるだと思っていたがどうも違うらしい。

憶測を超えないが、自分が間近で見た、もしくは実際に受けた力を記憶し、一定パターンとして探り出す。大体はそんな感じな気がする。前にフェイトを感じたときはなのはの近くにいたため、それは別と感じ取ってしまったのかもしれない。

しかし、元は人間の自分にそんなものがあるとは未だに信じられず、どうも自信が持てない。

（現に今なのはやフェイト達を感じられないのは、この建物にいるからなのか、それとも俺の力が欠陥なのか……）

零弥は空を見上げる。綺麗な月の光が差し込み、明かりのない部屋を明るく照らす。

それを見て思ったのはフェイトの事だった。

つい先程まで話していた少女は普通の少女にしか、見えなかった。ただ、なのはが話しに出た時の悲しげな目が、未だに記憶に残る。

そんな事を考えていた時だった。それほど遠くない場所で天を貫くように光の柱が立ち昇る。

考えずとも分かる。ジュエルシードの発動だ。

しかし自分の体がいつものように反応する様子はない。やはりこの建物にはユーノの結界のような力が発動していて、それが自分と外を切り離しているのかもしれない、と零弥は考えた。

——嫌な予感は未だに消えない。

光の柱が消え、少し時間が経過する。もうすでに封印を完了させたのか、それとも歪んだ願いが叶えられ、今街の中を暴れまわっているのか。

答えは分からない。だが祈ることしか出来ない。非常に……歯がゆい。

結局自分は何も出来ていない。手伝いたいなんて思っていないながらも

あの日から自分は何も変わってはいない。

「フェイトちゃん!!」

「っ!?!」

空中での戦闘の最中、なのははフェイトを呼びかける。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど。だけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきっとあるよ!!」

「ぶつかりあったり、競い合ったりするのは仕方ないのかもしれないけど、だけど! なにも分からないままぶつかり合うのは私、嫌だ!!」

フェイトは驚き、その眼を見開く。

『いろいろ理由があつて対立してるみたいだけど、あの子の言い分を聞いてやって欲しい』

零弥の言葉が頭に響く。小さく、静かに。だが武器を向けるだけして攻撃をしない目の前の子の話を聞く気に少しはなった。

聞いたのはユーノと言う人物——おそらくあのフェレット——
——がジュエルシードを発掘していたが、それがこの地域に散らばつてしまい、それを回収にきたこと。

そこになのはが現れて手伝いをするようになったこと。だが、今は手伝いじゃなくて自分の意思でジュエルシードを集めていること。

自分が暮らしている町や、自分の周りの人たちが傷つくのは嫌だから。

「これが、私の理由!!」

そう言い放った少女に、フェイトは自分でもよく分からない感情を覚えた。

そして、零弥がああいった事も少し納得できた。フェイトの目が悲しげに伏せられる。

「……私は」

「フエイト！！ 答えなくていい！！」

「！！」

下から聞こえた声にフエイトは目を開く。

ユーノと交戦していたアルフがこちらを見上げ、ほえる様に言葉を発していた。

「そいつは何も知らない子供だよ！！ 優しくしてくれる人たちのところでぬくぬく甘ったれて暮らしてるようながきんちよになんかなにも教えなくていい！！ あいつとは違うんだ！！ あたしたちの最優先事項は、ジュエルシードの捕獲だよ！！」

ふと、零弥の悲しげな表情が頭に浮かぶ。しかし、その次に浮かんだのは……

その手のバルディッシュを構え、なのはに向ける。

なのはの表情が驚きと悲しみの入り混じったものへと変わる。

そして、次の瞬間にはその身を翻し、再び発光を始めたジュエルシード向かって飛んでいく。

一テンポ遅れなのはもまたジュエルシードに向かっていく。

封印済みのジュエルシードはデバイスを近づけるだけで回収ができ

る。そしてそれは既に封印済み。

しかし、ほぼ同時に甲高い金属音を立てて二人のデバイスはジュエルシードに接触する。

——時が止まったようにも感じられた。

しかし、事態は起こった。

ビキビキと音を立てて輝が入るレイジングハートとバルディッシュ。直後、その場所を中心に爆発するような激しい力場が発生する。

「きゃあああああああああ——！」

「うっく、うっくうっくうっく——！」

そんな声をはかなく打ち消し、光の柱は再度天を劈く勢いで立ち上っていく。

「っ!! 何だってんだよ!!」

零弥は立ち上る光に声を荒げた。それがつい先程のものと同じで、更にその力が大きくなっていると考えれば当然なのかもしれない。異常事態、それが頭を過ぎる。自分の無力さに腹が立ち、近くの壁を殴りつけた。

やっとと言うように光は収まり、なにもない状態へと戻る。

(……頼むから、怪我なんかしないで帰ってきてくれよ!!)

そう願った瞬間、背後から聞こえた物音、ぱつと振り向き影に気付く。ここに自分以外は何もないはずだ。それはつまり。

「アルフ……フェイト!？」

そこにいたのは息を切らしたアルフとその腕に抱えられたフェイトだった。フェイトの手は激しく傷つき、なにかを守るように閉じて

いた。しかし、悪いのは手より、その顔色だった。

「零弥……フェイトが……」

「つく！！　すぐに救急箱を持ってくる」

零弥は急ぎ、それを取りに行く。フェイトは激しく衰弱しているのが見受けられ、その顔は真っ青だった。

怪我人としてここに滞在したことで救急箱の場所を知っていたのは皮肉な事だった。

「……そんなことがあったのか」

零弥は断片的にもアルフから説明をしてもらった。

封印したはずのジュエルシールドが恐らく二人の衝突で再び発動し、バルディッシュが破損。そのため事もあるうにジュエルシールドをその手で掴み、暴走を止めたのだ。

気絶したフェイトの手は硬く閉じ、並みの力では開けなかった。そ

ここにジュエルシードがあつたからまた驚きだ。

「……無茶はしないでくれって、言っただけだな」

「この子がそんな簡単に聞くと思つてたのかい？」

「……なんとなく、無茶する気がしたから言っただ。しなうと思ふなら最初から言わない」

アルフはフェイトの頭を撫でた。今のフェイトに先程までの苦しげな様子もなく、すやすやと眠っていた。

「またあんたの世話になつちまつたね」

「俺は救急箱を持ってきたとちよいちよいしただけさ。それに、命の恩は一生の恩ってね」

零弥はおどける様子もなく、傍らに立つて二人を見ていた。こうして見ると姉妹に見えてくる。

「……でも、あんたはあの子の味方でもあるんだろ？」

「……まあな。でも、もう少しだけ置いてくれないか？」

「あたしもあんたは嫌いじゃないよ。たぶんフェイトも。でもどうしても信用できないんだ。あんたは言つたろう？ 命に代えても守りたいって」

アルフの気持ちは分からないが、思っていることは分かった気がする

た。

友人の知り合いに敵が混じっていた場合、どうしてもその友人を疑いの目で見てしまう。そんな感じなんだろう。

「……そうか。でも……」

「……ん……」

零弥が口を開きかけたとき、フェイトがもぞもぞと動き呻きを上げる。

「……アルフ？」

「フェイト！！ 大丈夫かい？」

「このくらい、大したことないよ」

「本当に大丈夫なのか？ 痛くないか？」

「零弥…… 大丈夫」

零弥に気付いたとき、少し驚いた様子が見えたがすぐに笑って答えた。

無茶をしているようにしか見えない訳がなかった。だがなにも言えなかった。その笑顔の裏にあるものが見えてしまいそうだから。

「零弥…… ごめんね」

「…… 無茶をしたことか？ なら気にしてないからその怪我治せ」

「うつん。そうじゃなくて、私、あの子と話さなかった」

「…… 俺が無茶を言ったんだ。フェイトは悪くない」

そう言うとフェイトは安心したように目を閉じ、規則正しい寝息が聞こえ始めた。

「……アルフ。お前は付きっきりでフェイトを見るのか？」

「……あたしには、それしか出来ないからね」

「なら、俺も付き合うよ」

「あんた……」

それは心配もあった。だが罪悪感もあった。

我がままだったのかもしれない。この子達の戦いを阻止しようとするのは。

フェイトがこんなにも無茶してジュエルシードを手に入れようとする理由がなんなのか、それすらも未だに分からない。だが、相当な理由に違いないだろう。

そんな彼女達の戦いを止めるなど、そもそもが無理だったのかもしれない。

そんな後悔にも似た感情に駆られながらもその夜は過ぎていく。
この先、なにがどう変わっていくか想像も付かぬまま――

第八話 笑顔と後悔と（後書き）

PV10000突破です!!

すごんだかすくくないんだかいまいち分からのですが・・・

第九話前半 その手が望む物

「報告？」

「うん。だから明日はジュエルシード探しはしない」

フェイトが嬉しそうに笑ってそう言った。こんなにも嬉しそうなのはやはり帰宅することで家族に会えるからなのかもしれない、と零弥は思った。零弥はフェイトがジュエルシードを集める理由を知らない。聞いたこともない。関係ない、とは言わなければならないから言うだろう。

「そうか……じゃあその日は家に帰ってみるよ」

「帰ってみるって……またここに帰ってくる気かい？」

「ダメか？」

「ダメかって……あんたはあのなのはって子の協力者である訳だろう？ わざわざ戻ってくる必要があるのかい？」

「……いまいち、気持ちの整理がつかなくてな」

零弥はそう言って苦笑いをしてみせる。どこことなく悲しそうに。

「なのはを手伝ってあげたいって思う気持ちは嘘じゃない。でもフェイトやアルフを放っておけないって気持ちもあるんだ」
「……そう言うの、優柔不断っていうんじゃないかい？」

「ん〜。そうなのか？」

「わ、私に振られても……」

突然のことにフェイトはおろおろする。やはり戦っているときとは似ても似つかない。

「ま、二人の事を言ったりしないから心配しないでさ。なんなら気絶させてから公園に放置してもいいから」

「……あんたつてたまにとんでもないことを口走ったりするね」

「ま、こう見えて精神不安定な人間なんだぜ俺ってば」

半ば冗談に聞こえないから恐ろしい。フェイトとアルフはそんな事を考えた。

翌日、気絶させてからなんて事はなかったが、アルフに送ってもらった際にビルからビルに飛び移る光景を見たことで失神なんかしていたりする。

その日、なのはは珍しく早起きし、姉である美由希の稽古を見学していた。

正確には眠ることが出来ず、こうして悩んでいるのだが、今は美由希の木刀を振る様を見ていた。

思い出すのは一人の少年。唯一人として悩みを打ち明けることが出来た人物。その彼もまた音信不通で悩みの一つになっていた。

そんな中、なのはの中で次第に固まりつつある思い。

フエイトと言う少女と話がしたい、その為にはどうするべきかの答え。

(……そう言えば、アルフさんが言ってたあいつって誰なんだろ?)

そんな事を思いながらもそろそろ学校の準備の為になのはは戻っていた。

零弥が目を覚めたのはもうすぐ昼になる時間帯。なのはと共に訓練をしたりした公園のベンチに寝かされていた。

「……なんで俺はここで寝てんだ？」

どうも寝る前の記憶はさっぱり飛んだようだ。とにかく傍らに置いてあった自分の武器一式を持って予定通り家に帰ってみた。数日放置してしまったので家の床は埃でいっぱいだった。もしかしたら掃除で終わってしまうんじゃないかと思いながらため息をついた。

「そうだ。携帯携帯っ」と

慣れた手つきでポケットから携帯を取り出し、折りたたみ式のそれを開いた。

特別おぞましい事になってたりはしなかったが、複数のメールと電話の履歴があつた。

俊足としての仕事を除くとそれ以外はなのはからだった。そもそも零弥に連絡するのはなのはだけだ。

『今何処にいるの？』

『返事をして』

大体はそんな感じだった。どうも心配をかけてしまったようだ。少し申し訳なく思いながら零弥は返信を返す。

『すまん。いろいろあつて携帯を電池の切れたまま放置していた』

本当の事を言うわけにもいかない。そのうちに辻褄を合わせるような話をすればいいだけだ。

（あの子達の為に俺が出来ること……俺があの子達と戦っても勝てるわけがない。そもそも、戦いたくない。なら、取るべき選択は一つか……）

(……感じる)

家の片付けを一式終え、零弥は一人最初に眠っていた公園に来ていた。散歩なんて気楽な物ではない。

この辺りからジュエルシードの気配を感じるのだ。

フェイトと出会う理由にもなった一件以来、更にジュエルシードの探索に磨きがかかったようだ。本人はだんだん人間離れしていく気がして複雑な気分だったが。

時刻は六時を過ぎて指すほどののに未だに夕日は世界を照らす。

零弥のその背には今はなにもない。腰に木刀が差されているだけだ。無論これで敵を攻撃しようとは思えない。だがせめて防御には使える。

と、頭に響くような音が聞こえる。鈴のように澄み切ったその音はしかし不快しか生まない。

草むらを掻き分け、気配へと近づく。もしかしたらフェイトは既にジュエルシードに気付いてるかもしれない。

（俺があのだの二人の為に出来ることなんて少ない。ぜんぜん少ない！でも、あるならしてやりたい！！）

そして零弥は一本の樹の地面に飛び出た根に挟まれるように落ちていた。淡く点滅したそれは今にも発動寸前だ。

零弥はなにを考えたのか。それは先日のフェイトの行動に基づく。バルディッシュが使えず、素手でジュエルシードを止めたフェイトはかなり衰弱していた。だは零弥はこう考えた。

『発動直前のジュエルシードに止まれと願えばそれは叶えられるのではないか、と』

発動すれば零弥にはそれを止める事は出来ない。魔法を使えない零弥に怪物とともに戦うことなどできない。ならばこそその答え。ジ

ユエルシードくらいは自分が止め、あとは二人に任せたい。

(……あの二人なら無茶と止めるかもしれないな)

零弥はふっ、と笑みをこぼした。まるで予想できた光景に。
ジュエルシードに近づき、それを掬うように手の中へ納める。

瞬間、ジュエルシードが強く輝き始める。分かる、押さえ込んだ手
の中で膨大なエネルギーが暴れまわっている。手に激痛が走る。フ
イトはこれに耐えたのか、大した子だと笑う。

「止まれ、止まれ、止まれ……っ!!」

『せめて、あの子達が正しく進めることが出来るように、そうあつ
たほしいが為に!!』

光は手から溢れ、辺りを眩く照らしていく。呻きなどあげる暇もな
く、零弥は飲み込まれていった。

願いは、聞き届けられた。

歪んだ結果として――

第九話後編 望まない力

なのははユーノと共に走っていた。その直前に感じたのは既に馴染み深い物になってしまっていたジュエルシードの反応。

その胸に思いを抱き、その手にレイジングハートを握り締め。

たどり着いたのはそう遠くもない、行き慣れたと言っても過言ではない公園だった。

着くと同時にユーノはいつものように結界を発動させる。

辺りの背景が色を失っていくなか、なのははその辺りを見回し、困惑した。

確かにこの辺りから感じたはずだった。しかしそこに今までのようなジュエルシードが暴走した跡がない。前の例外のように正しく作用されたのか、そう一瞬考えたがそれが甘かったことを知る。

遠い、遠い、木の天辺にそれはいた。黒いもやもやしたなにかが。

一見すればただ黒い布がただ引っかかっているだけに見えなくもない。

しかし、違う。なのはのような魔法使いに言わせればそれは違和感の塊。見ているだけで恐怖とはまた違う嫌な気持ちにもなる。

正しくアンノウン。黒い影は空を歩き始める。たどたどしく見えるそれは何をどうしてそうなったのか。

と、黒い影目掛けて連射された光の矢が発射される。

だがそれは黒い影から出てきた手の一振りですべて消え失せる。叩き落とした訳ではない。障壁を作り出したのだ。

「うおう！ 生意気に、バリアまで張るのかい」

「……今までのとは大分違うみたいだね。それにあの子もいる」

なのはからまた少し離れたところにいたのは獣化したアルフとバルディッシュを構えたフェイト。黒い影を睨みながらもその違和感を消し去れない。

先程の物を見る限りその姿の原型は人。確かに大きさだけ見れば子供程度の人間が黒い布を被ればあんな物になるのかもしれない。

そこで、フェイトはハッとした。ここは零弥との集合場所でもあることに。その姿は何処にも見えない。なのはの隣にも、何処にも。なら、あの黒い影は？

確定は出来ないその答え、だが人が発動させたのは明確だった。

なのは達もそれが人が発動させた物ではないかという結論には達していた。しかしそれが零弥とまでは思いはしなかった。仕方ない。

なのは零弥からの返信に気付いていないのだ。考えることに没頭して忘れていた。

黒い影はなにも言わない。しかし、その歩みを再び始める。緩やかに下り階段を降りるようにそれは公園に降り立った。

「……ル」

何かを口にしたような気もした。しかしあまりに微かで分からない。正面に見据えてなのは気付く。全身影で隠れるようになっていたが頭だけはフードのようになっていた。

なんとかその顔を見ようとして気付く。その顔もまた黒く塗りつぶされていた。

「貫け轟雷!!」

『Thunder Smasher.』

フェイトの声と共に黒い影に向かって魔法によって作られた雷が放たれる。

それは真っ直ぐに黒い影に直撃する、今度は何故かピクリとも動かない。

だがなのはそれが好機にも見えた。魔法によって高く飛び上がり、レイジングハートを向ける。

「行くよレイジングハート!! デイバイン……ッ!!」
『Buster.』

レイジングハートの先端から巨大な魔砲が発射される。それはフェイトのサンダースマッシュヤーと共に黒い影に直撃する。地面が陥没するほどの衝撃をその身に受け、しかし避けない。だが苦しむ様子も見せない。

まるでそうなることを望んでいたかのように……

(……不思議な気分だな)

零弥はその目だけは機能していた。だが体を動かすことは叶わない。

まるで他人の体に移ったような空虚な感覚。しかたしかにその意識は保っていた。

フェイトからの攻撃を防御した時も、そして今攻撃を受けているその瞬間も。

（……なのはのこれ、こんなに痛かったのか。敵さんに同情してやんなきゃな）

そうして彼は耐える。耐え続ける。

そして、攻撃が止み、零弥——黒い影は顔を上げる。

そこにいた二人はデバイスを封印モードに切り替え、こちらに向いていた。

なんとなく考えていた。チャンスはここにしかない。

「封印——」

二人のそんな声と共にデバイスから発射された光。挟み撃ちを受けたように力の境界線を中心に零弥は願った。

（ジュエルシードなんていらぬ。どうなってもいい。だからせめて）

あの二人を助ける事が出来る力を、今一度貸してくれ……っ！

やがて光が晴れたとき、黒い影は未だそこに立ち続けていた。

失敗かと思われたが、しかし、ジュエルシードはその真上に浮いている。

「「え？」」

「なに？」

「どういうことなんだ？」

そこにいた全員が首をかしげた。人が変形したと思った物が実はそのままだったなんて状況。だが、本人には分かる。

こんどこそ、願いは届いたのだ。

そして、黒い影は、零弥は空へと浮かびあがる。体は自由だ。空だ

って飛べる

(……体の節々が痛む。それに今は、正体をばらすのは得策じゃないな)

そう考え、零弥はジュエルシードとそこにいる全員を残し、空へと飛び立った。

実際、なにが起きたか本人にも分からない。
だが、零弥は自信を持ってこう言える。

(ま。奇跡って奴だろ?)

いまいちしまらないまま、なのはとフェイトは相對した。

その夜、自分の家で休んでいた零弥はなのはからの電話に出た。

『もしもし零弥くん？』

「ああ、どうした？」

『どうしたじゃないよ！ 何日も連絡なくて心配したんだから』

「そりゃ悪かったな。ごめん」

『……零弥君なんだか雰囲気変わった？』

「そうか？ ……そう思うならそうなんじゃないか？ それより、なにか用があるから連絡したんだろ？」

『……うん。実は……』

「時空管理局？ そりゃまた随分大袈裟なお名前ですこと」

『もう！　まじめに聞いてよ！』
「……………申し訳ない」

まさか自分がいないうちにそんなことになっていとは思わず、零弥は素直に驚いたつもりだったがどうも怒らせてしまったようだ。

（しかし、一日考える猶予を与えるのはなんでかねえ？）

話を聞くにはとんでもないほどの組織な事は想定できる。だからこそ世界の秩序を守るものとして普通は関与を禁止したりはしないだろうか？　なのにわざわざ協力するか考える時間を与えるのは何故か。

（……………なのは力はユーノが言うにはかなり強い力みたいだし、うまい感じに利用する気か？）

「……………その選択はそっちで決めてくれてもいい。と言いたところだけど既に答えは出てるんじゃないのか？　俺はその選択について行くよ」

『……………うん。ありがとう。零弥君』

「だから、僕もなのはもそちらに協力させていただきたいと思います」

ユーノはレイジングハートに話しかける。それはデバイスではなく、通信と言う形として時空管理局に話していた。

『んん。なかなか考えてますね。それならまあいいでしょう』

ユーノが一言二言付け足して話すことで向こうの艦長からの了承をようやく取る。

『条件は二つよ。両名とも、身柄を一時時空管理局の預かりとすること。それから指示を必ず守ること。よくって？』

「……分かりました。それとも一つお願いがあるのですが……」

『なにかしら？』

「それは……」

ユーノは諦めにも似た感覚を感じながらそれを口にする。だがなのは頼みだし、味方がいるのは心強い……はず。

「……もう一人、仲間がいるので、連れて行ってもかまいませんか？」

第九話後編 望まない力（後書き）

妙に今回はぐだぐだになってしまった。申し訳ない。

第十話 自分の意思

「……一日考える時間があつたんじゃなかったのか？」

「お兄ちゃん達に説明したらきつと反対されると思ったから早めに行きたいの」

そんな会話のあと、片やフェレットを肩に乗せた女子小学生。片や木刀を腰に差した男子小学生（実年齢13歳）の二人はそこから海を望める公園にいた。

どうしても今日と言う事で必要最低限の物だけを携えてきたのはいが、静かな潮の音が聞こえるだけで誰かが来る様子はない。

「……それで、時空管理局とやらはいつになつたらいらつしやるんで？」

「うーん……もうすぐ来るよ」

「さいですか……」

そう言ったなのはが信じれるのか疑問に思いながらも黙って待ったと、いきなり二人の目前にモニターが現れる。それには緑の髪的女性が移っていた。

『待たせてしまつてごめんなさいね。今転送するから』

「な、なな、なんだ？ うわぁ！」

なにやら情けない悲鳴を上げると光の渦のようなものに飲み込まれ、次に視界が開けたときにはまるで違った場所にいた。更に言うとも目の前には黒い服（恐らくなのは防護服と同じもの）を着た少年がたっていた。

「よく来たね。……そっちがもう一人の協力者かい？」

「……まあ、そういうことになるのかな？」

「そうか。僕はクロノ・ハラウオン。よろしく頼む」

「……黒野零弥だ。同じクロノ同士仲良くするか？」

「そこを疑問にされても……」

「そう言えばなんだか似てるよね。黒い髪だし、身長も……」

「「黙れフェレット！」」

そこで二人が反応する。どちらも自分の身長に対して思うことがあるようだ。

そして再び二人は目を合わせる。

「……君とは仲良くやれそうな気がする」

「ああ、俺もそう思った」

そう言って二人は握手を交わした。友情の出来上がりである。

「フェレットフェレットって、僕は人間だ！」

なにを戯言……そう零弥が思った瞬間、ユーノの体が光始める。徐々に人間の形を成していき、それは茶毛のフェレットから茶髪の少年へと変わった。

「……誰？」

「ユーノだよ！！ 見てただろ今！！」

「俺の知ってるユーノは丸いしちっこい」

「フェレットの状態だからだよ！！」

「じゃあ……ホントに？」

「もちろんだよ！！」

「実は人間の男なのになのはの肩に乗ったり一緒に温泉入ったり一緒に部屋で寝たりしたのか？」

——時が止まったかのように感じられた。

ユーノは必死に言い訳を考え、なのはが顔を赤く染め、クロノ二人組みがジト目でユーノを見る。

「……ともかく、艦長を待たせるわけにはいかない」

「オッケー。ユーノ、弁解はあとで聞いてやるってよ」

「ご、誤解だ。僕は別に狙ってしたわけじゃ……」

「私、なんだか少しユーノ君が信じられなくなってきたかも……」

各々がいろんなことを呟きながら歩き始める。

艦長って事はここ戦艦なんかな、とかエスエフの映画みたいだな。なんて暢気なことを考えながら零弥は歩いていて。自分がいるのがどんな場所なのか感覚が麻痺してしまったようだ。

少しして着いたのは一つの部屋への入り口、何故かなのはとユーノは微妙な表情を浮かべていた。その意味に気付いたのは開いた扉から中を覗き込んだときだった。おもわずその表情を戸惑いと驚愕の両方を表してしまう。

「いらつしゃい」

「……いい部屋ですね」

「あら、ありがとう」

精一杯皮肉ったのだがダメだった。機械的な壁、そしてそこに和を足していることでとんでもないことになっている。ようするに、畳やらなにやらがあつて茶室になっているのだ。なんと言うミスマッチ。アメリカで寺を発見した気分だ。

「楽にしてちょうだいね」

「はい、どうも」

特に躊躇するわけでもなく零弥は畳の上に正座する。続くようにしてなのはユーノ、クロノもする。

「自己紹介しましょうか。私はリンディ・ハラウオン。この戦艦アースラの艦長をしています」

「黒野零弥です。ハラウオンってことは……」

「ええ、お察しのとおりクロノは私の息子です」

「なるほど……微笑ましいことですね」

「ふふ、ありがとう」

「艦長、それよりも本題に」

クロノが気恥ずかしさからか、それとも本当に見ているのが嫌になったか話を進めるように言う。

「ふう……前置きは人と仲良くなるためには必要だぜ、クロノ」

「仲良くなるのが目的じゃないだろう？」

「そりゃごもつとも」

「うふふ。つい先ほど顔を合わせたばかりにしては仲がいいわね。似てるからかしら？」

「……どうかな……さて、話に入りますかリンディ艦長」

「リンディさんでいいのよ。そうですね、貴方は此度のことはそちらの二人に聞いてますか？」

「時空管理局と言う組織の存在とその予備知識、あとはジュエルシード回収の名目での協力と言うのは」

それを聞いてリンディは小さく頷く。

「なのはさん達の前で改めて話すと時間がかかってしまうのであと

で二人に聞いてくださいね」

「と、言っわけだから後でよろしくユーノ」

「僕かよー!!」

「そう、お前だ。じゃあ今回は本格的に方針とかを話すわけですか？」

「もともとそのつもりだったのだけれど、少し予定が変わったの。零弥君、あなたの事を聞きたいのよ」

「……俺？」

「ええ、昨日、二人の事情は聞いたわ。ユーノさんがジュエルシードを発掘し、それを回収して、なのはさんはそのお手伝い。でも、貴方は？」

それを聞かれて零弥は沈黙する。目を閉じて何かを考えるように。

「……俺の場合はいろいろと特殊なんですよね」

「あら、それは何故？」

「第一に、俺にはすることがない。学校も行っていないですから。第二に、恐らく、関わった理由は俺自身魔法と言う物に興味があったから。第三に、戦っているのが俺より年下の子供だから」

「……どれもあまり関心できる理由ではないですね」

「それに無謀だ。魔力を持たない人間がロストロギアを回収しようなんて」

「ま、正論ですね。でも、生憎関わっちゃいましたから。だから、決めたんです。戦うこの子達、そしてフェイトの味方でありたいと」

そこでその場にいる全員が耳を疑う。あたかもその言い方はあの少女、フェイトの関係者であるといったようなものだ。

「貴方はあの子と関係しているのですか？」

「黙秘権を主張します」

「貴方にそれができるとおもっていて」

「出来る出来ないじゃないんです。俺は約束は極力守る男ですから」

「……下手をすれば時空管理局を敵に回しかねないと言うのに……」

「そうになったら俺はまた一人で戦うだけです。死んだ父さんがよく言っていました。正しさだけは見失うなって。そしてこれが俺なりの正しさです」

そこでリンディ、クロノの表情が一瞬歪む。だがすぐに戻り悲しげになる。

「そう、お父さんを……」

「父さんだけじゃない。母さんも妹も。みんなですけど」

「……」

「俺は所詮一人なんです。下ろしたいなら言ってください。俺は文句を言いません。ですが、その後は俺の戦いをします。別に俺はいなくてもいい——」

「その先は言っちゃダメ！」

零弥は真っ直ぐ前に向けていた視線を横、なのはに向けた。悲しげで、涙をためたその顔に何も言えなくなる。

「言ったら、怒るの」

「……わるい」

「リンディさん。確かに零弥はよく分からないところがあります。素性だつて本当かは分からない。ですけど、短い時間ですが一緒にいて分かります。彼は決して悪い人間じゃありません」

「ユーノ……俺に出来ることは発動直前のジュエルシードの場所、そして魔法の発動した場所の特定です。曖昧な方向と大体の距離しか分かりませんが……今日は魔法を使う第三者の加入に気付いてました。たぶん、クロノ、お前だろ？」

「……魔力がないのにそこまで……」

クロノやリンディは素直に驚いた顔をしていた。当然だ。それらは人としては持たない力として漸く出来ることだ。魔力を持たないのにそれを出来る零弥はなのと同じ突然変異なのかもしれない。

「先ほどは失礼なことを言った。言えない事はいくつもあるけど、嘘は言つてない。なのはとユーノの味方でいたいし、フェイトを助けたいとも思う。でも思うだけじゃダメなら。俺もなにかしたい。そう思つてここに來たんだ」

そこまで言つと零弥はもう言う事がないと口を閉じた。沈黙が辺りを支配する。

そして、

「……分かりました。貴方の入艦を認めます。ただし、それは二人

の保護管理人としてです。もちろん仮ですが」

「保護……管理人？ 俺がか？」

「言っまでもなく貴方の年では保護管理人にはなれません。しかし、あくまで仮ですのでそこは目を瞑りましょう」

そう言ってリンディは微笑んだ。隣からはなのはの喜ぶ声が聞こえた。

いまいち実感が沸かないが、リンディが零弥もこの艦にいれるように特例措置を取ったと言うことなんだろう。それに気付いてからは零弥は黙って頭を下げた。

と、入り口が唐突に開く。そこにいたのはお茶を持った女性だった。

「お茶持って来ました」

「ありがとう、エイミィ」

女性、エイミィは鳴れた手つきでそれを並べていく。が、

「……文句を言う気はないんだが、俺の分はないのか？」

「エイミィ、一つ足りないよ」

「え？ そんなはずないよ。ちゃんと四人分持ってきたもん」

「エイミィ……ここには五人いるだろ」

「……あれ！？ いたの！？ ご、ごめん！ 今持ってくるね！」

「いや……いいつす。慣れてるんで」

そうは言いつつもなんだか引きつった表情で零弥は笑みを浮かべた。
こうして、なんだかありそうな気がしながらも、こうして黒野零弥
の保護管理者としての生活が始まった。

第十話 自分の意思（後書き）

主人公が駄々っ子のようにだ．．．
ともかく苦勞の末頑張って投稿します。

さて、私の就職がどうなるのか、見ものですね．．．

え？ 興味がない？

間章 保護者の気持ち

「ゆ、ユーノ・スクライアです！」

「高町なのはです」

「……黒野零弥です」

そう自己紹介して見せたのは会議の席でのことだ。面子が子供だけと言ふことでなにやら視線は気になるがそう酷いものではない。特に零弥は。

「……てつきり魔法に関連する人間が俺の不思議を受け付けないのかと判断していたがどうも違うみたいだ」

嘆息し、ユーノに愚痴をこぼす。

この艦にいるうちの大人数は零弥の存在を忘れなかった。が、それでも何人かは顔を合わせたにも関わらず奇異の目で見えるものがある。

「うーん……僕もよく分からないけど、もしかしたら魔力の有無が関係してるのかもしれないね」

「魔力か……」

「でもエイミィさんは今じゃちゃんと気付いてくれてるよ？」

「ああ、五回自己紹介してやっとだけだな」

「うーん……」

一同がそんな会話をしていると、二人が近づいてきた。クロノとエイミィだ。

「君達、食堂は食事をする場所だよ。話なら各々の自室ですればいいだろう?」

「この会議は俺の知名度を上げるためのものであり、ついでに俺の姿を人の目にさらす事を意味にしているのだ」

「「そうだったの?」」

「おいこら、お前らがそれでどうする。せつかくの言い訳が台無しだ」

「……はあ。別に構わないさ。ダメなわけではないし」

「クロノ君は固いんだよ。私達も食事にきたんだから仲良くお話すればいいじゃない。ねえ零くん」

「……零弥です」

「あ、そうだっけ。ごめんね」

零弥は半ば諦めたようにため息をついた。この後はそう呼ばれ続けるような気がしたからだ。

「存在感が薄い？」

「ああ、ていうかもはや不可視の魔法でもかかってるんじゃないかと最近思ってきた」

「そう言えば私も零弥君見るたびに忘れちゃうんだよね」

「エイミィさん……それを直で言われるとなかなか傷つく」

「零弥は確かに体は一般人と変わらないはずだからな。ジュエルシードの影響か……」

「いや、実はそれよりずっと前からなんだよ」

なんと言うか、この船の切り札とオペレーターの一人がこうものんびりここにいていいものかと疑問に思う光景だが、いるのが子供だけにあまり言えない。エイミィだって16歳だ。

「そう言えば零君何歳？」

「……藪から棒ですね。13歳です」

「おお！ クロノ君と一つしか変わらないよ。よかったね」

「……何がどんな風にいいのかいまいち分からないな」

「零弥、エイミィの言葉の半分は聞き流していい」

「それは酷いよ。聞き流すなら三割くらいにして」
(聞き流すのはいいんだな)

そんな事を考えていると横からユーノに突っつかれる。コップを指差すだけだったので、なんだ、飲み物をもらいに行くのかと軽く思い、頷いた。そうするとなのはと一緒にどこかへ行ってしまう。さっきのジェスチャーはなんだ。

「13歳かあ……クロノ君は14歳なんだよね」
「なんだ、年上なのか。それは知らなかったぞ」
「一つくらい大差ない。気にしないでいいよ」
「そうそう。私クロノ君のこと成長遅いなあ、とか思ってたけど零弥君も同じくらいなんだね。」
「……昔っからどうも背は伸びないんですよ。悲しいことに」
「……ああ、実は僕もだ」

お互いため息をつき、妙に落ち込む。

『クロノ？ ちょっと来てほしいんだけど……』
「どおわ!？」
『あら。零弥君もいたのね。迷惑かしら?』
「いえ、今行きます」
「私も行きますか?」
『クロノがいれば十分よ。ありがとうエイミィ』
「あ、そうだ艦長。お願いがあるんですけど」
『なにかしら?』

「一般の魔法使いに渡される杖、あるじゃないですか。あれ一本貸してもらえませんか？」

『いいけれど、なにに使うの？』

「護身用としてですよ。どうしても木刀じゃ耐久性に問題がありますから」

『分かったわ。手配しておきます』

「ありがとうございます」

そこでムービーは途切れる。クロノは会話の途中で言ってしまったので、残されたのは零弥とエイミイだった。別に空気が重いと言う事はないが、話の内容に迷ってしまう。

「あの……零君？」

「はい？」

「……クロノ君と仲良くしてあげてね」

「何故それをエイミイさんが？」

「あの子、幼い頃にお父さんを失って、必死にリンディさんの役にたてるよう頑張ってたから。あまり友達とかいないの。だからお願い」

「……別に、言われなくてもそのつもりですよ」

「ありがとう。零君」

「……願わくばその零君はやめてもらいたいです。エイミイさんこそ、なのはやユーノの力になってあげてください。子供の気持ちを考えるの、苦手分野みたいなんで」

「うん!!」

エイミイはクスリと笑うと微笑んだ。なるほど、これがよく言うう

ちの子と仲良くしてあげてほしい、なのかもしれないと少し保護者の気分になった零弥だった。

第十一話 悲しみと苦しみと

「ジュエルシード、8番か……」

零弥はつまらなそうに戦艦アースラからなのはとユーノが戦う様を見ていた。それもたった今終わり、暴走して巨大な鳥の化け物と化したジュエルシードを見事封印したところだった。

零弥はアースラで留守番、もとい戦力外通告で置き去りにされていた。もちろん、戦う力を持つてはいるがそれはあくまで奥の手として取っておきたかったからだ。

そんな事もあって力を秘密にしたまの零弥は一般人となんら変わらず、行くと言ってもなんやかんやで言いくるめられた。なのは達ですら自分達だけで大丈夫と言うのだから零弥はもう何も言えなかった。

「うーん。二人ともなかなか優秀だね。このままうちに欲しいくらいかも」

「……皮肉ですか？ 意外と傷つきましたよ」

「あら。そんなつもりはないのよ。貴方もあの二人の保護責任者として立派にやってるみたいだし」

それを聞いて零弥は内心ため息をついた。

要するに、零弥は戦力として数えられてないのだ。自分の力とも言えるジュエルシードの探索はこのアースラからは出来ない。魔力がないから個人で行動してもアースラに連絡手段がなく、なによりその保護責任者としての役割を果たせない。

戦闘に関してはまったくのお荷物。なのは達の頼みで仕方なくいるただの一般人。それが零弥の立ち位置だった。

「ただいま。零弥君」

「ああ、お帰り。なのは、ユーノ」

戦闘を終えて帰ってきた二人を迎える。しかし何処となくその表情は暗い。

「どうした？ 怪我でもしたのか？」

「え？」

「表情が暗いぞ」

「あ、うん……フェイトちゃん今回も現れなかったから」

「こつちとは別にジュエルシードを集めているみたいだけど？」

「……向こうも出来るだけ管理局に遭遇しないようにしてるみたいだし、仕方ないな。でも、いつかは絶対にぶつかる。心配するな」

「……うん」

「ま、今は飯でも食って体を休めろ。な？」

零弥はそう言い、二人を連れて食堂へと向かっていった。

しかし、結局初めて管理局が介入してから十日になるころ。未だにフェイトは現れない。

だが別に収穫の一つもなかった訳ではない、なのははあれから更に二つ、合計三つのジュエルシードを手に入っていた。しかし、フェイトも二つのジュエルシードを手に入っていた。

「……残り六つ。見当たらないわねえ……」

「搜索範囲を地上以外に広げてみます。海が近いので、もしかするとその中かも」

零弥はすることもなく、ブリッジで二人のそんな話を聞いていた。なのはとユーノの二人の空間に介入するのも気が引け、特にいる場所もなかったからだ。

しかし、これを聞いて零弥は一つ考えを思いつく。

「リンディ艦長。俺を海鳴市に下ろしてくれませんか？」

「あら。それはどうして？」

「俺なら。もしかしたら発動が近いジュエルシールドの大体の方向が分かるかもしれません。一応の可能性として、お願いします」

「そうね…手詰まりなのは確かだし、許可します。転送の準備を」

リンディの言葉を聞き、零弥は一度大きく頷いた。

下ろされたのは既に行きなれた公園。なのはと共に訓練し、ジュエルシールドに一度取り込まれた場所。

「ん……やっぱり空気が違うな。それに、まぶしい」

誰に言うでもなく零弥は口を開いた。十日ぶりの我が故郷、旅行にでも行っていたような気分になる。今の彼は何も持っていない。木刀もアースラに置き、完全に手ぶらだ。別に戦う予定もないし長居

する気もない。

「さて、ジュエルシードの反応はつと……」

零弥は目を閉じ、力の感じる方角を探る。

感じる。クロノの推測道理、複数の反応を海から。しかしそれをどうやって探し出すと言うのか。

頭には海にダイビングする管理局員の姿が浮かんで吹き出す。

しかし、そんな道楽気分は海から感じた巨大な反応にかき消される。

（ジュエルシード！？ いや、これは違う。……まさか！）

零弥は海を、海の更の上を見る。そこからではなにが起きているかなんて分かりはしない。だが、力はだんだんと集まっていく。

（この魔力、間違いない。フェイトの——っ！？）

直後、空に金色の魔法陣が描かれる。その大きさ今までの何物にも比べ物にならない。

バチバチと放電を始め、その放電も時間が経つにつれ酷くなってい

く。

目を細めそして魔法陣の上にいる者に目を向ける。フェイト・テストタロツサはその手のバルディッシュを振り下ろす。

——激しい落雷が海に降り注ぎ、そして、強い光の柱が次々と立ち上がる。

その数は6。残りのジュエルシードの全て。

「おいおい。嘘だろ？ 六つ同時なんて無茶すぎるぞ！！」

零弥はもはや嵐と化したジュエルシードを遠くから見る。
そしてフェイトは無謀にもそれに突っ込んでいく。

（くそ、このままじゃフェイトが……時空管理局はなにやってんだ！！）

こんな状況にも関わらず、時空管理局がその姿を見せる様子はない。
気付いてない訳がない、それはつまり。

（傍観、しているのか？ 子供がたった一人であんな無茶やってるあれを……）

もしもフェイトがこれに敗れるなら、管理局としては儲かり物だろ

う。倒すべき相手が自滅しようとしているのだから。もしも勝ったとしても、そこにあるのは弱ったフェイトと封印を終えたジユエルシード。そこを攻撃されればひとたまりもないだろう。

……戦略的には正しいのかもしれない。

だが、零弥にとっては断じて違う。零弥にとっては例え敵であろうと、フェイトは救うべき対象なのだ。

「自分が正しいと思ったなら、それだけは絶対に迷わずに……っ！
」

零弥は力を発動し、強くその足を蹴った。

（まだ大丈夫。まだ、戦える！）

フェイトは息を切らしながら迫り来る竜巻を避けていた。彼女はそうは言うが、実際彼女の力は空に近かった。更に避けるので精一杯で封印するタイミングが見つからない。

「くっ！ きゃあああ！！」

「フェイト！！」

吹き飛ばされるが、なんとか空中で体勢を立て直す。しかし、バルディッシュが形成していた大鎌が消える。それはフェイトの魔力の限界を示していた。しかし、諦めずに目の前の敵を見据える。

と、フェイトは突然の魔力反応を感知する。膨大で、そして最早感じ慣れたその魔力を。

雲の向こうが桃色に光り、それは突然かき乱すかのように消えた。

高町なのはが、まるで天使が降臨するかのように、舞い降りた。

「フェイトの、邪魔をするなあ！！」

アルフがそれを見た途端、飛び掛ろうとする。しかししれは横から割って入った人物に止められる。

「違う！　僕達は君達と戦いに来たんじゃない！！」

緑の魔法陣は隔てるようにアルフの前に展開し、それを発動させたユーノは二人に呼びかけた。

「まずはジュエルシードを止めないと、まずいことになる！　だから今は、封印のサポートを！」

ユーノはそのまま飛び上がり、アルフを止めていた魔法陣を解除すると新しい魔法陣を展開する。
そして魔法陣と同じ色の鎖が出現し、竜巻を縛り上げる。見るからには力が足りない。

「フェイトちゃん！　手伝って。ジュエルシードを止めよ！！」
「っ！？」

なのははフェイトの隣まで飛び、その声をかけるとその手の杖に呼びかける。

ちょうど本体とも言える宝石から桃色の光が溢れ、フェイトのバルディッシュに吸い込まれていく。

途端にバルディッシュは再起動する。今流されたのはなのはの魔力だった。バルディッシュを通してフェイトの魔力を回復させたのだ。

「二人できつちり半分」

驚いた様子でなのはを見るフェイトにそう言って頷いた。
遠くではユーノとアルフが協力して竜巻を止めていた。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれてる。だから、今のうち！
二人でせーので一気に封印！！」

そこまで言うとなのはは空高くへと飛び上がる。レイジングハート
が射撃型へ形状を変化させる。
身軽に竜巻のそばを潜り抜け、フェイトの向かい側を目指す。

『Sealing form・Set up・
バルディッシュ……』

命令もなく、形状を変更させるバルディッシュを驚いたように見た。
自らの心のままに。フェイトにはバルディッシュがそう言ったよう
な気がした。

一度、なのはを見る。足場のピンクの魔法陣を形成し、こちらにウ
ィンクして見せた。

そして、その魔法陣は更に大きくなっていく。

フェイトも、今撃てる最大の力を込め、魔法陣を発動させる。

「しまった！」

「フェイト！！」

集中していたそこに二人の声が聞こえた。思わずそちらを見ると一つの竜巻が二人のバインドを抜け、フェイトの方に向かってきていた。

だが、今ここでやめたら注ぎ込んだ魔力が無駄になってしまう。フェイトはそこを動くわけにはいかなかった。

まるで台風が向かってくるような感覚にフェイトは目を閉じた。

しかし、いつまでたっても衝撃がこない。暴風のような音はそのままなのに。

フェイトは少しずつ目を開いた。そこにあつたのは黒い背中。黒いマントのまるで騎士のような者が素手で竜巻を止めていた。

「……零弥？」

「……………」

黒い騎士はなにも言わない。しかしフェイトには以前助けてもらった時の光景が思い出されていた。

静かに顔をこちらに向ける。被ったフードの中は見えなかったが、それでもフェイトにはこの人物がこんなことを言ったかのように感

じた。

——早いとこやっちなえ、と。

小さく頷き、フェイトはなのはを見る。なのはもまた、頷いていた。

「サンダー……レイジー……ッ!」

バルディッシュを魔法陣に突き刺すと同時に、辺りに激しい轟音が起きていく。

そして、

今なのはとフェイトは向き合い、その間には六つのジュエルシールドが浮かんでいた。
ジュエルシールドの封印に成功したのだ。

（なんつーむちゃくちゃな。でも、成功してよかった）

黒い騎士、零弥はフードの下でホツとする。

今の彼は初めてジュエルシールドにつかれた時とは違い、もやもやした煙ではなく鎧を纏い、固定していた。正確には魔法使いと騎士を足して二で割ったような服装。腕、足、胸にはごつごつした黒い鎧が当てられているが、背のマントやフード。腰周りは布のような物で構成されていた。

心配することなく、零弥は静かに二人を見守った。

「友達に、なりたいんだ」

「っ!!」

恥ずかしげもなくフェイトに伝え、それに心底驚いた様子を見て少しばかり呆れながらも零弥は嬉しくなった。

（そうだ。俺は、こんな結末を望んでたんだ……）

だが空から感じた力により、その顔は再び険しくなった。
何者よりも早く、フェイトに近寄り、マントを翻す。

（ブラックカーテン！！）

マントそのものが障壁と化し、二人の間を裂くように落ちた雷の余波を受け止めた。

「っ！！……母さん？」

（母さん！？ まさか、今のを放ったのは……）

フェイトの眩きを聞き、零弥は驚く。そして反応が鈍った。

少し遅れて落ちてきた先程の何倍も激しい雷は零弥のブラックカーテンを弾き、直撃する。

ただせめてとフェイトを範囲外へ押し出した。その身に激痛がその身に走る。

もう目は見えない。平衡感覚すらも分からない。

「そんな！ ダメ！ アルフ！！」

フェイトのその声を聞き、だが何を返すことはできない。

自分は落ちているのか、そもそも四肢を残して存在しているのかも分からないまま、零弥は気を失った。

第十二話 その心の赴くままに

——父さん。父さん!!

自分を守るように抱いた男は体中から血を流し、死んでいた。

木が烧ける臭い、ガソリンのような臭い、そして嗅いだことのない、人の烧ける臭い。

たくさんの人が回りに倒れていた。そして近くにはつい先程まで自分と家族が乗っていた飛行機が中央から真つ二つに割れ、煙を吹き上げていた。

——母さん!? るみ!?

誰の声も聞こえない。母と妹の姿はどこにもない。

嘘だ。夢に違いない。そんな淡い幻想のような想いは目の前の現実に壊されていく。

——そんな……嫌だ……っっ、っっっっっっっっっっ!!

突如として訪れた胸の痛みに悶える。苦しみと、悲しみの中。全てを失った少年はただただ悲鳴を上げ続けた。

「フェイト……本当にこいつを連れて帰ってきて良かったのかい？」

意識が完全に戻らない中、零弥はそんな声を聞いた気がした。彼が纏っていた黒い衣は剥げる事なくその体に身に着けられていたが、その形状は最初と同じ煙状だった。意識がなくなって集中が切れたからだろう、と零弥は自分で結論付ける。

「大丈夫だよ。この人は私を守ってくれたもの。それに……」
「それに？」

「……なんとなく、この人が零弥と被るから」

「……確かにあれから一度も会ってないし、心配だけど。こいつが零弥なはずないよ。だってあいつは人間だよ？」

「うん……そうだね。じゃあアルフ、私母さんに会ってくるね」

「ダメだよフェイト！！　今あの女に会いに行ったら何されるかわからないだよ！？」

「うん。でも行かなきゃ」

「フェイト！！」

アルフが悲痛な声を上げた後、扉が開く音がした。それから声はだんだん小さくなり、やがて聞こえなくなる。そこで初めて零弥の意識が完全に覚醒する。

（ここは……生きてるんだな。フェイトとアルフに助けられたか）

零弥は体を起こすと自分の姿を再び騎士の姿に戻し、固定する。もうこの姿が初期状態に戻ることはないだろう。自分がいたのは何一つない、簡素な部屋だった。そこに唯一あったベッドに自分は寝かされていたのだ。

（フェイト……母さんに会いに行くと……そうだ。あの雷が落ちた時母さんと言っていた。……どういうことだ？）

零弥の思考が混乱する。少なくとも今は考えなしに動く事態ではないことは分かっていた。

だが、考えれば考えるほどそれは悪いように考えてしまう。

（あの雷を放ったのはフェイトの母親。あんな、とんでまない物をフェイトに向けたってのか？ 会いに行くって……おかしいだろう！！）

零弥は簡潔に今の状況を理解し、急ぎその部屋を出る。完全に回復していないのか足元がおぼつかない。だがそれでも懸命に足を進める。魔力を感じるその方向へと。

（何処だ……何処にいる……）

壁伝いに歩き、進んでいく。やがて見えたのは耳と目を塞ぎ座り込んだアルフ。恐れるように、悲しむように、逃げるように。

（何故……フェイトは……この声！？）

微かに聞こえる音。何かを叩きつける激しい音と、短い悲鳴。その悲鳴がフェイトのものと気付くのに時間はまったくかからなかった。

「っ……！ あんた。なんでここに……！」

「……………」

「答える!!」

アルフが今うちに溜め込んだ全てをぶつけるように叫んだ。涙を目に浮かべ、その手は強く握り締められている。かみ締めた唇からは血が出ていた。

「……なんでお前はここにいるんだ？」

「なに!!」

「主の悲鳴が聞こえない訳じゃあるまい」

「うるさい!! あんたなんかに何が分かるか!!」

「分からん。知る気もない。敬愛する主人の苦しみを聞き流す者など」

「っ!! じゃあ、どうすればいいってんだい!? 今ここで反抗すれば罰を受けるのは私じゃない。フェイトなんだ!! いったいどうすれば……」

そういつてアルフは泣き崩れた。分かっている。アルフがフェイトが大好きでたまらないくらい。別に零弥はアルフに対して怒っていない。怒っているのは、彼女やフェイトこんなにも苦しめる現況に對して。

「……音が止んだ」

「っ!! フェイト!!」

アルフはもうこちらを見ることなく駆けていく。体が痛むことなど

気にしていられず、零弥も後を追って走り出す。長い廊下を抜け、出た広い空間の中央にフェイトは倒れていた。アルフがその名を呼びながら駆け寄る。その身の無数の痣は娘に与えるものにしては酷すぎる。

「フェイト！！ フェイトお……」

「…… 見せてみる」

「っ！！ フェイトに何する気だ！！」

「…… 付け焼刃で悪いが治癒魔法を使ってみる」

そう言うとき零弥はその手をフェイトに掲げる。言うまでもなく、それはなのはやユーノの見よう見まねだ。それでもやらなければならなかった。その手に黒い魔法陣が浮かび上がり、怪しく光る。するとフェイトの体も淡く光出し、体の痣が消えていく。

「傷は消した。あとは起きるのを待てばいい」

「…… そうかい。疑って悪かった」

「気にするな。それより、行くのか？」

零弥は入り口の向かいにあったもう一つの扉を睨むアルフにたずねた。おそらく、そこにいるのだろう。フェイトこんな目に合わせたやつが。

「あんたに頼むのは筋違いかもしれないけど、フェイトを任せていいかい？」

「……ああ、任された」
「すまないね」

それだけ言つとその手に抱えられたフェイトを見つめる。心から愛おしそうに。

その姿を見て、零弥は諦めた。本当はアルフと共に行くつもりだった。その目が覚悟を決めた者の目だったからだ。憎い、でもフェイトが悲しむから殺したくない。しかし手加減のできる相手でもない。

（……俺はこうなつてほしくてさっきの言葉を言つたわけじゃないのに……）

零弥の隠された顔が悲しげに歪む。フェイト以上の強さ。だが、アルフとて引き下がれないのだ。

もう何も言わず、アルフは歩いていく。そして、その扉の向こうへと消えていった。

「……アルフ。無茶するな」

聞こえないと分かつていながらそう口を開いた。今の零弥にはフェイトの隣にいたことしか出来なかった。

そう時間も経たず、今いる場所が大きく揺れる。この屋敷そのものが揺れているのかもしれない。

碎け、吹き飛び、壊れる音が嫌でも耳に響いてくる。そして、先程

までに比べて特に大きな揺れが起きる。

—— アルフの魔力反応が落下していく。しかし、それは唐突に大きくなり、消えた。

「アルフ……」

（…… 転移したのか。これで今フェイトを守れるのは俺だけになっ
てしまったわけだ）

突然アルフが消えていった扉が開く。現れたのは杖をついて歩く黒い髪の女性。その頭上には九つのジュエルシードが浮かんでいた。この女性がフェイトの母親でフェイトをこんなにした張本人だとなんとなく理解した。

「貴方達は何故ここにいるのかしら」

「…… フェイトを治療するためだ。問題はないだろう？」

「見ない顔、いやそもそも人なのかしら？ 余計な事だけど、まあいいわ」

「…… 余計な事、か」

到底母親とは思えない言い方だ。アルフが行動に出たのも頷ける。

「ええ。そういえばあのとき邪魔をしたのも貴方だったかしら？
しつてを邪魔するのは余計なことではなくて？」

「あれがしつてなら、一般的な拷問もしつてだ」

「あら、言っじゃない。少し貴方に興味が沸いたけど、今はそれより優先することがあるわ」

不敵な笑みを浮かべ、フェイトに目を向ける。その目にはなんの感情も映っていない。言うならばそう、石ころを見るような目。しかしそれに仮面を被る。微笑みと言う名の仮面を。

「フェイト。置きなさいフェイト」

「……はい。母さん」

母の声を聞き、フェイトは眠りから覚める。気絶していたはずなのに。こんな簡単に呼びかけに答えるのは些かおかしい。それでも何も言わずフェイトの横に立つ、もしもこの女がフェイトになにかしようなものなら全力で攻撃できるように。

「貴方が手に入れてきたジュエルシールド九つ。これじゃ足りないの。最低でもあと五つ、できればそれ以上。急いで手に入れてきて。母さんのために」

「はい……」

零弥は唇をかみ締め、怒りを抑える。今の自分はアルフの代わりだ。耐えて耐えて、フェイトを守る。それが自分の役目だ。

「……あれ？ アルフ？ それに、貴方は……」

フェイトがいつもそばにいた者の名を呼ぶ、見回した際に見つけた自分に声をかける。

「あの子は逃げ出したわ。怖いからもう嫌だつて。必要ならもつといい使い魔を用意するわ」

「……そんな事はないでしょう。アルフはなによりもフェイトを大事にしていましたから」

「へえ、貴方にそれが分かるのかしら？」

「分かりますとも。二人を見てればよく分かります」

極力敬語を心がける。口を出さないわけにはいかなかった。アルフのためにも、自分のためにも。

「……まあいいわ。早くなさいフェイト。母さんを困らせたくないなら」

そう言つてマントを翻し、奥の扉へと消えていった。

「……あの、ありがとう」

「何故、感謝するんだ？ 俺は何もしていないのに」

「アルフのこと。庇ってくれたから」

「ああ……約束したからな。アルフに。フェイトを頼む、と」

「アルフが？」

フェイトは驚いた様子を見せた。その体はまだ重そうだ。動けそうにないフェイトを抱き上げ、その場を後にする。

「あ……私歩けます」

「無茶はするな。俺が何度も言ったことだ。今は黙って運ばれろ」

「……やっぱり、零弥だったんだね」

「……ああ」

フードだけを消し、その顔をあらわにする。前会った時となんら変わらない状態の零弥がそこにいた。

フェイトは何処となく気恥ずかしそうだ。

「お前はまだ、あの母のために戦うのか」

「……うん」

「本当なら断固反対するべきなんだろうけど、ダメなんだよな」

「……うん。心配させてごめんね」

「アルフに比べたら大したことない」

「そう言えば、アルフはどうなったの？」

フェイトのその言葉と同時に足を止める。左右に分かれる道があったからだ。

「……どっちだ？」

「右だよ」

「そうか・・・アルフはお前の母に齒向かい、傷を負ったみたいだがその後どこかに転移したみたいだ。どこかで無事だろう」

「そう・・・なんだ」

「フェイト」

その足は止めず、その顔は前を向いたまま、零弥はその口を開いた。

「アルフがいない間は、必ず俺がお前を守る」

「……ありがとう」

フェイトは顔を赤くし、背けた。

零弥は自分がフェイトを止めることが出来ないと諦め、そして自分の無力を憎みながらも一人の少女を思い出す。

彼女なら、きっとフェイトを解放してくれる。そう信じてその足を前に進めた。

第十三話 友達ならば

「……………」

零弥は無言で二人の少女を見る。

片やフェレットや狼を連れ、片や単身にてそれらを見下ろす者。

それを悲しげに、そして期待を込めた目でただただ見ていることしか出来ない。

その身に黒い衣を着込み、近くとも決して手の届かぬ場所で見ることしか。

『……………傷はもう大丈夫か？』

『うん……………零弥のおかげだよ』

『いや……………それより、なのは達とは本当に明日戦うのか？』

『……………母さんのために、少しでも早く届けてあげたいから』

『そうか……………ならもう何も言わない。周りの奴らは俺に任せろ。フ

イトはなのはと決着をつける。それだけを考えるんだ』

(……いよいよ、か)

未回収のジュエルシードはもうない。つまりお互いの持つそれらが残りの全てになる。

——ジュエルシード、膨大な力を秘めていながらもその力の大きき故に暴走をもたらす物。

それを巡って二人の少女は何度もぶつかり、傷つけあい、しかしお互いを知っていった。

だが、それもこれで最後。こんな悲しい戦いはもう終わりにならなければならぬ。

(……だがアルフが向こうにいるのは誤算だったな)

フェイトに向かって呼びかける彼女は今狼の姿でなのは隣にいた。恐らく、フェイトのことを話したのだろう。フェイトの仕打ちと、命令されて集めていることを。

それはそれで幸いだったのかもしれない。

事情を説明手間が省けたし、事情を知っていると言うことは管理局もそれを承認していると言うことを確かめることが出来た。

ただ一つ、それによる気がかりもあった。

（全てを知ってしまったのはがフェイトと真剣に戦えるのか？）

だがそんな杞憂は少女の目を見ただけで消え失せた。

覚悟を決めた。それでいて澄み切った顔をしている。それだけで安心できる。

（となると、問題はあの二人か……？）

なのはの隣にいる二人、特にユーノはこちらに厳しい目を向けている。

アルフはそうでもないが、やはり警戒は怠っていない。

（この場での俺は、完全にイレギュラーと言うことか。……仕方ない）

戦いが始まり、二人が空を飛ぶ。それを見た後、零弥は諦めがちに目を伏せる。そして昨日初めて出来るようになった魔法のうちの一つを使う。

『……おい、聞こえるかお前達』

『念話！？ あんたなのかい！？』

『ああ、あの二人には聞かれたくないのでな』

『……貴方は何者ですか？』

『どんな状況でも関わらず、情報を収集しようとするのはいい度胸だが、今はそんなことを話している場合ではない』

『……では、何の話ですか？』

『簡単だ。あの二人の戦いに手を出さない。それだけだ。それを約束するならば俺も戦闘には加入しない』

『……分かった』

『アルフ！？ 信じてもいいの！？』

『……こいつは前にフェイトを体を張ってまで守ってくれたんだ。それに怪我を治してくれた。それだけでもお釣りが来るよ』

『そうか。恩にきる』

一息つき、零弥は海上で戦闘を繰り広げる二人を見上げた。

今回の戦いは今までとは格が違う。魔法の修行を怠らないのはの力は凄まじい。もちろんフェイトだって負けてはいない。他から見れば互角……いや、なのはが少し押している。

恐らく、自分が行っても勝てないだろう、そう零弥は思った。少し前から漸く使うようになった自分とは格が違うのだ。

しかし、いきなりフェイトの空気が変わる。突然フェイトを中心に展開された魔法陣はかなり大きい。ほぼ全ての力を込めた一撃。

それと同時になのはの周りを複数の魔法陣が出たり消えたりを繰り返す。完全に囲み込みなのはの退路を断つ。

『Phalanx Shift.』

バルディッシュの声が発せられた瞬間、フェイトの周りに現れたのは数え切れないほどの球体。それら全てが電撃を纏っている。

なのははいつのまにかバインドに捕まり、磔のような状態だ。絶体絶命。正にそんな状況だろう。

「なのは！！　今サポートを……」
「ダメええ！！」

空間に響いたのは今危険な状態にあるなのは自身の声。その顔には迷いも恐怖もない。

今それを見てなのはがまずいのは誰にでも分かるだろう。

それでも、

『「全力全開の一騎打ちだから。私とフェイトちゃんの勝負だから！！」』

その口からも、念話からも同じ言葉が流れる。それでも二人の心配げな表情は消えない。

だが零弥はもう心配はしない。彼女が大丈夫と言ったのだ。それに勝る理由はない。

「フォトンランサー、ファランクスシフト……打ち砕け！　ファイアー！」

フェイトの周りの球体がなのはに向かって飛び、はじけていく。少女の姿はあつという間に煙に隠れ、見えなくなる。だがその手が緩められることはない。

残り数発を残し、全て着弾する。万全を規すためか残りの玉を一つにあわせながらもその小さな肩は大きく上下していた。煙がだんだんと晴れていく。

——そこにいたなのはは傷一つない。その姿を見て零弥は目を見開いた。

（あれを全部防いだのかよ……尋常じゃないな）
「撃ち終わるとバインドつても解けちゃうんだね。今度はこっちの……」

なのははレイジングハートをフェイトに向ける。もう既に見慣れた技。

「——番だよ——！」

その声と共にあらゆるものかき消す勢いでディバインバスターは発

射される。

フェイトが対抗するためにあわせた玉を飛ばすが塵のように消える。動くことも出来ず。フェイトは真っ向からそれを受ける。直撃ではない。魔法の障壁は張つてある。

さがそれでも、苦しいことには違いない。

しかし、フェイトはぼろぼろになりながらもそれを受けきった。残り少ない魔力でよくやったと思いつながら、零弥はなのを見る。その頬を一筋の冷や汗が流れた。

デイベインバスターの更に上を行くともない魔力が密集していたからだ。

その力はやはりなのはだからこそ、ある意味規格外な彼女だから為せることなのかもしれない。

「これが私の全力全開！ スターライト、ブレイカー……ッ！」

バインドに囚われたフェイトを蹴散らす勢いでそれは襲い掛かる。海すらを破壊する勢いで。

デイベインバスターが可愛く見える。とんでもない、フェイトは無事なのか？

辺りが桃色の光りが包み込み、やがてそれが晴れた時、フェイトはだんだんと落下していく。

零弥は海に落ちる前にぼろぼろのその体を受け止める。

「……負け……ちゃった」

「そうだな。でも、これが結果なんだ。フェイト」

「……………そう、みたいだね」

フェイトが悔しさに顔を歪めると、バルディッシュがジュエルシードを排出する。

なのはが空から下降してきたが、ジュエルシードではなくフェイトへと近寄った。

「……飛べるか」

「……うん」

「ごめんね。大丈夫？」

「……うん」

「私の、勝ちだよ」

零弥は少し離れてその状況を見ていた。とうとう、ジュエルシードを巡る二人の戦いは終わった。

これからどう向かっていくのか分からない。だが、言える事ははあ
る。

まだ、全てが終わったわけではない。

「……来たか」

遙か上空、感じた魔力。淀んだとは言い難い、禍々しい空。見覚え

はある、これから起きることの予想も。

「ブラックカーテン!!」

今度こそは落ちてくる雷を決して二人の間に何か落とさせない。その誓いと共に、零弥の黒衣のマントは翻り、轟く雷を完全に防ぐ。

しかし。忘れていたのは争う等の原因そのもの。

フェイトのジュエルシードはいつのまにか消え失せていた。恐らく、フェイトの母、プレシアに持っていていかれたのだろう。

「つく!! してやられたか……」

零弥は舌を打つとフェイトを見る。その目は恐怖や悲しみ、不安でいっぱいだった。

それでもなのはに抱きかかえられた姿を見て不謹慎ながらも安心する。

『なのはさん。そちらの皆さんを回収します。……そこにいる貴方も回収しますが、穏便にお願いします』

「……………フェイトの安全を保障するならば」

突如として現れたリンディ艦長の通信に言葉は返さない。しかし、

フェイトに付き添う形で共に転送される。

そして、再び乗り込む。

次元航行艦、アースラに……

第十四話 足掻き、もがく

「お疲れ様。それから、フェイトさん？ 初めまして」

アースラに連れて来られ、ブリッジにてフェイトや零弥を迎えたのは笑顔のリンディだった。

今二人はなんの拘束もされていない。フェイトに手錠をはめられそうになった時、零弥が抗議したのだ。

「既にフェイトは力を使い、疲弊している。彼女を拘束する必要はないと思うが？」

それでクロノにはなにかと言われたが、思ったよりは早く向こうが折れた。

もしかしたらこちらの正体をうすうす感じているのかもしれない。

今のブリッジは正に緊迫状態。先程のプレシアの魔法で向こうの場所を突き止めたのかもしれない。

ブリッジの巨大なモニターには前に行った場所に似ている道があった。

それとは別に、リンディがなのはの目を見て、その後なのはが頷く様子が見えた。恐らく念話だろう。流石に内容は分からなかったが。

「フェイトちゃん、良かったら私の部屋……」

なのはがそう言葉をかけるがフェイトは動かず、ただただモニターを見つめていた。

そしてとうとうモニターにあの場所が映る。

『総員、玉座の間に侵入、目標を発見』

そう、プレシア・テストロッサの待つ部屋が。

『プレシア・テストロッサ！ 時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑で貴方を逮捕します』

『武装を解除して、こちらへ』

杖を持った管理局員が警告を投げかけても、プレシアはただ不気味な微笑を作り、鼻で笑う。

管理局員はプレシアを包囲し、しかし更に奥へと進んでいく。

そして、見つけてしまう。

『こ、これは……!』

見つけてしまったのだ。

うつすらと緑に緑色に光る狭い通路。緑色の光を放つ柱。

——いや、水槽の様な巨大な容器に入った、フェイトそっくりな少女を。

最初はそこにいる者全員が目を疑った。フェイトを見て、それからモニターの少女を見直す者もいた。フェイトの目はこの上ないほど見開かれ、零弥の脳は処理がまったく追いついていなかった。

『私のアリシアに、近寄らないで!』

いつの間にかその少女を守るように立つプレシアの不可視の魔法により、管理局員が吹き飛ばされる。

慌てて応戦するが、まったくの無傷。あっさりとやられてしまう。

「アリ………シア?」

零弥は思わず呟いていた。そこにいるものの殆どがモニターに釘付けになっていた。

似ているなんてレベルじゃない。モニターの少女が一糸纏わず、少し幼いことを除けば瓜二つだ。

『もうだめね。時間がないわ』

そう唐突に呟く。水槽の中の少女を心から愛おしそうに、しかし狂気の混じった目で見つめる。

『たった9個のロストログアでは、アルハザードに辿り着けるかどうかは、分からないけど、でも、もういいわ、終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間も、この子の身代わりの人形を、娘扱いするのも・・・聞いていて？ あなたのことよ、フェイト。せっかくアリシアの記憶をあげたのに、ソックリなのは見た目だけ。役立たずでちつとも使えない、私のお人形』

フェイトはただ呆然と、それでいて絶望に似た目で立ち尽くす。プレシアの言葉が突き刺さる。訳がわからない。だが確実にその言葉はフェイトを傷つけていく。

「……最初の事故の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テストロッサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究は使い魔と

は異なる、使い魔を超える人造生命の生成」

エイミイが悲しげに、しかし確かにその言葉を続けていく。

「そして、死者蘇生の秘術、フェイトって名前は当時彼女の研究につけられた開発コードなの」

『……よく調べたわね。そうよ、そのとおり』

そこまで言われれば流石に嫌でも思考が巡る。その答えに気付いてしまう。

『だけどダメね。ちっとも上手くいかなかった。作り物の命は所詮作り物。失ったものの代わりにはならないわ。……アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ』

「……………」

『アリシアは時々わがままを言ったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた』

「……やめて」

何も言えない者達の変わりになのはが悲しげに訴える。だがそれでも言葉は止まらない。否、止める気など毛頭ないのだ。

『アリシアは……いつでも私に優しくした……フェイト。やっぱりあなたはアリシアの偽者よ。せっかくあげたアリシアの記憶も、あ

「なたじゃダメだった」

「やめて……やめてよ」

『アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使っただけのお人形。だからあなたはもういらないわ。どこへなりと消えなさい!』

「お願いもうやめて!」

懇願するのはの声になど耳を貸さず、プレシアはただ狂ったように笑っただけだった。

零弥は奥歯をギリツと噛み締めるだけ、それ以外、なにもしない。

『ふふ、いいこと教えてあげるわフェイト。あなたを作り出してからずっとね私はあなたが……』

——大嫌いだったのよ!」

「っ……!」

信じていた全てを粉々にされた、そんな気持ち——いや、自分達が彼女の気持ちに分かるなんて事を言うことすら彼女に対しての侮蔑なのかもしれない。

そう思ってしまうほど、絶望的、そして無機質な表情でフェイトは膝を折った。

その手に強く握り締めていたバルディッシュ、パートナーすら取り落とし。

咄嗟と言つていいほどに、零弥は少女の小さな体を支えた。その身にあるのは底知れぬ怒り。

こんなにも健気で、優しく、母のために生きた少女を、あんなにもあつさりと否定するあの女に。結局何も出来ず、悲しませることしかできない自分に。

「た、大変大変！ ちょっと見てください。屋敷内に魔力反応、多数！」

「なんだ！ なにが起こっている！」

モニターに映された映像にはまるでどんどん赤が広まっていく様子が見られた。

クロノやエイミーが分からないことが自分には分かるわけもない。だが、プレシアがなにかしようとしていることだけは分かった。

ブリッジが騒がしくなる中、プレシアを映すモニターはもうない。しかし、その声だけは響いてきた。

『私達の旅を、邪魔されたくないのよ』

『私達は旅立つの。忘れられた都、アルハザードへ！！』

『この力で旅立って、取り戻すのよ。全てを！！』

その言葉が終わり、それと同時にブリッジに警報が響き渡る。

プレシアがジュエルシードをフェイトに集めさせたのはアルハザードという場所に行くため。

アルハザードに行くのは全てを、アリシアを取り戻すため。

だんだんと全てが繋がっていく。そうして分かる。

結局フェイトをいい使い捨ての駒にしたに過ぎないと言ったこと。そしてそれがプレシアの逃げ道に過ぎないこと。

「…………ふざけやがって。なのは！！」

「ふえ！？ は、はい！！」

「フェイトを休ませてやりたい。何処に行けばいい！？」

「えっと。こつち！！」

なのはの先導の元、零弥はフェイトを抱き抱えて着いていく。その

後にはユーノやアルフも着いてくる。

そして反対側からある人物と鉢合わせする。
黒い防護服、そして杖。執務官の姿へと変わったクロノ・ハラウオ
ン。

「!!」

「クロノ君何処へ？」

「現地へ向かう。元凶を叩かないと」

「私も行く!!」

「僕も!!」

「……俺も行く。アルフ、フェイトを任せる」

「……分かった!!」

「……なのはやユーノはともかく、君は——」

アルフにフェイトを渡し、零弥はクロノに向き直ったが、その目は
厳しい。

向こうにしてみればこちらは敵か味方かも判別のつかない怪しい人
物。

本来なら連れて行くことは間違いだ。だが……

「役立たずにはならない。頼む……っ!」

誠心誠意、なんて言える事でもないのかもしれないが、ただ真っ直
ぐと頼み込むこと。

これがダメなら単身で飛び込むことより他はない。

「……分かった!!」
「感謝する!!」

零弥はただ一言言々と先に行くクロノの後について行く。
その更に後ろにはなのはとユーノも続く。

このまま終われない。終われる訳がない。

身勝手で、どうしようもないあの女に何も言わないうちには、絶対に!!

第十四話 足掻き、もがく（後書き）

次話、ようやく主人公、零弥の戦闘が入るかもしれない。

第十五話 そのための力

プレシアの城に転送され、先を見据える。

そこには扉を守るように配置された無数の人型の鎧機械がいた。

「……うじゃうじゃと、プレシアの手先か」

「ホントに、いっぱいいるね」

「まだ入り口だ。中にはもつというよ」

「クロノ君、この子達って……」

「近くの相手を攻撃するだけの、ただの機械だよ」

「なるほど、ならば手加減はいらないな」

零弥が一步踏み出す。しかし、それをクロノが手で下がるように言う。

「この程度の相手に無駄弾は必要ないよ」

『Stinger Sniper』

クロノが言葉と共にその手の杖を掲げる。するとデバイスから青い刃が発射され、敵を刻んでいく。

あっという間に敵を蹴散らしてしまうが、唯一一番奥にいた巨大な鎧だけは貫けなかった。

「あの一体くらいなら、俺に任せろ!!」

そう言つて零弥は飛び出し、一直線に駆け抜けていく。その手には何の武器も握られてはいない。

なのはの制止の声が耳に届く。しかし、止まらず駆け抜けていく。

巨大な鎧が前に出てくる。その手の斧を振りかぶり、真つ直ぐに振り下ろす。

一撃でぺしゃんこになつてもおかしくない一撃。だがそれを殴り、破壊する。

「そんな物でこいつの防御が破れるか!! 食らえ!!」

零弥のガントレットが煙になつたかと思うと、次の瞬間には手が刃渡り五メートル近くの刃へと変わる。そしてそれをなんてことのない、真横に振り切つた。

バチバチと音を立てながら鎧は腰の少し上辺りで切断され、爆発した。

そして次の瞬間には再びガントレットに戻っていた。

「よし。先に進むぞ!」

「うん、うん」

(な、なんなんだあれは……)

クロノは先程の物に疑問を抱きながらも着いていく。質問しないのは時間がないことを分かっているからだろう。

扉の向こうには元は普通の廊下であつただろう道があつた。しかし今は不気味に光った空間が穴が空いたようにあり、それを避けて走っていた。

「その穴、黒い空間がある場所は気をつけて」

「この穴はなんなんだ？」

「虚数空間。あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ」

「飛行魔法もデリートされる。もしも落ちたら、重力で底まで落下する。二度と上がってこれないよ」

「き、気をつける！」

長い廊下を走りぬけ、終わりにあつた扉を蹴り開ける。
そこには入り口より更に沢山の鎧機械が待ち構えていた。

「くっ……どうする？」

「ここから二手に分かれる。君達は最上階にある駆動炉の封印を！

！」

「く、クロノ君は！？」

「プレシアの元に行く。それが僕の仕事だからね」

「なら俺もクロノについて行く。駆動炉とやらは任せた」

「……好きにしろ。今道を作るから、そしたら――！」

クロノが大群に向かって杖を向ける。なのはがユーノと手を繋ぎ、零弥は見よう見まねで攻撃魔法を作り出す。

『Blaze Cannon』

なのはのデイベインバスターに近い砲撃が発射され、一列に敵がなぎ倒されていく。

隙を見てなのはとユーノが飛び上がり、上に向かっていく。

「クロノ君！ えーと、黒い魔法使いさん！ 気をつけてねー！」

そんな言葉を残し、なのはとユーノは消えていった。

「……まだ気付いてなかったのか。なのはの奴」

「君も難儀だね零弥」

「やっぱバレてたか。今は謎の協力者って事で頼むぜ。後が怖いからなー！」

ぼやきながらも零弥は魔法のイメージを固めていく。どうしても浮かんでしまうのはやはり馴染み深い物だ。零弥の目の前に黒い魔法陣が展開される。

「アーカナイト・バスター……!!」

思いっきり魔法陣を殴りつけると黒い砲撃が発射される。しかしデバイスなしでの砲撃魔法は収束が半端で木の枝分かれのように轟く。今回はそれがよく働き、クロノ程とは言わずとも何十体もの鎧をなぎ倒していく。

「先導は任せる！　ただ道は教えてくれ。迷子になる」

「君って人は……でも今は君の防御力を使わせてもらっよう!!」

零弥は両手を黒い剣に変え、突っ込んでいく。巨大で更によく切れるのは零弥しか持ち得ないこの力のおかげだ。

暇な時にイメージ程度の簡単な訓練をした。黒い霧は自分の好きなように形を変えることが出来、許容範囲内なら伸縮、圧縮は思いのままだった。ただし自分の体と繋がっていないければならないと言う条件がある。これだけでも十分衝撃に強く、軽くて使い勝手はいいが、そこまで硬いわけではない。

では何故敵を斬ったり身を守ったり出来るのか。それはその黒い衣くろいころもの特色だった。魔力を少し流すだけでかなりの硬度を得る事ができ、尚且つ形は自由なのだから剣だって作れる。

魔力が切れない限りはかなり強い能力……と言いたいが、零弥が自分の魔力がどの程度あるのか分からない。

だから絶対に無茶はできない、そんな半端なリスクはある。

「邪魔だあああ!!」

通路の敵を切り捨て、二人は更に進んでいく。倒しきれなかった敵をクロノが倒し、零弥が盾と剣の代わりを務める。

細い道なら横からの攻撃は気にせずすみ、場所にしても組んだ二人にしても条件は最高だ。

(……ん？ この感じは……アルフか。二人に合流して順調に上ってるみたいだな)

そんな事を考えながら敵を切り伏せる。廊下を出て再び広い場所に出る。

「……はあ。また雑魚か。どうする執務官」

「あまり消費したくない。道までの敵を倒して進むべきだ」

「あいあいさつと。どけ機械共――ッ!!」

迷いなどなく、零弥は突っ込む。少しずつ敵を切り倒しながらも体の疲労に気付く。

まだ魔法を使つて疲れたと言う感覚をしない零弥にはそれが魔力の減少だとまでは分かってもどの程度かは分からない。

「クロノー！ プレシアのいるところまであとどれくらいだー！」

「そんなに遠くない！ でも敵が多すぎる！」

「そうかい。ならもつと力入れていくぜー！」

零弥は走る速度を速め、更に素早く剣を振る。

しかし別に極めたりしたわけでもない零弥の剣はがむしゃらに振っているようにしか見えない。

それでも敵が倒せているのはただのプログラムだからだろう。

（……この感覚。 フェイト？ ……目を覚ましたのか）

なのはの気配のすぐ近くから感じたフェイトの気配に安心しながらも気合を入れなおす。

目指すは一直線。 プレシア・テストロッサの元。

第十五話 そのための力（後書き）

主人公の初めてのそれらしい戦闘ですね。
一見チートに見えて弱点が多数あったりしますけど

第十六話 少女の決意

『プレシア・テストロッサ』

リンディ艦長の声が頭に響く。恐らくオープンで流された念話。そして、その対象には名前の人物も入っているのだろう。

『終わりですよ。次元震は私が抑えています。駆動炉も時期封印。あなたの元には執務官が向かっています。忘れられし都アルハザード。そしてそこに眠る秘術は存在するかすら曖昧なただの伝説です！』

零弥達がいまだ走り続けている間にも会話は続いていく。辺りの風景は屋敷の面影もない、ごつごつとした道。

『違うわ。アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が砕かれる時、その狭間に滑落して行く輝き……道は確かにそこにある』

『……随分と分の悪い賭けだわ。あなたはそこに行って、一体何をするの？ 失った時間と、犯した過ちを取り戻す？』

『……そうよ。私は取り戻す。私とアリシアの過去と未来を……っ！ 取り戻すのよ。こんなはずじゃなかった』

『「世界の全てを！！」』

その言葉が終わった瞬間、クロノがギリツと奥歯を噛み、前方に砲撃を発射する。

青い閃光が駆け抜け、前方にあった邪魔な岩山を抉る。

岩があつた場所に立ち、下を見下ろすとそこにいたのはプレシアと眠り続けるアリシア。

「世界はいつだって、こんなはずじゃないことばかりだよ。ずっと昔から、いつだって、そうなんだ！！」

「その通りだ！ 悲しかろうと苦しかろうと、世界はいつまで経っても不平等で、それでも人は前を見て進んでいかなければならない。あんたは、娘の死と言う現実から逃げているだけだ！！」

クロノが、零弥が、言葉を浴びせた。そして歯がゆそうにプレシアが表情を歪めたと同時に上からフェイトとアルフが降りてきた。

「こんなはずじゃない現実から逃げるか、立ち向かうかは個人の自由だ！」

「だが！ それに関係のない人間を巻き込むなんて、絶対にあつてはならない。間違ってるんだ！！」

地に足をつけたフェイトは悲しげにプレシアを見つめる。
と、クロノと零弥を睨んでいたプレシアが突如咳き込み、口の端から血が流れた。

（血！？ まさかプレシアは……）

「母さん……！」

「……何をしにきたの？」

駆け寄ろうとしたフェイトをその鋭い目で睨む。

「消えなさい。もうあなたに用はないわ」

「……あなたに言いたいことがあって来ました」

フェイトはプレシアの言葉に表情を歪めることもせず、見つめていた。
プレシアは杖に寄りかかり、なんだと言わんばかりにフェイトを見た。

「私は……私は、アリシア・テストロツサじゃありません。あなたが作った、ただの人形なのかもしれません」

辺りの人物は皆何も言わずフェイトの言葉に耳を傾ける。

「だけど、私は、フェイト・テストロッサは、あなたに生み出してもらって、育ててもらった、あなたの娘です!!」

それを聞いてプレシアは笑い始める。くだらない茶番だとも言うように。

「……だからなに？　今更あなたを娘と思えというの？」
「あなたが……それを望むなら……それを望むなら。私は世界中の誰からも、どんな出来事からも、あなたを守る」

「私が、あなたの娘だからじゃない。あなたが、私の母さんだから!!」

そう言ってフェイトは手を伸ばす。
一緒に来て、この手をとつてと、零弥にはそれだけでフェイトの気持が表されているように感じた。

プレシアの眼光が、一瞬だけ優しくなったように見えた。

「くだらないわ」

フェイトの体が震える。プレシアの目はまた元に戻っていた。微笑を浮かべながら杖を地面に打ち付けた。そこを中心に紫の魔法陣が展開され、光が立ち昇る。地面が激しく揺れ、辺りに輝が走っていく。

「まずい!!」

「くう。なんだこれは!!」

「このままじゃこの城が崩壊する。すぐに脱出しなきゃ!!」

「最後の最後に捨て身かよ。フェイト! アルフ!」

零弥が呼びかけるが、その耳は言葉を聞かず、その目はプレシア以外を映してはいない。

「っ! 私は向かう。アルハザードへ。そして全てを取り戻す。過去も未来も、たった一つの幸福も!!」

だんだんと地が割れ、それはプレシアの足元へと到達する。そして、大きく裂けた大地はプレシアを、アリシアを飲み込んでいく。

「母さん!!」
「フェイト!!」

それを見て助けようとするフェイトをアルフが止める。もう、間に合わない。

プレシア・テストロッサの心は本人でさえ信じられないほど穏やかだった。

娘を蘇らせると言う願いは達成できそうにない。

だがそれでも、フェイトの外ではなく、中にアリシアを見た。無論悔いのないと言えば絶対に首を横に触れる自信があった。それでも、今は……

「……一緒に行きましょう。アリシア。今度はもう、離れないように……」

そして、落ちていった。

「くそ！ くそっ！ くそっ！！
なんでこんなにムカつくんだよ

！！ フェイト！ アルフ！！」

再び呼びかけてもフェイトは反応を示さない。プレシアが落ちていく瞬間を見たとき、無性に自分が腹立たしくなった。だがその理由を考える暇はない。

「零弥！　なのはが来る。彼女に任せるんだ！！」
「つく！　分かった！」

目の端に下りてくるなのはと彼女に向かって手を伸ばすフェイトを見て零弥は踵を返した。

落ちてくる破片やら足元の虚数空間に気をつけながらもアースラの転送された零弥とフェイトを待っていたのは警戒した様子の管理局員だった。その手には杖が握られ、抵抗に備えてあったようだ。

少しは冷えた頭で理解する。自分やフェイトは管理局に逆らった敵。共闘はしてもそれは一時的だ。致し方なし、と零弥は首を振って両手を差し出した。

「待つんだ。彼は……」

「クロノ」

なにかを言いかけたクロノに声をかけ、首を横に振る。

自分がどんなことをしたかは分かっているつもりだった。

フェイトやアルフも抵抗せず、悲しげにこちらを見るのは達とは別に薄暗い部屋へ連れて行かれる。

フェイトの目は悲しげに伏せられ、アルフの目は零弥を申し訳なさ気に見ていた。

一言念話で気にするなと言い、あとは沈黙した。

フェイトはこれからはもっと自分で考えるべきだ。

そして、数日後……………

最終話　そして、明日へつながら（前書き）

あくまで無印の最終話です。

最終話　そして、明日へつながる

どれくらいの時間がたったかはいまいち分からない。

それでも零弥はフェイトを見守る形で一緒にここにいようと決めた。フェイトが落ち着き、普通に会話が出来るようになったとき、何気なくこんな質問をした。

「ここを出たら何がしたい？」

「……あの子と会って話が見たい」

それを聞いて零弥は内心嬉しかった。なのはの時もそうだが個人的に彼女らの保護者になった気分だった。もうこの二人を見て妹を思い出すことはない。代わりにプレシアが落ちていく時に思い出したのは父や母だったのだ。

彼女もアリシアに対しては優しく、そして時には厳しく。理想の親子のようだったのだろう。だがそれも娘が死んで全てが狂ってしまった。

本当にこの世界は、こんなはずじゃないことばかりだ。自分が偉そうに説教できる立場ではなかったのかもしれない。

だが、どうしても聞きたかった。

愛しい娘を、その姿をした娘を傷つける気持ちとは一体どんな気持ちなのか。

どれほど希望を持っていたのだろうか？　どれほど喜んだのだろうか？

そして、実際にはアリシアとは全くの別物であったことに、どれだけ絶望したのだろうか？

気持ちその物は想像しようにも全く理解できない。

家族を失ったとき、自分は世界を憎んだ。でもどうしようもなくて結局諦めた。

——いや、世間一般では受け入れた、が正しいのだろうか？

どうしようもない事を知っていたから、無力な自分に出来ることは少なすぎたから。

世界を恨みはしても、それを仕方が無いことと知っているから。

だからそうやって自分を保つことが出来た。しかし、プレシアはどうだったのだろうか？

傷を癒すことも、何かを破壊することも出来る魔法に期待しない訳がなかったはずだ。

自分なら出来ると追い詰めて、結局失敗ばかりで。その心が傷つくのは仕方なかったのかもしれない。

同情は出来た。いくらでも。だがそれがなんの意味もなく、フェイトを傷つけるものだと気付いていたから何も言わなかった。

様々な思いが巡り、時間が経過していく。

だが唐突にそれが終わりを告げたのだ。

「管理局の本局に異動……か。いきなりだな」

「こちらとしては処遇をなんとかするだけでも精一杯だったんだ」

「そうか……すまない。ありがとう」

硬く閉じられた扉が開かれ、待っていたのは何らかの書類を持っているクロノだった。

フェイトの罪がほぼ確実に無罪になるように手配してくれたらしい。それには心から感謝した。

そして、フェイトは異動になる前にと願いを口にした。

今フェイト、アルフ、クロノ、そしていつものように黒い衣を被った零弥は海鳴にある橋の上である人物を待っていた。

降り立って少し経ち、その人物が向こうから駆けてくる。

「フェイトちゃん!!」

手を振りながら近づいてくる少女、高町なのはを見てフェイトの表情は嬉しそうに変わる。今のフェイトはバルディッシュの時の防護服ではなく、私服だった。

すぐ近くまで近づき、笑いあう。あれから会うのは本当に久しぶりだ。

「あんまり時間はないんだが、しばらく話すといい。僕達は向こうにいるから」

「ありがとう!」

「・・・ありがとう」

そして零弥はクロノとアルフと一緒に離れていく。なんだか寂しい気持ちになりながらもそれを遠くから眺めることにした。いつの間にかアルフの肩に乗ったユーノも共に。

二人は少しぎこちなく、はにかみながら話し出した。

初めて会ったときとは比べ物にならないほどその姿は初々しく、幼かった。

それを見ていて、零弥はつい先日までの自分を思い出してくる。

怠惰に、変化を求めながらも何もせず、ただ無駄に毎日過ごす日々。

そんな毎日の中で魔法に、なのはに出会い、フェイトに出会い、初めてなんとかしたいと思い。

でも結局無力で、その手は女の子一人助ける事もできず。そしてまた力を求めて――

遠くで泣き崩れるのはをフェイトが抱きとめた。

そう。悲しい結末なのかもしれないけれど、これが自分の望んだ物。二人の少女がぶつかり合い、傷つけあい、だけど最後にはこうして

和解して。

ハッピーエンドとは言い難いのもかもしれない。でも、こうして笑顔に笑う子供達がいるならば。

「……あんとこの娘はさ、なのはは、本当にいい子だね。フェイトがあんなに笑ってるよ」

アルフが肩に乗っているユーノに向かって語りかける。彼女も嬉しそうに、でも泣きながら。

クロノが立ち上がり、フェイトに呼びかけた。

そうして零弥はもう自分のすることはないと気付く。

フェイトにはアルフもいるし、どれだけ離れていてもあの二人は友達だ。

なのはがいきなり自分の髪留めのリボンを取り、フェイトに渡した。

「思い出に出来るもの。こんなしかないけど」

「じゃあ、私も」

そう言ってフェイトは自分のリボンをはずし、なのはに渡した。

「……さて、と」

「零弥、どうしたんだ？」

フェイトに別れを告げたのはを見て大きく伸びをする。その間にもなのはがアルフの別れを告げていたが。

「逃げたりした場合、また犯罪者として捕まって罪が重くなったりするんだよな」

「もちろんそうさ。今の君はフェイトの共犯ってことになってるからね」

「ふう……でも犯罪者はこの黒い衣を着ている人物であって、実際は誰かなんて分からないだろ？」

「確かに、実際君は素性が不明なだけで罪は公務執行妨害だけ、そこに理由をつければぎりぎりチャラかな」

「話が分かるね。やっぱり気が合いそうだ」

「……そうだね。民間協力者として、アースラに来るなら歓迎するよ」

「ああ、きつと行く」

クロノを追い越し、歩き出す。そして黒い衣を取っ払う。そこにいるのは黒い魔道士ではなく、黒野零弥と言っ民間協力者。

フェイトとクロノ以外は驚いた様子でその姿と衣が消えていくのを見ていた。

「れ、零弥君!？」

「君だったのかい!？」

「うすうすそんな気がしてたけど、まさか本当にそうだとは……」

「はは。ま、そういう訳さ。フェイト、また、な」

「うん……零弥。またね」

三人の足元に魔法陣が出現し、輝き始める。

「バイバイ。またね。クロノ君。アルフさん。フェイトちゃん!」

「……またな」

魔法陣の光は辺りを飲み込み、やがてそれが晴れたとき残っていたのは二つの人影だけだった。

一人はいつもツインテールにしている髪を下ろし、その肩にフェレットを乗せて。

一人は黒い、少し伸びた髪を風に揺らしながら。

「なのは、零弥」

「うん!」

「ああ!」

そうして二人は嬉嬉わいわいと自分達の居場所に帰っていく。

今ここに、本当の意味で21個の青い宝石を巡る戦いが終わりを告げた。

彼はどこか明日からの日々が何処か憂鬱そうに帰路に行く。

短くも魔法に関わった日々がなくなってしまうことに寂しさを感じながら。

でもきつと。物語はここから始まっていく。

なんとなく、そんな気がして、零弥は空を見上げた。

最終話　そして、明日へつながる（後書き）

無印編、終了しました！

すぐにA、S編と行きたいところですが、間にいくつか挟みますゆえ、どうぞよろしく。

今更ながら主人公設定紹介（前書き）

本当今更ですね、すいません。

今更ながら主人公設定紹介

・オリジナル主人公

黒野 零弥

(くろの れいや)

13歳 A型

特にイケメンなわけでもなく、悪いわけでもない少年。

家族構成は父、母、妹の四大家族だったが、なのはと会う大体一年ほど前に飛行機の墜落事故で死亡、又は行方不明。零弥は奇跡的に生還した。その頃から他人が自分を認識しにくく、更に簡単に忘れるようになる。生活費は親戚に他称援助をもらっていたが、やはり忘れられるために今だけを考え生きようになる。しかしそれは魔力を持つものには無効らしく、なのはやユーノとはよく関わる。甘いものが好き。身長、体重についてはコンプレックス。

ジュエルシードの戦いの後はいろいろあるのだがそれなりに平和に暮らしている。

髪は黒髪の前分けで、身長体重共に一期のクロノとほぼ同じ。

レアスキルかは不明だが、大きい力を持ったジュエルシードの発動、またはその兆候に気付けること。

魔法の発動された場所の大体の特定。しかし、念話、飛行魔法などの微量の魔力は除外。

黒い衣の正体は不明だが、零弥はそれを自分の好きに使える力とし

て認識しているのであまり気にしていない。その能力はその許容範囲までの伸縮、圧縮が出来、尚且つ魔力を流すことで硬質化する。弱点にしてはあんまりだが、魔力が尽きると一気に脆くなる。硬質化前の状態（不意打ち）で攻撃を受けるとそれなりにダメージを受けること。

彼が魔力もなく魔法を使えるのは不明だが、ユーノの推測によると体の中にしまわれた黒い衣がリンカーコアを覆い隠しているのではないかと言つこと。

・ブラックカーテン

黒い衣を硬質化させ、盾にする。その範囲は特性上広げることもあるが、頭の中でかなりのイメージが必要なので全体の硬質化はできない。金属でも布でもないので、燃える心配も感電する心配もない。

・アーカナイト・バスター

なのはのデイベインバスターの見よう見まね。ただ魔力光が黒いので砲撃も黒い。

威力はなのはの物より威力が低く、連射ができないので、魔力値はそう高くないと推測される。

更に、デバイスも何も所持していないため、その収束はかなり不完全。A、sでこれは修正されるのか……

イメージはStrikerSのスバルのデイベインバスター。ただ

し範囲は近・中距離。

今のところ技はこんなものですね。

剣を出すことは技じゃないのかって？ 名前が浮かばないんです。

今更ながら主人公設定紹介（後書き）

他にオリキャラを出すつもりは一応ありません。
でもちよつと考えたりしたりしなかったり。

番外編 ある日のあること part・i (前書き)

ストーリーに直接は関連しません。

大丈夫だ。問題ない。

番外編 ある日のあること part・1

「478、479、480……」

海がうかがえる公園。そこで早朝早く木刀を振り続ける人物がいた。それは世間一般的に言う素振りで、その表情は真剣そのもの。

「497、498、499、500！！ だっしやーーーーっ！！」

一通り回数を終え、少年は歓喜する。暑苦しい空気が辺りを支配しているが、彼の隣は更に暑そうだ。

今日その日は世間一般的に言う夏だ。子供達が大好き夏休みには届かないが、彼には関係ない。毎日が休みのようなものだ。

「うし！ 基礎訓練終了つと。お次は……」

楽しそうに木刀を握り締め、目を閉じる。すると木刀はだんだんと黒く染まっていく。

彼の能力、黒い衣で木刀を包んだのだ。触れているものを包むくらいなら大して難しくはない。それなりに練習も重ねてきたのだ。

これには二つの意味がある。一つはこれからすることのために木刀を保護するため。もう一つはその能力の欠点の為。

体に身体能力を上げる魔法をかけ、第二訓練開始。

もしもそれを通行人がいたなら間違いなく立ち止まってそれを見ただろう。

いきなりどう考えてもまともじゃない剣の振り方を始めたのだ。

それは最早手を振り回していると言っても過言ではない。その先に木刀がついていっているのだ。

回転してみせたり飛び跳ねたりしてみせたり、更には叩きつけてみたり。

どうも彼は子供っぽい性格……いや、子供なんだが……

それを一時間ほど続けると満足したのか家へと帰っていた。

「あー、いい汗かいた！」

自宅に戻ると今度はシャワーを浴び、食事を取り始める。一人暮らしももうすぐ一年に届く頃。料理には慣れたものだった。出来上がったスクランブルエッグを皿に盛り、テーブルに着く。

そこには彼以外だれもいない。別にそれには慣れていた。一年近く前のことを引きずるわけにはいかない。

「ん、あゝあ。寝てたか」

零弥はいつの間にかソファーに突っ伏していた。食後に寝ると体に悪いと誰かに言われた気がしたが直ぐに頭の中に消えていった。

「んんん……うげっ！　もう三時になるじゃねえか！　やべえ！
！」

零弥は飛び起き、支度をすると家を飛び出した。今回は木刀を持っていた。とはいかなかった。

「ギリギリセーフ!!」

「残念。ギリギリ遅刻よレイ君」

「桃子さん!? ぐああああ!! しまったああああ!!!!」

頭を抱えて倒れこむ。零弥が半ば飛び込むような形で入ったのは翠屋と言う喫茶店だ。そこは友達（と言うより見守る対象?）である高町なのはの父親が経営する場所で、なのはの協力あってなんとかアルバイトをさせてもらえるようになったのだ。

今ではこうして桃子に名前を覚えてもらっているが、始めたときは酷かった。

ほかの人と何も変わらない反応を示し、来る度に誰? と言う視線を浴びせられる毎日。

だがなのはの提案（家に零弥の写真を貼って誰か分かるまで考えるのをやめてダメ）のおかげで大分マシになった。

「零弥って名前が覚えにくいのよ!!」

と言うある人物の心無い一言で名前がレイなんて名前が定着しかけていたりする。

今この町で零弥を名前で呼ぶのはなのはとユーノとあともう一人だけかもしれない。

「名前を呼んで！！　お願いだから！！」

といつだかのなのはの言葉を言ってみせたが何の効果もない。

「いらつしゃいませ」

「あっ！　ねえねえ！　この子の名前分かる！？」

「うーん。確かクロちゃん！」

「違うよ。レン君だよ」

お客の女子高生にもこんなことを言われる始末。特に最初なんか猫じゃない？　黒猫じゃない？　俺の立ち位置マスコット？

でも負けない！　と言うように零弥はせっせと働く。案外よく働くと愛想もいいのでアルバイトにして好印象だ。

その印象はまた名前と共に消えていくのだが……

「ただいまー！」

「「おじゃましまーす」」

いらっしやったのは学校から帰宅したなのはその友アリサとす
かだった。

なのはの肩には何故かユーノも乗っている。

「おかえり。ユーノ学校に連れてったのか？」

「うん！今日は特別に！」

「へえ……そりゃよかったなユーノ」

『な、なんでそんな目で見るのさ！』

『どうせろくな理由じゃないんだろ？　ちやほやされて楽しかったか？』

そこで会話を切り、三人を席に案内する。ユーノの声が頭に響いた
が完全無視だ。

「ところでアリサ……」

「なによ？」

「俺の名を言ってみろ……」

「え、え〜と……クロ……」

「だからそれじゃ猫だああ……」

「仕方ないでしょ…… あんたの名前覚えにくいんだから……」

「たったの六文字…… お前より覚えやすいだろ…… ていうかな
のはより……」

ちなみにこの言い争いは毎度のことだ。零弥がこうして聞くと大半
の答えはレイ、クロ、バカだ。三つ目だけはダメ絶対。

「あ、アリサちゃん。そろそろ零弥君の名前くらい呼んであげなよ」
「しょうがないでしょ！　どうしても覚えられないんだから！　私からしたらなのはやすずかが覚えられるのが不思議よ！」
「あ、酷い。若干酷い。じゃあもうク口でいいです！　さいです！
」

ちなみに先程言ったなのは、ユーノ以外の人物がずずかだ。
偶然会ったときに意外にも覚えていたのでその時はなのは以上に驚いたものだ。
もしかしたらずずかにも魔力の才能があるのかもしれない。

こうしてなのはの言う名前を呼び合える友達が三人に増えたが全員9歳な上に割合『男：女』1：2』な事には軽く絶望した。

「そんなことよりおやつおやつ！」
「なのはにそんな事って言われた！？　俺の名前の問題が！！」
「早くしなさいよク口！」
「本気でク口にする気か！？　お前犬派だろ！　猫派じゃないだろ
！！」

もういやだ、と店の奥に駆け込む。すると士朗に三人のおやつを渡された。

この状況にそんな事を笑顔で要求する士朗さんに悪魔の胎動を感じた。

俺の分はないんですね。 え？ 忘れられた？ はい分かりました。

番外編 ある日のあること part・2

「——なんて事があつたのよ!? 酷いと思わない!？」

「なにそれ怖い」

「そうなの、酷いのよ! あ、クロ。ジュースおかわり」

「……最近自分の立ち位置に激しく疑問を抱き始めました」

そんな事を呟きながらもジュースのおかわりを取りにいきました。

仕方ないんです。客にとって従業員は奴隷当然なんです。

でも少しはこの状況を改善したい! そう思っていた時期が確かにありました……

しかしこの少女は大企業の娘さん。逆らったら明日には犬の餌になつてるかもしれません。

そういうわけでびくびくしながらも言うことを聞くしかないのです

……

「タマ」

「違うよ。クロだよ」

ど っ ち も ち が う わ ! !

何処のお客の呼び方も人間のはずなのにその名前は猫に由来してます。おかしいとは思わないか? ここは日本なんだぜ? そんな儚

い叫びを押し込めながらもただ零弥ですと呟いて注文を受ける。

「そろそろ帰ろうかしら」

「うん。私もそろそろ……」

「送って行つてやろうか？ 残念。零弥はまだバイトが終わっていなかった」

「迎えに来てもらつからあんなにか必要ないわ」

「がびーん」

「そういう言葉口に出す人初めて見た……」

なんだか色々言われてるがバイトが終わってないのは事実だ。いつも閉店までは残るようにしている。

「レイ君。あの子達を送つてらっしゃい」

「え？ でもまだ勤務中ですよ桃子さん」

「これも立派なお仕事よ。女の子だけなんて危ないじゃない」

「……イエス・マム。と言うわけだ。なのは、行くぞ」

「ふええ！？ 零弥君が仕切るの！？」

驚くところはそこですか。さいですか……

とりあえずそんな訳で零弥は三人と共に翠屋を出ることになった。

向かう先は何処でしょう？ 彼女らの迎えは何処に来るのでしょうか？

結局自分が先頭じゃ無意味なことに気付き、三人の隣を歩くことになる。

明日の学校について、話の弾むなのは達。零弥は寂しくなのは肩のユーノに念話するしかない。

『……ユーノ。俺は間違っていたのだろうか？』

『……突然何？』

『魔法の練習は身体強化以外はほぼ皆無。飛行魔法も短時間。砲撃魔法は散弾化。唯一まともなのは近距離戦闘だけ。なのはとの戦績は2勝12敗。この前のスターライトブレイカーはまだ腰に響いているよ』

『なのはを一般の魔道士と一緒に出来ないよ。それにあそこまで立ち向かえるんだから零弥もそれなりに凄いと思うよ？』

『そうか！俺は比較対象を間違えてたのか！そりゃなのはみたいなのが何人もいたら世界破滅しかねないもんな』

『……本人が聞いたら躊躇なくデイベインバスターを撃つてきそうだね』

『よせよ。冗談でもない。お前知らないだろうけどあれかなり痛いんだぞ？』

『そう……苦労してるね』

なんだか零弥は少し涙ぐんできた。あれ？こんな言葉言ってもらうのかなり久しぶりな気がする。

結局会話には混じれないまま道を進んでいると、人気のない道に出た。

とは言っても別にそんないわくつきな道ではない。少なくとも事故や事件が起きた話を聞いたこともないし、零弥も通りなれた道だ。

——そんな道の途中に黒光りする高級車さえなかったら、もっ

とともにいれたのに……

「……なあ、聞いていいか？」

「なによ？」

「お前らのお迎えってあの黒い車だったりする？」

「違うわよ。予定の場所だってもっと先だし」

「私も違うと思います」

「……じゃああの車から降りてきたガタイのいい黒服三人組との面識は？」

「あ、あるわけないじゃない！」

「わ、私も！」

「よし分かった。一つ提案があるんだ」

「な、なによ？」

「回れ右して猛ダツシユ。賛成？」

「……さ、さんせー！……」

珍しく四人の心が重なった瞬間だった。わき目も振らずに走り出す。

「逃げたぞ！ 追えーッ！……」

誘拐ですね。分かりました。ってかすずか足早……！
そしてなのは遅っ！？ アリサは……まあ、普通。

ていうかこんなことあるんだね。空想上の事だとばかり思ってたよ。

「さて、何処に逃げよう？」

「考えてなかったの！？ バカじゃない！？」

「お前だって考えてなかったら文句言うなあ！」

「い、今は喧嘩してる場合じゃないの！」

「そう言っお前が一番遅くてどうすんだ！ ええい捕まれ！！」

零弥は速度を落とし、なのはの隣まで移動するとそのまま抱え上げる。

所謂お姫様だつこだが今は恥じらいもない。本当だつたら逆に速度が遅くなるが魔法で強化してるのでアリサと同じくらいの速度で走れる。

しつこく追いかけてくる黒服ズに憤りに似た感情を抱きながらも懸命に走る。

「あ、そっちはダメ！」

なのはの警告むなしく、曲がった先にあつたのは行き止まり。

追いかけてきた黒服ズも息を切らしながらもにやりと笑う。その後ろにはそいつらの車。

なのはを下ろしてみるが、この状況をそれらしく言うなら絶体絶命が正しいのだろうか？

「あゝ、どういったご用件でしょうか？」

「月村家令嬢、ならびにバニングス家令嬢。その二人を差し出すならお前とそっちの子供の命は助けてやるう」

「人違いです。そして質問にはしっかり答えを返しましょう。これがテストなら0点です」

「おしゃべりな……ならば何も言わないでやる。四人とも捕まえろ！」

じりじりと近づいてくる黒服ズ。アリサやすずかは顔を青くして震えている。

なのははその表情に迷いも混じっていようとやはり恐れがあった。魔法が使えたなら……なんてなのはは考えているんだろう。

実際に使ったらどうなるか、それが分かるからこそ躊躇する。だが、今回は運がいい。零弥がいるのだから。

「ストップだ！ 少し待ってくれ！」

「今更聞か！」

「黙れハバネロ中年！ 辛い加齢臭がすんだ近寄んな！」

「……………殺す！！」

怒りに突っ込んでくるリーダー的存在。その手を振りかぶって殴るモーション。

どうも彼は短気は損気という言葉を学習したほうがいい。

（身体能力強化全力全開！！）

その振りかぶられた拳は空を切り、男は顎下からの衝撃に脳を揺さ

ぶられる。

かがんで避け、思いつき蹴り上げたのだ。続けて全力で原に蹴りをお見舞いする。

その時間、およそ3秒。たったの3秒でリーダーがやられたことに戸惑ったのか他の二人がその足を止める。

それこそが好機。強く足元を踏みつけ、一人に向かってシヨルダータックルをお見舞いする。

更に顎に頭突きをお見舞いする。脳を揺さぶられた人間は結構簡単に倒れてしまうものだ。

「ヤロー!!」

我に返ったもう一人がその拳を振るってくる。慎重にそれを避け、タイミングを見る。

体は脆いままなので受けるにしてもたぶん一発が限界。

振るわれた拳を手で流し、体の下に潜り込み、だいたい鳩尾と思っ
た場所に拳を叩き込む。

おまけとしてその頭に蹴りを加える。

これで一応ダウン。だが車を操縦したやつが残っている。

『ユーノ！ 車を止める！』

『分かった！』

ちょうどこちらからは見えない位置にユーノの魔法陣が必要ない程度のバインドが現れ、車を固定する。

ちょうど三人がやられる瞬間を見たその男はあっという間に三人を叩き伏せた子供に恐怖を抱き、車を発進させようとする。

冷静に考えればたかが子供、その胸の内のもので仕留めればいいものを、動揺から判断を誤った。

車は何故か数センチ進んで止まり、動けなくなる。その際、頭をハンドルに叩き付けた。

痛む頭を抱えた瞬間、車のドアが開かれ、零弥の拳が炸裂する。どうにも車要員とも言つのか、貧弱でたったので一撃で気絶する。

「よし……警察に連絡しろ！」

「今やってるよ……」

こちらへと駆け寄ってくる少女達に目を向けたが、その視線の先には嫌なものが映る。

最初に叩き伏せた黒服が拳銃をこちらに向けていた。

震えるその手の照準は、進行路にいた少女へと向けられる。

「すずか……!」

「え!?!」

轟音が鳴るより早くすずかを退かし、自らも射線上から退く。しかし、二の腕辺りに鋭い痛みが走った。

もつれて目の前に来たすずかの顔が再び青くなる。

「零弥君……？」

「っ！ かすっただけだ！」

零弥がその言葉を発したときには男は気絶していた。朦朧とした意識の中での最後の攻撃だったのか。それは幸運なことに誰にも当たらず済んだ。

「いぢぢぢ！ 痛い痛い！！ 包帯きつ過ぎ！！」

「……それだけ元気があれば問題なさそうね」

「にやはは……今回は零弥君のお手柄だね」

それから子供の出る幕もなく、警察がさっさと捕まえてちよつと職務質問をされて、それで解放、と行ったのは零弥以外だった。かすり傷とは言え怪我をしたのだから今は病院で軽い手当を受けていた。

もちろん入院の必要はない。むしろ零弥が気にしていたのは動きの代価だった。

そう、筋肉痛である。

足の筋肉は痙攣し、生まれたての羊のようになっていた。

「ああ……しまったバイト……！」

「お母さんもこっちに向かっているって。大丈夫だよ」

「桃子さんが。そうか……いちいち」

なのはと零弥が話している中、あまりすずかとアリサは口を開けなかった。

話を聞く限りでは今回の誘拐はやはりすずかやアリサの家を脅迫する目的だったらしく、少しばかり申し訳ない気持ちがあるのかもしれない。

「まったく、なんつー顔してんのよ二人とも。俺はピンピンしてるっての」

「でも、撃たれたじゃない！ あんたは怖くなかったの……！」

「そりゃあ……怖くないって言ったら嘘だよな。うん。怖かった。

撃たれたのもぶっちゃけ痛い。でもいいじゃん。生きてんだし」

「そんな言い方……っ！」

「……俺は、あの場合の最善を尽くしたつもりだが？ 助かって喜べど何を悲しむ」

「……あんたは、私が憎くないの？」

「おう憎い。憎さ余って可愛さ百倍だこのやろ」

「真面目に――」

「真面目だが。何か？」

「っ！？」

アリスはなにも言えなくなる。それは零弥の雰囲気我真剣さを帯びていたからか。それともその目に止められたからなのかは分からないが。

「まさか、すずかも同じ考えだったりする？」

「えっ！？ えっと、私は、そんな……」

むしろすずかの方が思うことがあるのかもしれない。
零弥はすずかを庇って怪我をしたのだ。普通なら気にしない方がおかしい。

……流石に顔を向けすらされなかったのは悲しかったが。

「ま、いつか……んじゃ！ そろそろ帰っかな」

「「え！？」」

三人そろって声を出す。なんだ？ そんな変なこと言ったか？

「帰るって……歩いて？」

「そりゃそうだろう……早く晩御飯の準備しなきゃ」

「……あんた……暢気ね」

「生憎そういう性分なもんでね」

「ダメなの！ 零弥君は怪我人だから送っていつてもらったほうがいいの！」

「そりゃあそうかもしれんけど……晩御飯」

「たまには私の家で食べていってもいいの！！」

「……なに怒ってるんだよ。はいはい。お言葉に甘えますつと」

呆れ顔で（本人も回りも）子供達は歩く。

ちょっと違うかもしれないけど、友達ってこんなもん？

どたばたしながらもあるちょっと変な少年の一日。

番外編 ある日のあること part・2（後書き）

なんつーか、慣れない書き方は苦勞しますね。

笑える内容にしようと思ったたらこうなりますし……うまくいかない

番外編 とある日の何気ない一日（前書き）

もう少しこんな内容が続きます。
ストーリーの進行はいつからか……

番外編 とある日の何気ない一日

「――鬱だ……」

ぶつぶつと呟きながら零弥が向かっている場所はいつもの公園。だが今回はいつものように剣を振り回す特訓ではない。実際に魔法を使う、そういう特訓だ。

なにがそんなに鬱なのかそれは今日の予定が非常に立て込んでいることに理由がある。

早朝、魔法の特訓。その後昼までバイトの後、すずかの家にお呼ばれ。

毎日を体動かす以外で生きてない人間にとっては非常に頭が痛くなる問題だ。

「遅いよ零弥君!」

公園に着いて一番に出迎えたのはまだ私服のなのはとフレット形態のユーノ。

零弥は結果が、と言うより魔法の大部分が苦手だ。その為、一人で魔法の練習をするには些か問題がある。そこで、魔法の練習はなのはと合同。そのついでに模擬戦なんかもしている。

「悪い悪い……準備に手間取ってな」

「それって、リンディさんが準備してくれたアレ？」

「そういうことだ。これで少しはマシになるといいんだけどな」

零弥はポケットから黒い十字架のキーホルダーを取り出した。

実はこれ、ただのキーホルダーではない。リンディ提督に頼んでわざわざ作ってもらった特注品のデバイスだ。ただなのはが使うインテリジェントデバイスとは違い、ストレージデバイスと言うA Iのないデバイス。待機モードとデバイスモードしか備えておらず、いまいち万能とはいえない。そもそも管理局の一般隊員が使用するものを専用にカスタムしただけなので、高性能とはいえない。

それでも、木刀やらなにやらを振り回して使ったり、素手で魔法を使用するよりは効率的なはず、と言うわけで作られたものだ。

「さて、早速行ってみようか。デバイスモード！」

悲しいことにやはり音声はなく、十字架は光り始める。自分からいらないと言ったが、これはこれで寂しいものである。

光が止んでそこにあったのはいまいち杖とは言い難い、妙な形の物だった。

「……何に見える？」

「えーと……縄跳び？」

「……又ンチャクかと思ったけど、それもありか？」

両手に握られていたのは見ただけで言うなら又ンチャク。しかしそれなりに目を向けるとどちらも端に刀の鐔のような物があり、二本の柄頭から伸びた光る紐がお互いを繋いでいた。

言うならば、刀身がなくて、二本が紐で繋がっていて、手繰り寄せれば二つが一つになる、と言うこと。

「……魔力を流せば分かるか」

呟くとともに微量ながらも魔力を流す。と、小さな刀身がひょっこり顔を出した。一応両方から。

「……なんだこれ」

「れ、練習しよ！ そうすればきっと分かるから！」

そんな言葉を素直に聞き、練習を始めるとだんだんと分かってきた。

刀身は魔力を流すと現れ、その大きさは魔力に比例する。つまり必要な分魔力を放出し続けなければならないのだ。非常に使い勝手が悪い。

次に二つを一つに合わせると刀身が片方からのみ現れ、斬馬刀のよ

うな形になること。ようするに一刀流か二刀流の違いだ。消耗も激しい。

結果、近距離専用で使い勝手が悪い。

「どうして改造したあああ!!」

「にはは……大丈夫だよ! 模擬戦行ってみよう!」

「……なかなか悪魔だな」

「え?」

「いや、聞こえてないならいい」

コーノは結界を保つのに専念してもらい、両者向かい立つ。なのはがレイジングハートをセットアップする様を少し零弥がげんなりしているように見えるのは仕方ない。

「行くよ零弥君! レディ……ゴー!!」

なのはの言葉を合図にどちらも空へと飛び上がる。これはいつものパターンだ。

さっそくなのははアクセルシューターを四つ作り出し、こちらへと飛ばしてくる。もう慣れた物だ。

「黒い衣! セット!! ブラックカーテン!!」

当然のように体に黒い衣を纏い、硬質強化したマントでそれを防ぐ。いつものパターンなら、次は……

「デイベー……バスター……！」

「やっぱりかよ！ 出力強化……！」

なにも変わらない。基本的に傍線一方。たまに反撃するかその程度の違い。

だが今回は違う。デバイスを握り締め、策を考える。

「ん？ ……そうか。そうすればいいのか……！」

零弥は両手のそれを強く握り閉め、魔力と共に黒い衣と同化する。

このデバイスは魔力で稼動する。恐らく設計自体は前からあったが勝手が悪くてお蔵入りしたもの。

しかし、黒い衣を這わせ、最低限の魔力で刃を構成するならなんの問題もない。

黒い衣は魔力ではない。硬質化させた刃は魔法の非殺傷設定など着いておらず、模擬戦や対人には向かなかった。だがこうして融合した形なら、非殺傷設定は有効になる。

「よし、反撃開始だ」

零弥は果敢に突っ込んでいく。武器を手に入れたからには防戦一方にはならない。

向かってくる全てが真っ黒なその存在になのは再びアクセルシューターを発射する。

追いかけてくるそれを回避しながらも一発一発落としていく。

なのはが再びディバインバスターの体勢を取る。と、零弥は両手のデバイスを合体させる。

一つにするのは武器を大きくするわけでは決してない。

デバイスの元は魔法補助。そのためにあるもの。

合体したデバイスからは黒い直剣が現れ、その先端に魔力が集中していく。

「アーカナイト……バスターーッ!!」

収束された魔法は黒い閃光となって放たれる。散弾化せずに砲撃が撃てたのはこれが初めてだった。喜びでハイテンションになる。

が、呆気なく避けられてしまいテンションはどん底になった。

「それが零弥君の力……それじゃあ私も本気で行くよ! スターライト……」

「ま、待て! こんなところでそれを使ったら……っ!？」

「ブレイカー!!!!!!」

「ぎゃあああああああ!!」

防御も間に合わずに直撃をもらっ。その意識は飛びかけている。

(へへ……俺、これが終わったらすずかの家にお呼ばれなんだ……
あ、その前にバイトだ……)

番外編 とある日の何気ない一日（後書き）

主人公のデバイス（AI無し）登場。

イメージは一刀流も二刀流も自在で多少の魔力制御ができると言う
こと意識していたのでこんな感じかと。

ちなみにやっぱり主人公は最強じゃない、と……

番外編 とある日の何気ない一日 午後編

「——か、かにマヨー!」

「えー?」

「き、気絶してたのか……」

目を覚まして早々にベンチに寝かされていたことに気付き、起き上がる。

一瞬で意識を刈り取るとは……スターライトブレイカー恐るべし……
…っ!!

「大丈夫? 零弥君」

「ああ……体の節々が痛いけど、俺、生きてる?」

「わ、私に聞かないで欲しいかな? それより、そろそろすずかちやんの家の迎えが来るよ?」

「ああー。そう言えば今日……ん? ちょっと待てよ? そろそろ迎えが来る?」

おかしい。どうもおかしい。

迎えが来るのはこの後のバイトの更に後のはずだ。つまり……? ギギギ、となのはを見た。

「なのはさん。誠ながら現在のお時間をお教えいただけませぬか?」

「うん。そろそろお昼になるかな？」

バイト寝過ごした！！

うわあああああ！！！！ 士朗さんに殺されるううう！！

「こ、ころ……ころ……」

「お、落ちていて零弥君！ 大丈夫だよ！」

「何も知らないからそんなことが言えるんだ！ うわああああ！！
皿を一枚割っただけで背負い投げするような人だぞ！？ サボっ
たなんて事が知れたらどうなる…… 考えたくねええええ！！」

「私がお父さんに言うから！ ね？」

「……そうだな。悲観するには、まだ早いよな！？」

その後、なのはと共に翠屋に戻った零弥は問答無用で背負い投げ、
寝技のコンボを受けた。

遅刻+なのはと一緒に反省してなさそうの三通り（特に二つ目）が
感情を刺激したんだと思う。今後遅刻には注意したい。

「——み、みそかつ!!」

「え!？」

「また気絶したのか……」

今度眠っていたのは見慣れない車の中。あれ？もしかしてこれって……

「零弥君が眠ってるうちにすずかちゃんの家を迎えさんが来ちゃったから乗せちゃったの」

「さいですか……」

「そんなに落ち込まなくてもお父さんにはちゃんと事情を説明しておいたから心配しなくていいよ」

「ほ、ホントか!？」

「うん！ そうしたらお母さんがちよつとおはなししよつて連れてっちやっただけど」

(高町家怖ええええええええええ!!!)

さて、連れて行かれた土朗さんがどうなったかは分からないが、と
りあえず合唱しておこうと思う。

……それにしても、親譲りだったんだな。この性格。

それ以降口を出すことが恐ろしく、なのはの嬉しそうな声に相槌をうつことしか出来なかったとき。

とは言っても移動時間の半分以上を睡眠に使い、すずかの家に着いたのはすぐだったりする。

「……こういうのなんて言うんだっけ？　ぶ、ぶる、ぶる……」
『ブルジョア？』

「そうブルジョア！　……あれ？　ユーノいたのか？」

『気付いてなかったの！？』

「まあ……な」

森の中の大きな屋敷。豪邸、と言うよりは既に城。

辺りには猫がにやあにやあ鳴いて、途中から車での前進が出来なくなった。

確かに猫を沢山飼っているとは聞いていたが、これほどとは……

生憎来るのは初めてなので、なのは案内で進んでいく。
とは言っても入り口は一つだし、迷わないと思うが。

ピンポン、となのはインターホンを鳴らした。ああ、なんて言うか、あるんだね。当たり前のことのはずなのになんで違和感が……

数秒経たずに扉が開けられる。開けたのはすずかと同じ紫の髪の人メイドさんだった。

「なのはお嬢様、それに零弥様。いらっしやいませ。この月村家でメイド長を勤めさせていただいているノエルと申します」

「え、ああつと、はい。どうもご丁寧に」

「こんにちは」

「どうぞこちらへ」

誘われて中に入っていくなのはに着いて行くことしか出来ず、おずおずと中へ入る。

中は外で見たのとはまた別にもの凄いプレッシャーを感じた。

案内された方へと着いて行くと、そこにいたのは高級そうな私服で優雅に紅茶を飲むアリサとすずか、それにノエルより少し若い（幼い？）メイドさん。辺りには猫がたむろっている。

ノエルが一步前に出、会釈する。

「お連れしました」

「なのはちゃん。零弥くん！」

「すずかちゃん！」

「お邪魔します、と」

なのはと共に中へと入る。すずかもアリサも皆嬉しそうに笑った。

とは言っても零弥も二人に会うのは一週間ぶりくらいだったりする。

最後に会ったのは少し騒動があった日だ。

「なのはちゃん。いらっしやい」

「ファリンさん。零弥君。この人はすずかちゃんの専属メイドのフ

アリンさんだよ」

「はじめまして。黒野零弥です。以後お見知りおきを」

『キアラじゃないよ』

『うっさい!』

「じゃああなたがずかちゃんを助けてくれた?」

「助けたって言うよりはまあ成り行きですね」

「そんなことないの! 銃を向けられた時も庇ってくれたよ」

お礼を素直に受け取らなければこの話が終わらなそうと気付いたのでそうすることにした。

ずずかは満足そうにニコニコしている。

どうも思いのほか自分がしたことが重大だった事に気付き、なんだか冷や汗が流れてきた。まさか……痛いことにはならないだろう。

早くも結論。お茶会やらは趣味じゃない。

別に紅茶やお菓子に文句がある訳じゃない。ただこうした行儀のいい事には慣れていないのだ。

一般家庭に育てられ、数奇な運命かと思いきやこうしてお嬢様達と同じ席でこうした事をする事になっている。なんとも難儀な人生だ。

文句も不満もない。あるのは戸惑いだけだ。その戸惑いが自分にかかるとしかかる。

「――零弥君。どうかした？」

「え？」

「……もしかして、つまらなかった？」

「いや！？ そんなことはない！」

「じゃあ少しは楽しそうにしないよ」

「……わかつちやいるんだけど、慣れないんだよな。こういうの」

零弥は頭を掻きながら苦笑いする。嘘ではない。嘘ではないが……

『ユーノ……お前は楽だよな』

『何処が！？』

『そうして猫と戯れていればいいんだから』

『これの何処が戯れてるのさ！！』

そう念話で奇声のような言葉を発するユーノは猫にのしかかられ、なめられ、押し倒されていた。

それでもこの空気に入らないだけまだマシに感じられるものだ。

「そうね……じゃあゲームやりましょうか。すずか。あんたの家にもゲームってあるわよね？」

「うん。でもアリサちゃんみたいにそんな凄いものはないよ？」

「大丈夫よ！ ね、クロ？」

「クロじゃないって……別に無理に変える必要はないが？」

「いいの！ ほらすずか。行くよ！」

「えっ？ でもアリサちゃん！」

二人はなんらかの会話をこそそと始める。

アリサがちらりとこちらを見、何事かを呟くとすずかが真っ赤になり、また何かを耳打ちする。

「……あの二人はなにをやってるんだ？」

「さあ？」

「——話は纏まったわ。ファリンさん。案内してくれませんか？」

「はい。案内しまーす」

嬉しそうにすずかの手を引っ張っていく。残されるわけにもいかず、一同着いて行くが、アリサの足取りは妙に速かった。

「こ、これは……今話題のあの!？」

「そんなに凄いの!？」

「生産個数約百個の限定品だよなのは君!！」

目を輝かせながら豪語するその姿は如何にも興奮している様子が伺えた。

そもそもゲームは好きなほうで、いくつか所持している。経済的な理由であまりないが。

「それはそれとして、すずかとアリサ遅いな」

「うん。どうしたのかな。アリサちゃんがすずかちゃんを急かしていたように見えたけど……」

「やっぱり？ どうしたんだろううな？」

そんな会話をしながらソファーに二人並んでゲームをしていると急にドアが開かれる。

「おまたせ〜！」

「おう！　きたか……ってあれ？」

そこに立っていた二人の服装は先程と変わり、ドレスに身を包んでいた。

どちらも綺麗で思わず思考を止めて見惚れてしまうが、同時に疑問も浮かび上がってきてしまうので頭がグルグルになる。

「わあ！　綺麗だね！！」

「ふふーん。当たり前でしょ！」

「……零弥君？　どうかしたの？」

「え！？　いや！　なんでもないぞ！　似合ってる似合ってる！」

「ほ、本当？」

「ああ！　スゲー綺麗だって！！」

焦りに焦って口はいつものように回らない。すずかの紫のドレスもアリサの赤いドレス、どちらもよく似合っていて綺麗だった。その言葉を聞くとすずかが顔を俯かせてしまう。

「ど、どうかしたか？」

「う、ううん。なんでもないの……」

それから会話がめつきり途切れてしまい。辺りが静かになってしま
う。

お互い何を話すべきか考えはするが結局浮かんでは消えてしまう。

「はいはい。なのは着てみたくない？」

「いいの!？」

「うん! じゃあすずか。なのはとファリンさん借りるね」

「え、アリサちゃん!？」

すずかの言葉むなく、ユーノを肩に乗せたままのなのはを連れて
すずかは行ってしまう。

辺りに沈黙が蘇る。

「……まあ、座れよ」

「う、うん……」

零弥はゲームすら放り投げ言葉を発する、すずかも顔を赤くしながら
何も言葉通り隣に座った。

「……………」

（な、何を言えればいい? 気まずすぎる…………）

「……………」

（す、すごく恥ずかしい。でも綺麗って言ってもらえた…………）

尚も無言は続く。だが元々無口なすずかやあまり女性とを考えて喋っ

たこともない零弥にはなんと云ったらいかが分からない。

「あ、あの！」

「な、なんだ？」

先に口を開いたのは以外にもすずかだった。もごもごしていたり目を背けていることには違いないがそれでも先に一歩踏み出した。

「……お礼が言いたくて」

「礼つて、なんの？」

「あの時、庇ってくれたから。その時の……それにごめんなさい」

「なんで謝るんだ？」

「私をもっとしっかりしてれば、巻き込むこともなかったし、それに庇う必要もなかったから」

「……それはちよつと違うんじゃないか？」

「え？」

もう恥ずかしいとか気まずいとか、そんな考えはなかった。二人の視線が交差する。

「しっかりしていようがいまいが、どちらにせよどちらにせよ奴等の行動は変わらなかった。どっちにせよ巻き込まれるのは変わってなかったと思う」

「……………」

「でもさ、別に俺、巻き込まれたりするのが嫌いなわけじゃないぜ

「？」

「……………」

「だって、友達だもん。困ってるなら助けてやりたいもん」

「じゃあ、怒ったりしてないの？」

「だれが怒るかよ。寧ろ俺はあの大人たちに対して怒りたいね。小一時間ほど問い詰めてやりたいよ」

零弥がふんつと鼻を鳴らす。そんな時すずかの肩が震え始める。そんな小さな少女の頭を優しく撫でてやった。

「優しさも、怖さも、喜びも、全部友達で分割だ。それなら辛いな
いだろ？」

「……………」

「困ったときは俺もなのはも、すずかだって助けてくれるさ。だから困ったときは俺たちを助けてくれよ。それでいい」

「っ！！」

すずかが零弥の胸に飛び込み、涙を零しながら嗚咽を上げた。困ったような顔をしながらも零弥はそれを受け止め、頭を優しく撫で続けた。

「は、入りづらいよすずかちゃん」

「ふふ、ちゃんとやってんじゃないすずかつたら」

「え？　どういうこと？」

「あの子がクロと話がしたいって言うから二人の時間を作ってあげたの。ドレスはオプションよ」

「ふえええ？　じゃあ私にこれを着せたのって……」

「あそこから連れ出すためよ」

「そんなぁ……」

そんな会話を繰り返しているのは扉の隙間から二人を覗いていた。アリサとなのは（純白のドレス着用）だった。

言葉の通り、今のこれは友人としての計らいだった。もっともここまで行くとは思いもしなかったが。

と、

『後で覚えてろよ』

『れ、零弥君！？』

ふと、零弥がこちらを鋭く睨んだ気がした。いや、直前の念話がそれを気のせいではないと表していたが。

この日以降、
すずかと零弥の会話は多くなっ
たが、本人達の自覚は
ない。

番外編 とある日の何気ない一日 午後編（後書き）

すずかが好きでやってしまいました。
少し後悔があったりします。

ただすずかと仲良くなったこと以外はストーリーに刺さらないので
暖かい目でどうか……

A、S 編第1話 突然の始まり（前書き）

さてさて、始まりましたA、S 編！
零弥はこれにどう関わっていくのか。
私にも分かりません↑だからオイ！

A、S編第1話 突然の始まり

12月1日。

ジュエルシードの騒乱からおおよそ半年が経過した海鳴市。

肌寒さを感じるようになり、そろそろ雪も降り始めてもおかしくはないはずなのに快晴の空。

そんな日の朝早く公園にいたのは一人の少女と一人の少年だった。

少年は黒い髪を前分けにしており、肩まで伸びた髪を揃えている。

少女は薄茶の髪をツインテールにし、黒いリボンで束ねている。

どちらも私服だが最低限の防寒を備えており、少女は一つの空き缶を持っていた。

「それじゃあ今朝の練習の仕上げ、シュートコントロールやってみるね」

「ああ、分かった」

少女、高町なのははその言葉を聞くと目を瞑り、空き缶を上空へ放り投げる。

「リリカル・マジカル！ 福音たる輝き、この手に来たれ。導きのもと、鳴り響け。ディバインシューター、シュート！」

なのはの足元に桃色の魔法陣が現れ、指からは同じ色の魔法弾が生成される。なのはの呼びかけとともにそれは空に舞い、空き缶をへ上へと持ち上げていく。

少年、黒野零弥も真面目そうにそれを眺めていた。その手の赤い宝石、なのはのデバイス『レイジングハート』がカウントする。

『??、??、??、??、??……』

そしてそれはどんどんと加速していく。とんでもないほどの高さまで上り詰め、そして……

『「One hundred」』

目標である百回に到達し、零弥はグッジョブと親指を立てる。そこで一気に気が抜けたのか、零弥にむかってにっこりと笑いかける。

「あ、落ちてくる」

「っ！ ラスト！！」

零弥の言葉でハッと、落ちてきた空き缶を弾く。

それは公園備え置きのゴミ入れに飛んでいったが、縁に弾かれて落ちた。

「残念だったな。最後の最後で油断するところなことにならないぞ」「ふえええ……」

「ま、それはそれとして、お前さんはどう思うレイジングハート」「Don't mind, My master（よい出来ですよマスター）」

「えへへ。ありがとうレイジングハート」

「……たびたび思うが、よく言ってること分かるな」

なのはにレイジングハートを渡し、自分は外れた空き缶を拾いに行く。

それを握り締め、なのはの方を向いた。

「じゃあなのは。次は俺がやるから見といてくれよ」

「うん！ 分かった！」

「うし！ じゃ、行くか。ゼロ！」

零弥は懷から小さな十字架のキーホルダーを取り出した。

それはただのおもちやではない。零弥専用のストレージデバイス。名づけて『ゼロ』だ。

レイジングハートのように喋ることはなかれど彼にとっては共に戦うパートナー同然になっていた。呼びかけに応えるようにその手の十字架は形を変える。

見た目は一本の筒。しかし両側に刀の鐔のような物が着いており、そののちようど真ん中辺りを握り締める。

「お前がいなきゃ俺はまだ魔法をろくに使うことも出来ないからなあ……よし、行くか。それ!!」

零弥は先程のなののように空き缶を放ると両手でゼロを握り締め、目を閉じる。

その様はまるで忠誠を誓う騎士のようにも見える。足元に黒い魔法陣が出現する。

「光に対する者よ。ここにあれ。ダークシューター。射出!!」

その手に浮かび上がる小さな黒い魔法弾。言葉と共に飛び上がり、空き缶へと向かっていく。

と、

スカーン、と小気味いい音を立てて落下した。

落ちてきたのは零弥の頭の上。魔法弾は一発も当たることすらなく、真上から落下してきた。

「……………」
『……………』
「……笑えよ。どうぞ笑ってください。あんだけ豪語してたの一度も当てられなかった俺をさ」
『……0 points』
「なんて？」
「0点だつて」

その瞬間、零弥は泣き崩れた。ゼロは何も教えてくれない。

「はは、はははは、教えてくれゼロ。俺はあと何発外せばいい？」
「にやはは……頑張つてね」
「ああ……学校行つてらっしゃい」

そんな感じでなのはと別れ、今零弥は住宅街を歩いていた。
学校に行く必要もない。そういう訳でただぶらつく他がないのだ。

（あれから半年、フェイトは裁判、ユーノは証人として動員して、どれくらい経ったわけ？ ま、直ぐに会えるか）

懐かしい友人達は今地球にはいない。みんな勝ち同然も裁判の為に離れている。

あの事件から途切れることなくフェイトからの文通、ビデオメールは届いている。

それからそちらの事を聞いたりしているうちには大した事がない様子が伺える。

今フェイトは囑託魔道士とやらになろうとしているらしい。

なのはや自分の立場は未だに民間協力者の枠を外れない。

（ま、あれからこっちは魔法関連は平和そのものだし。仕方ないか）

零弥やなのはは日々の訓練を欠かしてはないがそれを発揮する事態はほぼ皆無だった。ユーノがいたころはなのはと模擬戦なり激しい訓練ができたが結界要員でもあるユーノが抜けるとなると激しい事はできない。

「……腹も減ったし、帰って剣術の練習でもすつか」

することが決まったと言ってもその足取りは軽いものではなかった。

有言実行、なんとカッコいい言葉だろうか？

生憎飽きが来てしまいかねないほど毎日剣を振っている零弥にとってはもう基礎関連は勘弁と言う思いだった。だから走りこみをしているがそれも同じこと。

と、いう訳で。

「ゲームセンターにきてしまいましたと」

もしもゼロがAIだったならば呆れていただろうか？ 結局そのまま夜遅くまでそこにいり浸っていた。

そんな彼がそろそろ帰ろうかな？ なんて思い始めた頃。事態は変化した。

（っ！？ 魔力反応？　なのはじゃない。知らない奴？）

直ぐにそこを飛び出し、急行する。その反応は通称オフィス街と呼ばれる場所からで、感じたのはその路地だった。入ろうとした直後、そこから黒い光が溢れる。

何かいる！　それに気付き反射的に黒い衣を見に纏う。

—— 男性の断末魔に近い声が響き渡る。

「何をして……！！」

零弥は目の前にいた小さな人影に絶句する。

赤いゴシックドレス。オレンジの髪を後ろに三つほど三つ編みにし、ウサギの人形の着いたふつくらした帽子を被り、手にはハンマーのような棒を持ち、頭の上には禍々しく光る黒い本。

「ん？　誰だお前は」

「—— 子供だと？」

そこにいたのは少女。それもなのは達と比べて更に幼い。振り返ってこちらに睨みを利かせる。その顔には年相応のあどけなさを感じられない。

「デメエ……あたしを子供扱いするとはいい度胸じゃねえか！」
「っ！？　ぐう！！」

助走と共に自分に向かってハンマーを振るってくる。何とか避けるが。目の前の状況は未だに把握しきれない。

と、視線の端に影が見えた。倒れている人。しかもその服装には見覚えがある。

「管理局員！？　君がやったのか？」

「そうだと言ったら！？」

「くっ！　障壁！！」

振りかぶられたそれをなんとか防ぐために薄黒い障壁を張る。そしてお互いは衝突するが、しかし弾けない。

「くそ……なんて力だ」

「魔法だと？　お前も管理局の人間か！？」

「そうだと言っただらあ！？」

最後に力を込め、何とか押し切る。
何で管理局員が倒れてるのは分からないが、今この少女ははっきりと敵対の意識を見せている。

何とかしなければやばい。そう再認識した零弥は懷をまさぐる。ゼロを探しているのだ。

が、

（……しまった、忘れた。平和ボケしすぎた）

「お前が管理局の人間で、あたしの邪魔するってんなら。ぶっ飛ばすー！」

「少しは会話って手段を取れないのかよー！」

再び振りかぶってくる少女に零弥は焦る。ゼロが無ければ零弥は中途半端な攻撃と防御しか出来ないのだ。今回は障壁ではなく、黒い衣に魔力を込め、真っ向から受け止める。

ガキーン、という激しい金属音が鳴り、少女のハンマーが受け止められる。

先程の障壁のようにせめぎ合う様子はない、が。

（なんつーバカ力。衝撃を押し殺せねえ……）

「アイゼンを止めるなんて……お前えー！」

少女はアイゼンと呼んだその手のハンマーで何度も殴りつけてくる。流石に足が地面に埋まりかけてきた。その防御に関しては破れる様子はない。

「っ！　　ったく、そんなガンガン言わせないで、話を選択するってことはいいのか！？　　因みにこれ二度目！！」

「うるさい！　　管理局なんて信用できるか！」

「うるせえ！　　誰が管理局だ！　　誰がそんなこと言ったよ！」

「っ！？　　違うのかよ！！」

「違うよ！」

「信用できるか！」

「だったら聞くなよ！」

「くそ……ちつ！」

少女が舌打ちしたかと思うともういいと言うように踵を返して空へと飛んでいった。

先程まで浮いていた本はもう無い。回収されたようだ。

慌てて零弥もそれを追いかける。町の上空を飛ぶが、少女の方が比べ物にならないほど早い。

ゼロを持つていない事も理由の一つだが、圧倒的に少女が早いことも理由の一つだった。

少女の姿がやがて見えなくなり、零弥は舌を打った。今回は運が悪かったのかもしれない。

（いや……平和ボケした俺の方が問題か……）

その後、管理局員が倒れていた場所まで戻ったが、その場所には既にだれもおらず、困惑したまま帰宅した。

——これが再び事件に巻き込まれる始まりと気付いたのはもう少し後のことだ。

A、S 編第1話 突然の始まり（後書き）

設定上零弥は魔法使いだけど魔法が苦手の立ち位置なんですよね。
主人公として微妙だ……

A、S 編第2話 相対、盾の守護獣（前書き）

台からして分かるように、あの方の登場でございます。

A、S 編第2話 相對、盾の守護獸

差し込む明かりで目を覚まし、今まで自分が眠りについていて事に気付いた。

「……情けない。不足の事態が一つあっただけでこれか」

壁にかけられた時計を見ると既に昼近くを示しており、半日近く眠っていたことに気付く。

次に机の上にある待機状態のゼロを掴む。

「悪いな相棒。昨日は浮かれすぎてたみたいだ。もう忘れねえからよ」

ゼロを握り締め、零弥は準備を始めた。

「形跡は……何ものなしか」

零弥が来たのは昨日事態があったオフィス街。あの少女が何者なのかはさっぱり分からないがその搜索をするべきという結論にいたった。

アースラに報告しようにもゼロに通信機能はついていない。なのはならどうにかできるかもしれないが、協力を頼もうとは思えなかった。

（子供と子供が戦うところはもう見たくないからな）

そんな事を考える零弥も常識的にはまだまだ子供なのだがどうも大人ぶりたい年頃のようなのだ。

隈なく探す。しかし反応はもちろん。痕跡すら残っていないかった。

結局、もう少しもう少しと搜索を続けたが、何一つ発見できないまま日が暮れ、家へと帰宅した。

その夜、零弥は少し遅い食事を取りながら考えていた。

あの少女の目的、攻撃を仕掛けてきた理由。それと中に浮いていたあの黒い本。

少女の言動から見ると管理局に対して敵意を持っているようにも感じられた。だがその管理局に敵対する理由はなんなのか？ 管理局の全部を知っているわけではないが、様々な世界を管理している事を聞くとそれは大層なことだ。

宇宙に近い管理局と敵対する訳は？ 世界を敵に回しても欲しいものがあるから？

「……大袈裟すぎか」

零弥は食事を終え、片づけを始めた。

もしかしたらあの子は夜に行動を始めるのかもしれない。それを考えるとこれから外出する方が見つかる確立が高い。

その時、異常な——しかし懐かしい反応を感じる。

「この感じ……結界！？ あの子か！！」

食器洗いを放り投げ、家を飛び出す。辺りの風景は色を変えたようになり、人の気配が全くない。確かに結界だが、なんだか違う気がする。

「発足位置は……あつちか！！」

ゼロの待機モードを解除し黒い衣を身に纏い、空へと飛び立つ。向かうのは結界の発足地。しかし、それを探す手間は案外簡単に省けた。

赤い流星が視界の端で飛んでいくのが見えたからだ。

「ッ！！ やっぱ昨日の子か！！」

直ぐに理解し、その方向へと向かおうとする。

しかし、上から落ちてくる影に気付き、その場を飛びのいた。

「狼！？ 使い魔か！！」

「使い魔ではない。守護獣だ！！」

「知るかよ！！」

現れたのはアルフの獣化した時のそれに似た青と銀の毛並みの狼だった。

言葉を話す辺り、やはりアルフと似たような存在なのだろう。

対峙し、お互い睨み合う中、赤い流星は飛んでいき、見えなくなつた。

「……邪魔をするってことはあの子の関係者か？」

「如何にも。しかし、お前の相手は私だ！」

声を上げると光に包まれてその姿を変えていく。
やがて銀の髪 of 男へと変わり、こちらを睨んだ。

「犬の耳に尻尾。いい趣味してるねお兄さん」

「……盾の守護獣ザフィーラ。押して参る！」

「名乗ってくれちゃって……民間協力者、ゼロ。同じく、押してま
いらせてもらうさ！」

その直後、二人はぶつかり合う。ザフィーラは小細工抜きでいきなり殴りかかってきたが、零弥には小細工しかないので身軽によける。

「モード一刀流。アーカナイト!!」

零弥のその手に握られたゼロから黒い光が噴き出し、幅広い両刃の剣を構成する。その長さはおよそ二メートル。体よりも大きいそれは殆どが魔力で構成されているので重さはない。それが短所であり、長所だ。

「どうりやあああああ!!」

「ぬんっ!!」

思い切り縦一文字に振り下ろしたそれをザフィーラは魔法で防御する。

やはり、剣に重さがない。鋭さなど、非殺傷設定をつけている今は無意味だ。

呆気なく弾き返され、零弥は強くゼロを握りしまる。

一対一での魔法戦はなのはの模擬戦を除けば初めてだ。しかもいつも隙を突いて勝利を収めたためにガチンコで障壁を砕いたことは無い。

戦闘において決定打がないのは非常に問題だ。しかも近接戦闘しか能がない零弥だからこそ余計に。

流石盾を自称するだけに強固なザフィーラ。やりにくい。

「はああああ!!」

「張り切ってるね。ホントにさ!!」

そんな零弥の浮かんだ戦闘法。硬い物は叩いて壊す。

要するに力押しだ。絶対に碎けないものなどあるわけが無い。

なんどもお互い攻撃を打ち付けあい、零弥はようやくあの少女の向かった先に気付く。

それに気付いたのはなのはの魔力反応を感じたから。簡単だ。あの少女の狙いは最初から――

「くっ！ そう言う事がよ！」

「行かせるか！」

「お兄さんに構ってる暇は無いんだよ！」

ザフィーラを無視し、なのはの魔力が感じる方向へと飛ぶ。しかし如何せん飛行速度が並みな為、直ぐに追いつかれる。

その為追いつかれる旅に障壁を張るという選択を取るほかなかった。

そして、それはとうとう限界につく。

「ぬんっ！」

「なあああああ！！」

度重なる衝突でとうとう碎けてしまった障壁は攻撃を主へと通す。わき腹にザフィーラの拳が突き刺さり、衝撃で零弥は住宅街に落下する。

黒い衣で墜落の怪我は皆無だが、殴られたわき腹が痛む。
急がなくてはならないと言つのに……零弥が奥歯を噛み締める。

「邪魔すんじゃないやねえよ!!」

「何度も言つた。行かせぬと!」

道路の真ん中で再びザフィーラと零弥がぶつかる。
拳と剣とがギチギチと火花を散らした。

遠くでなのはの力がだんだんと弱くなっていく。

「う、わあああああ!!」

雄たけびを上げる。こみ上げる全てをその手に込めるために。
ザフィーラの障壁に輝が入る。

「なにっ!？」

「ぶったぎれええええええ!!」

そのまま縦に剣は振り下ろされ、ザフィーラが吹き飛ぶ。
それには目をくれず、再びなのはの元へと向かう。

と、その直後に高まる魔力反応。覚えがある。

「へっ……結局遅れちまったか」

『そっちは任せる。フェイト』

『うん。任せて零弥』

姿は見えない。しかし確かに感じるそれと聞こえた声に安心する。
加えて、ふつふつと怒りが芽生える。

背後には追ってきたザフィーラ。もう急行しようなどとは思わない。

「あんたのおかげでヒーロー参上の瞬間を逃したぜ。どうしてくれる？」

「……増援か。くっ！！」

「次は俺が行かせない。行かせるものか……っ！！」

再びぶつかりはじめる。その際で零弥は気づいた事がある。
言いたくはないが、零弥とザフィーラは戦い方が似ているのだ。

今のところザフィーラは殴る、障壁以外の戦闘方法をしてこない。
それでも零弥に見れば十分脅威だが。似ているのはどちらも攻撃力に欠ける。もしかしたら空中より地上戦の方が得意なのかもしれない。

大して零弥は攻撃力には難あれどブラックカーテンの防御力は全力のスターライトブレイカーすらも防げる自信がある（実際に受けたことがないため、確実とは言えないが）

「相性が最悪みたいだな。俺達」

「……そのようだな」

「モード一刀流。バスターソード！」

呼びかけと共に零弥の剣は巨大ながらも片刃の刃へと変化する。
それを肩に構え、向かい合った。一点集中による破壊攻撃。ぶつちやけ賭けだ。

「……俺としては民間協力者としてお話ししたいが、その気は無いのか？」

「……………」

「……あんたみたいな真っ直ぐな人間。眩しくて戦いにくいんだけどな」

「……私とて君のような子供はやりにくい」

「ハッ！ それもそうか」

もう言葉は違えない。お互いの得物を向けるだけ。

そして、何度目か分からない激突を、する。

「ガッ！ ……こんなはずじゃ……なかったのにな……」

「くう……見事だ。ゼロ」

「敵への賞賛を惜しまない。やっぱアンタって……」

いい奴じゃん。と言う言葉を発する事が出来ず。零弥は殴られた鳩尾辺りを押さえて落ちていく。

ザフィーラもまた、ゼロの攻撃を受けたわき腹を押さえたままこちらを見下ろしていた。

『悪い。フェイト、なのは……』

『ッ！？ 零弥！？』

『零弥君！？』

目の前が真っ暗になっていく。地表が近づいてくる。落ちて死にはしないけど、痛そうだなあなんて考えながら、零弥は意識を失った。

A、S 編第2話 相対、盾の守護獣（後書き）

ポジション的に実力はザッファイ以下、と。
ホントに主人公ですかねこの方。
名乗りがゼロなのは一応偽名って事で。

A、S 編第3話 騒がしい再開（前書き）

そろそろ勉強しなきゃまずいなあ……

明後日からテストなんですよね……

A、S編第3話 騒がしい再開

目を覚まして最初に見たのは心配げにこちらを覗くフェイトの顔だった。

「フェイト……か。久しぶりだな」

「うん。久しぶり」

「……ここは？」

「ここはアースラの中だよ。今は本局に收容されてるけど」

「そうか……いった」

起き上がろうとした際に痛んだ部分を押さえた。最後にザフィーラに殴られた場所。そこを殴られて気絶して、はいおしまい。たるんでるなあ、なんて考える。

一応黒い衣を解除して実際にしてみるが、腫れているだけで大した問題はなさそうだった。

「無理しちゃダメだよ。纏っていた物のおかげでそれ以外の外傷はないけど今まで眠ってたんだから」

「今はそれより状況が知りたい。教えてくれないか？」

「……うん。分かった」

少しずつ一連の状況を話し始めるフェイトに耳を傾けると、出てきたのは思いのほか上手くない状況だった。

裁判をひとまず終え、こちらに連絡しようとしたが結界の影響で繋がらず、こちらの以上を察知した。直ぐに向かいたかったが、距離的に大分離れていたため、様々な場所うい經由してようやく着くと、ボロボロでデバイスも破壊されたなのはと赤いゴシックドレスを着た女の子に出くわし、交戦。

戦闘中に自分からの念話でこちらの状況を察知したが、敵は零弥を無視したため、やむなく放置。その後、少女の他に剣を持った魔道士と狼の使い魔が現れ、交戦。

こちらの分が悪いことに気付き、結界を破壊しての逃亡を試みたが、その隙に現れたもう一人になのはがやられた。しかし無理をしてスターライトブレイカーを撃ち、気絶。

結界の破壊と同時に敵は逃亡し、その消息は不明。

その後、気絶した零弥を回収し、本局へと戻ってきた。

これが数時間前に起こったことなのだから零弥は何も言えずに目を伏せた。

「そうか……なのはの容態は？」

「もうすぐ目が覚めるってお医者さんも言ってたよ」

「ならよかった。その手も敵にやられたのか？」

零弥はフェイトの左手に巻かれた包帯に目を向けた。本人は大したことない、と言って笑ったが。特に酷い痛みもないようなので零弥は立ち上がると、部屋のドアがスライドする。

そこにいたのはフェイト同様久しぶりに見る人物。クロノだった。

「よう。久しぶりだな」

「ああ、怪我はもういいのかい？」

「この程度なら全然問題ない。それより状況の方が酷いんじゃないか？」

「それもそうだが少し後にしよう。なのはが目覚めたから教えに来たんだ」

「本当！？」

「ああ、今は診察を受けているから会いに行くといい」

フェイトは嬉しげに頷き、なのはの眠っている部屋へと向かった。零弥とクロノが残され、先に口を開いたのは零弥だった。

「……なのはの容態は？」

「体の方の怪我はほとんどないらしい。ただ、魔道士の魔力の源、リンカーコアが異様なほど小さくなっていた」

「リンカーコア……それは治るのか？」

「放っておけば自己回復する。けれど暫くは魔法を使えない」

「そうか。それはよかった……敵の調べはついているのか？」

「ああ、大体、いや、ほぼ確定だ。ロストログア、闇の書」

「闇の書……いわくつきにしか聞こえない雰囲気だな」

それから説明は皆同時にした方が早いと言うことで部屋を出た。
君はなのはの様子を見に行かないのか？　と言う質問に軽く、邪魔
しちゃ悪いと言って。

クロノと共に、一つのドアを潜る。見かけたのは新しく久しい二人
の顔。

「よっ！　久しぶり」

「「零弥！」」

「零弥君！」

ユーノとアルフ。それにもう体は大丈夫なのかなのはに付き添うよ
うにフェイトがいた。

奥の方では柱状の光が立ち昇り、その流れに乗るように待機状態の
レイジングハートとバルディッシュが浮かんでいた。

「変わらないなあ。ま、半年くらいしか経ってないし当然か」

「あんたの怪我は大丈夫なのかい？」

「別に殴られて気失っただけだし、大したことないな」

大した事がないと言う事を強調するように腕を組み、微笑を浮かべて見せた。

しかし、そんな事は最早どうでもいいようで、全員の視線はボロボロのデバイスに向けられていた。

「……酷いのか？」

「正直、あんまり良くない。今は自動修復をかけてるけど、基礎構造の修復がすんだら一度再起動して部品交換とかしないと」

「……そうか」

クロノと共にユーノの話を聞いているとなのはやフェイトがそれに近づいていく。その表情は見るからに暗い。

「ねえそういえばさあ。あの連中の魔法ってなんか変じゃなかった？」

「そうなのかクロノ？」

「ああ、君はあの使い魔と一対一で負けたんだっけ。その通り、あれは多分、ベル力式だ」

「「ベル力式？」」

アルフと零弥が言葉を揃える。そもそも魔法に何とか式すらがあることすら知らなかった。

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

「遠距離や広範囲をある程度度外視して対人戦闘に特化した魔法で優れた術者は騎士と呼ばれる」

「騎士……随分カッコいい物だな。あのザフィーラって守護獣を見ても信念が見て取れたし」

「守護獣って、使い魔じゃないのかい？」

「違いはないんだろうけど、気にしてるみたいだな」

零弥が数刻前の戦いを思い出す。信念、覚悟とも言うべきものが目に見えるほど感じ取れていた。

「最大の特徴はデバースに組み込まれたカートリッジシステムって呼ばれる武装。儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバースに組み込んで、瞬間的に、爆発的な破壊力を得る」

「……危険で物騒な代物だな」

「だが確かに、攻撃力を補う、と言う意味合いではこの上ない優れたもの、か」

自分で言葉にしてみて、考える。自分の実力不足を棚に上げる気はないが、補うと言う部分では確かに有効な物。

——ゼロに取り付ける事は不可能だろうか？

そんな事を考えているとクロノが前に出て、フェイトに声をかけた。

「フェイト。そろそろ面接の時間だ。なのは、君もちよつといいか？」

「俺はいいのかクロノ」

「呼ばれているのはなのはなんだ。君が来る必要はないよ」

「そうか。じゃあ待つてる」

そのままクロノは二人を連れて出て行ってしまう。なのはは少し戸惑いを含めた視線をこちらに向けていたが。別に寂しい訳ではないが、少し疑問が残った。

何故なのはだけで自分はいいのだろうか、と。

「じゃあ、やっぱり無理か……」

「うん。ベルカ式カートリッジシステムは珍しい物だからね。簡単に取り付けて欲しいと言って着けてもらえる物でもないよ」

「……そもそも使う魔法がミッド式みたいだし、合わないかもしれないしな」

うーん、と顎に手を添えて考え始める。今の實力じゃそのベルカの騎士達に負けてしまうのが目に見えてしまう。何か考える必要があるのは確かだった。

近くにあった休憩場で一緒に一休みしていると聞き覚えのある声に呼ばれた。

「ユーノ君。アルフ。零弥君」

「エイミー」

「レイジングハートとバルディッシュの部品。さっき発注してきたよ。今日明日中には届けてくれるって」

「あ、ありがとうございます」

エイミーはグッジョブと親指を立て、ウィンクした。だが話は終わりでないようだ。

「——でね、さっき正式に今回の件がうちの担当になったの」

「え？ でもアースラは整備中じゃ……」

「そっなんだよね……あ、そうだ。クロノ君知らない？」

「なのはとフェイトを連れて面接とやらに行っただけど？」

「なんだか管理局の偉い人らしいけど……」

へー、と零弥は感嘆した。フェイトはもうそんな偉い人と面会できるようになったらしい。

（……あれ？ 待てよ？ 俺が行かない理由って、相手が偉い人だから？）

そう言えば初めてアースラに乗ったときも随分啖呵をきってしまったし、案外リンディに危険視されているのかもしれない、なんて考えると自分の立場を見直す気になってきた。

「そう言えば零弥の待遇って民間協力者だけど、少し変な位置なんだって？」

「ん？ ああ。クロノが言うには俺は民間協力者兼管理局のスパイって事になってたんだって。いくら敵対したからいまいち納得のいかない待遇だよなあ」

「それは零弥がどっち着かずの中途半端だからでしょ？」

「うるせいやい。俺だって色々考えての結末なんだから言うな」

零弥がため息をついて、再認識する。やはり自分の立ち位置に問題があるのだ。

いくらか時間が経ち、アーススタッフ集合の連絡である一室へ向かった。
いつの間にかなのはやフェイトも来ており、零弥もホツとしながら入った。
もう少ししてリンディが現れ、話が始まった。

「さて、私達アーススタッフは今回、ロストログア闇の書の搜索、及び魔道士襲撃事件の捜査を担当することになりました」

『クロノ。魔道士襲撃事件って？』

『リンカーコアの魔力蒐集は今回が初めてじゃないって事さ』

『なるほど、把握』

「ただ、肝心のアースがしばらく使えない都合上、事件発生時の近隣に臨時作戦本部を置くことになります」

『近隣って？』

『……被害は君達の星を中心に様々な星の生物を対象にされている。本拠地が地球、と言う推論がでているんだ』

『なるほど、把握』

「——司令部は私とクロノ執務官、エイミー執務官補佐。フェイトさん。以上三組に分かれて駐屯します」

『やべ、聞きそびれた』

『そもそもこんな会議中に念話してくるんじゃない！』

「ちなみに司令部はなのはさんの保護をかねて、なのはさんのお家のすぐ近所になりまーす」

最後の言葉を聞いて向かい合うフェイトとなのは。お互い笑顔になり、喜んだ。

『零弥君。貴方には少しお仕置が必要みたいですね』

『な、なんのことで!?!』

『ふふ、気付かれないと思いましたが? クロノ、貴方もよ』

『ぼ、僕もですか艦長!?!』

そこにいる全員が笑顔になるのをよそに。げんなりした黒髪二人組みがいたとさ。

「臨時駐屯地、ねえ……」

「うわー! すごーい! 凄い近所だ〜」

「ホント？」

「うん。ほら、あそこが私んち」

なんて自分の家を指差すなごましい雰囲気はともかく、この豪勢さはなんなのだろうか？

高級マンションの一室。部屋もかなり広く。普通に宴会なんかも開けそうなほど。

「ぐえ……そして何故お引越しのお手伝いをしなければならないのかどうかご説明を……」

「ふふ、お仕置き的一端ですよ。あの子達の為に働いてくださいね」

そうして零弥はいい汗を流し続ける。下働きは辛いものである。

「ん？ ユーノ……とアルフか？ 何故に動物？」

「新形態、子犬フォーム！」

「なのはの友達の前じゃこっちはじゃないとね」

零弥の目線の先にはつい最近まで見なかったユーノのフェレット姿と子犬姿と新しいバリエーションのアルフだった。共に二足歩行な事に違和感を感じるが、今はまあよしとしよう。

引き続き荷物を運ぼうと外に出た。すると最近は見慣れた顔がそこにいた。

「――あれ？　すずかにアリサじゃん」

「零弥君！？」

「クロ！　なんであんたがここにいんのよ？」

「なんでって……引越しのお手伝い？」

「疑問系で返さないでよ！」

「まあまあ。なのはならその部屋にいるぞ。じゃ、また後で」

二人に見送られてエレベーターに乗り込み、再び荷物を運ぶ。

何度か繰り返し返した辺りでようやく終わり、息をつくころにはリンデイ含め、なのは達はどこかに行ってしまった。

「置いてきばーりー置いてきばーりー……ふんっ！！　別に悔しく
なんかねーよ……」

「何を言っているんだ？」

クロノ君よ……この妄言に返答を返さないでいただきたい……

A、S 編第3話 騒がしい再開（後書き）

さて、カートリッジシステムについては自分の勝手な設定ですね。アニメで簡単に付けられてるところを見るとそんなでもないのかな？　なんて思いますが、まあこれもこれで主人公がどうなるのか。考えるところがありますから。

A、S 編第4話 気付かぬ邂逅（前書き）

さて……就職どうしよう？

A、S編第4話 気付かぬ邂逅

それから全然帰ってこないのは達（+リンディ）に若干呆れに
た感情を感じながらも零弥は目の前にノートを広げていた。珍しく
もお勉強、と言う訳ではない。更に違和感を感じたのかクロノまで
近寄ってくる。

「なにをしているんだ零弥？」

「新しい戦闘方法の模索。臨機応変の対応ってのがまだまだ出来な
いからな……もし俺が今フェイトとぶつかったとしたら絶対負ける
だろ？」

「まあ……ね。速さでかく乱された後、ダウンするのは頭に浮かぶ
よ」

「俺の戦い方はどうしても火力不足が否めないんだよ。あと速度。
砲撃魔法も収束も完全じゃないし、あるのは近接戦闘。だからカー
トリッジシステムに期待したけど……ダメそうだし」

それを聞いたクロノもうーんと考え始める。今はアースラにいる時
の黒い制服ではなく、普通の少年らしい普通の私服だった。そんな
彼の場合はその努力実ったの賜物だ。零弥自身怠けたとは言わない
がやはりどうしても劣る。

「瞬間的な破壊力が必要なわけだ……それを考えれば確かに急激に
魔力を上昇させるカートリッジシステムはいい考えかもしれないが、

あれは使用者への負担もあるぞ?」

「急激に魔力を上昇させる……急激に上昇……そうだった! 面白いこと考えた!!」

どうにも閃いたようで零弥は何かしらをノートに書き込んでいく。今のあれだけの会話で何を閃いたのか検討もつかず、クロノは訝しげにそれを覗いた。

「……お前っ! ……これはいったいどんな発想だ……」

「うーん、確かに荒いかもしれないけど、間に合わせにはちょうどいい戦法だと思うけど……」

苦い顔を越えて難しい顔になったクロノにあまり自信なさげに答えた。

確かに思いもしなかった。単純理論を元に考え出した単純な発想。

「……背中にブースターを付けるなんて……」

「ある偉人が言った。速さは重さだと……ふっ」

命名してフルバーニアン。背中から魔法で推進力を発生させるブースターのような物を取り付け、発動タイミングを合わせたの特攻。確かに攻撃力は高くなる。更には飛行速度の向上。だがそもそもそれを使って攻撃を当てられるのか、そしてなによりリスクの高さが

問題でもある。

それに関しては思考錯誤を繰り返すしかなく、再び頭を傾げる事になる。

と、そこにクロノと同じく管理局の制服ではなく私服姿のエイミーが来て、こちらを見て首を傾げる。

「どうしたの？」

「俺の強さへの階段を模索しています」

「……よく分からないけど。頑張ってるね。クロノ君。ちょっと見てもらいたいのがあるんだけど」

「なんだい？」

そうしてクロノはエイミーに着いて行ってしまう。するとなんだか霧消に寂しくなり、ノートをたたんでクロノ達の場所に向かった。

そこでは立体映像と言うか、初めてリンディが通信してきたように大きな画面が浮かび上がっていた。更にそこに写っていたのは何者かに抱えられた厚い本。

「これが闇の書って奴か？」

「そう。ロストロギア、闇の書。持ち主はランダムで選ばれ、無限に再生、転生を繰り返す。最大の特徴はそのエネルギー元にある。闇の書は魔道士の魔力と魔法資質を奪うためにリンカーコアを食うんだ」

「なのはがされたのはそれか？」

「ああ、間違いない」

そつ口を開いたクロノの目はいつもと比べて些か厳しい。

憎憎しい、というよりは何らかの使命感にでも駆られているような様子。

「闇の書はリンカーコアを食うと蒐集した魔力と資質に応じてページが増えていく。そして、最終ページまで全てをつめることで闇の書は完成する」

「……完成するとどうなるの？」

エイミーが不安げにクロノを見る。聞かずとも、何と無く零弥は察しがついた。

「……少なくとも、ろくなことにはならない」

「……破壊目的、か。騎士達が蒐集をやっているところを見る限り、その持ち主とやらもろくな考えをしてなさそうだな」

零弥の言葉が静かなその空間に響いた。言つべき言葉がもう見つからない。

そんなところなのかもしれない。

その夜、疲労が溜まった体を労わる為に早寝しようとしていた零弥に一件のメールが届いていた。

「……………ん？　　すずかか……………なんだ？」

結局、あれからなのは達は帰ってこず、零弥は早いうちに帰路についていた。
別に特別用があるわけでもなく、自分の魔法を完成させたかったためだ。

随分と長い前書きがあるが、これもすずかなりの礼儀なのかもしれない。全部読み上げ、重点を纏めてみるとこういうことだった。

（明日の午後に図書館に付き合っで欲しい、か）

別に珍しい事でもない。最近をよくすずかに誘われることがある。なのは達とのお茶会だったり、こうして図書館だったり。嫌ではない。頼られたり誘われたりすることに若干の違和感を感じる以外は。

零弥は一言、よろこんで返信し、床についた。

翌日、見事に寝た。気付いたら昼を過ぎると言う状況。

別に悪いことはないが、思いの他予定が崩れたことが問題だ。

「俺の修行の時間が……」

壁に立てかけられた木刀はカビでも生えそうな勢いで放置されている。

それから魔法の模索なり、近所のスーパーのチラシ見るなり一人で出来ることをして時間をつぶし、予定の時間ぴったりに我が家のインターホンが鳴らされた。いつだって時間ぴったりに来るから驚きだ。

「はいはい。今行きまーす」

ポケットに財布と十字架を捻りこんで玄関へと向かった。

財布は特売の品を買ったため、十字架、もといゼロは緊急の為。

もうゼロを手放すことは無いだろう。

「付き合ってもらっちゃってごめんね。零弥君」

「気にするな。友達ってのは助け合う物だとばかり思う」

町にある市立図書館。今零弥とすずかがいるのはそこだった。

零弥はつい最近まで存在は知っていてもその場所までは知らなかった。

それは零弥が元々不勉強な少年な事が第一の要因だろう。しかし、それをすずかに言ってみると、「そう、本嫌いなんだ。ごめんね。」

無理につき合わせちゃって」「なんて言う激しく自己嫌悪に駆られる気持ちとなのは、アリサの視線が痛かったので、「あ！でも少し興味あるかも！」「なんて苦し紛れな一言を吐くようになってしまったのだ。

しかし、実際に来てみるとなかなかいい場所である。知識の溜まり場、などとも言うのだろうか、知りたいことが直ぐに知れる。結構重宝できるのだこれが。

そんな彼は今すずかが読もうとしている本を持っておいてやっている。車で送ってもらったりもしているのだ。それくらいやらねば。

「星の童話……へえ、普通の童話と違うのかな……」

「うん。それはね……はやてちゃん！」

零弥が本の表紙を見て尋ねたが、唐突に出たそのはやてちゃんと言う言葉で顔を上げた。すずかの視線は本を読むための座席スペースに向けられており、つられてそちらを見た。

そこには車椅子に座った少女と特徴的なピンクの髪の女性がそれを押していた。

すずかに気付くとはやてと呼ばれた少女も笑顔になる。

「すずかちゃん！」

「……知り合い？」

「うん！」

すずかははやてに駆け寄り、零弥はふーん、と言った顔でそれを見る。

その際、違和感を感じる。

別にはやてがどうか言うわけではない。ただ、はやてを――
否、はやての目を見ていると、何故か心がざわついた。

「始めまして。八神はやてと申します」

「……黒野零弥だ。皆は零弥君って呼ぶし、八神も気軽に呼んでくれて構わないよ」

「ほんなら私の事もはやてでよろしくな。いや、すずかちゃんにこんな彼氏さんがいたとは驚きやな」

「ち、違うよはやてちゃん！ 私達そんな関係じゃ……」

珍しい同行人と言う事で零弥も簡単ながら自己紹介することになった。

やはり一目見ての反応はそれなのだろうかと思うと零弥は嬉しいようななんとも言えないような複雑な気持ちになった。

考えて欲しい。零弥は13歳であると言つ事を……

「……あの、零弥君？ そんなマジになられても困るんやけど」

「ん？ 俺そんな真面目そうな顔してたか？」

「うん。めっちゃ」

まあいいだろう。と零弥はその真面目な表情とやらを消し去り、気さくな笑みを浮かべる。ふと零弥は視線に気付く。とは言っても敵意やら悪意やらを感じない興味本位の視線だが。それは先程mではやての車椅子を押していたピンクの髪的女性。微笑ましい物を見るようにこちらをうかがっていた。

「あの人ははやてのお姉さん？」

「うん？ そんなもんやな。私の大事な家族や」

ピシッ、と頭の中の何かに輝が入ったような気がした。久しく聞きたがいその言葉。どうも自分で言うのと他人の言葉は違うようだ。

とりあえず問題はそこではない。何故わざわざ遠巻きからこちらを見ているのか気になった。

「シグナムは少し人との付き合いが苦手なんよ。勘弁してやってな」
「別に責めてる訳じゃないさ。ただお話を聞いてみたいかなあ、なんて思ったりしただけ」

ピンクの髪の女性、シグナムには聞こえない程度の声で言葉を交わす。
なるほど、それならそれで納得だ。それはそれとして聞きたいことがあった。

「足、悪いのか？」

「え？ うゝん確かに麻痺して感覚はないけど、今は不便でもないよ。シグナムもいるしな」

「そつか……強いな。敵わんよお兄さん」

「え？ すずかちゃんと同じ年やないの？」

「え？」

「え？」

「13歳でございますが？」

「うそや！ だってすずかちゃんと身長そんな変わらんやん！」

「そんな！ 嘘だと言って！」

「残念ながら身体年齢10歳やな」

「Oh my God!!」

「な、なんで英語なの？」

零弥は絶望に頭を抱え込む。そう、ゼロは何も教えてはくれない。

教えてくれゼロ。俺はあと何本牛乳を飲めばいい？

そして何度メジャーを使えばいい？

「つてのわー！ー！！ しまったー！！ 近所のスーパー安売り

セールがあああー!!」

「え？」

「すまん！　すずか！　はやて！　急がねば俺の晩飯がなくなってしまう！　ではさらば！」

言いたい事を言って、零弥は走り出す。

「廊下は歩きなさいー!!」、と誰かの言葉が響く頃には既に零弥は図書館を飛び出していた。

「な、なかなか個性的な彼氏やな」

「もう！　だから違うって」

「……零弥君は、一人暮らしなんか？」

「……うん。事故で両親と妹さんを亡くして、今は家族の家に一人で住んでるみたい。私もつい最近知り合ったからよくは知らないけど……」

それを聞き、はやてはどこか悲しげな、それでいて自虐のような笑みを浮かべた。

（……いるんやな。うちみたいな人。こないな近所に）

はやては過去を思い出し、苦い顔へと表情を変えた。
その目は未だ零弥がいなくなった方を見ていた。

零弥は結局特売に乗り遅れました（笑）

A、S 編第4話 気付かぬ邂逅（後書き）

今回は非常に無理やり感があります。

文句もとい指摘があったら問答無用で言ってやってください。

所詮凡才はこんなものさ！

A、S 編第5話 新たな力（前書き）

A、S 編もなかなかくるな。
アニメ見直して書いてます。

A、S 編第5話 新たな力

フェイトがなのはと同じ学校に通い始めたことを零弥が知ったのは随分最近だ。

何故教えてくれなかったのか尋ねてみると、知っていたと思ったと大半に言われる。

「……あれから何事も無く、平和だなあ……」

なんて独り言を呟くが、今彼がいるのは喫茶翠屋。ただいませつせとバイトに励む真つ最中だ。近々クリスマスのイベントやもあるらしく、翠屋は大忙し。

しかし、そんな中になのはの姿が見えないのには理由がある。

なのはがリンカーコアを蒐集され、数日が経ち、目測ではそろそろ治る頃なのだそうだ。その為、フェイト達を連れて時空管理局の本局に検査に戻っている。

一時は零弥も行くことを考えたが、バイトが重なる。しかも高町家は零弥が学校に行っていない事を知っている。何が言いたいのかと言うと、休む理由の答え様がないのだ。

事実を告げることはもちろんダメ。高町家は魔法を不認識なのだ。

「零弥君。これ運んでね」

「了解です桃子さん」

そういう訳でバイトはそりやもう働く働く。解放されたのは日も暮れ闇に染まる頃。

「ちかれた〜。もうなのはの検査は終わる頃かね〜」

日も暮れ、今から会いに行くと言つのもなんだかカッコ悪いので、桃子からいただいたケーキ片手に帰宅中だ。

外は思わず身震いするほど肌寒く、なんで雪降らないの？ なんて疑問に思う。

（帰ったら暖かい物食べよう。それがいい……）

そんな事を零弥が思ったときだった。

「……魔力反応。結界、か」

短い安息の日々を終え、零弥は嘆息する。

「お、ザフィーラにおちび。また会ったな」
「お前は……ゼロ!!」

海鳴市上空、二人の人影が管理局に包囲されていた。どちらも見た顔だ。

「おい！ 誰がおちびだつて！」
「怒るなつて。じゃあお前はなんだつたらいいんだつつの」
「うるさい！ やっぱりお前管理局の人間なんじゃないか！」
「民間協力者と言え。民間協力者と」

零弥は少しばかり疲れたように嘆息する。黒い衣が風に揺れ、ばたばたと音を立てるのをその耳に聞きながら。

『全員！ 対象から離れる！』

そんな中聞こえてきた念話。誰かなんて聞かずとも分かったし何処からなんてのも聞く前に感じた。

そして、ザフィーラ達から距離を取る管理局員に真似て下がる。その顔に怪訝な様子が刻まれた瞬間、まさかと上空を見上げていた。

そこには無数の剣を作り出し、こちらを見下ろしたクロノがいた。

気付いても包囲網から直ぐには抜けられない。落ちてくる流星のような蒼い剣は二人を捕らえ、爆散する。

「うわ。不意打ちずりー。なんて言ってられる状況でもないか」

零弥も懐からゼロを取り出し、起動する。

あの二人がこんなに簡単にやられるわけが無い。戦ったからこそ分かる。そのもくもくとした煙が晴れたそこにある光景が。

ザフィーラが少女を庇うようにして立ちふさがり、その腕には数本の剣が刺さっていた。それ以外の外傷は見られない。いや、そもそもその剣すらも傷のうちには入らないようだ。

「やっぱやるなあ。流石盾を自称するだけあるな」

「お前、バカにしてんのか!？」

「なんでそうなる……」

零弥は少女の睨みに目を逸らし、頭を掻いた。普通に戦うと言う選択肢はないのだろうか？ あ、取り囲んでるか無理か。

そんな自暴自棄な発想へといたってしまう。

『クロノ、作戦はあるのか?』

『なくはない。戦力もそろってきた』

『戦力?』

零弥はクロノの視線の先に目を向ける。いつのまにか転送されたのだろう、ビルの上に私服姿のなのはとフェイトが並んでいた。違うビルの上にはアルフとユーノもいる。

「あいつら!」

「……病み上がりだったのに、大丈夫なのか?」

少女が二人を睨む辺り、面識ありなんだろう。血走ったような目で二人を睨んでいる。

そして、二人がその手のデバイスを掲げ、高々に叫んだ。

「レイジングハート・エクセリオン!!」

「バルディッシュ・アサルト!!」

「セエエツトアアアップ!!」

二人が光に包まれる。その光はいつもよりずっと強い。

何かが違うつ! 零弥にしろザフィーラ達にしろそれを感じ取ったのだろう。思わず身構える。

やがて光が止んだ時、そこにいた二人のデバイスと防護服はなにやら変わっていた。

『ベルカ式、カートリッジシステム……』

『あれが? なのは達のデバイスに付けたのか?』

そう、レイジングハートにはライフルのマガジンのような部分が追加され、バルディッシュには先端の少し手前にリボルバーのような

回転式弾倉が追加されていた。

『俺のには付けてくれなかったのに……いいなあ』

『ぶつくさ言うのは後にしろ！ 奴ら本気になつたみたいだ！』

先程と圧倒的に違うのはその目、少女に限っては気に入らないという言葉が耳に聞こえそうなほどだ。

さて、どう動くべきか。と考えたとき、先に動いたのはなのは達だった。

「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」「闇の書の完成を目指している理由を！」

何処まで言つても二人らしい言葉。零弥はそう思った。バカにするつもりはないが、この場合はいくらなんでも難しい。

「——あのさ、ベルカのことわざにこういうのがあんだよ。」

和平の使者なら槍は持たない」。……話し合いをしようつてのに武器を持つてくる奴がいるかバカって意味だよ。バーカ」

「んなつ！ いきなり有無を言わずに襲い掛かってきた子がそれを言う！？」

「しかしなるほど、一理あるな」

「零弥君！？」

確かに間違った事を言ってるわけでもない気がする。武器を持つて事は相手に対して攻撃の意思あり、もしくは不安を抱いているわけだ。まあ、だからと言って持ってこなかったら今度こそ有無を言わず攻撃されそうだが。

「しかしそれはことわざではなく小話のおちだ」

「……少しでも納得した時の俺の気持ちを全部返せ!!」

「うるせー!! 私がそんなこと知るか!!」

案外このまま話ですむんじゃないだろうか？ そんな事を思った矢先。結界を貫いて紫の雷が落ちる。

それを見てプレシアの雷と言う苦々しい記憶が蘇ってくるがそんな物は直ぐに吹き飛んだ。その、雷が落ちたところに立っていた人物に見覚えがあったからだ。

「——シグナムさん？」

先日、はやてと共にいたピンクの髪の女性、シグナムがその手に剣を、その身に鎧を身につけ、跪いていた。

A、S 編第5話 新たな力（後書き）

主人公ちよこつとパワーアップ！
速さは重さなんですネ、はい。

勝手過ぎてごめんなさい。

A、S 編第6話 再び、戦いするとき（前書き）

そろそろ主人公の威光を見せて欲しいところですね。 零弥君。

A、S 編第6話 再び、戦いするとき

「——シグナムさん？」

そこにいたその人は悲しいことに自分達の敵で、悲しいことにその人と戦わなければならない。

はやてはこの事を知っているのだろうか？　そもそもはやてが闇の書の持ち主なのだろうか？

それに関しては首を振れた。あの時出会ったはやては全然普通の少女だった。小学生ほどの子供が闇の書の力を欲しがるわけがない。

早急な答えは推測ながらはやてはこの事を知らない、それだけだった。

——　——　もしも、大事な家族を傷つけたら、彼女は悲しむだろうか？
言うまでも無く、悲しむ。

しかし、彼女の相手は自分ではない。その目は真っ直ぐにフェイトを見つめている。なんらかの因縁を前回の戦いで作ったのだろう。

そうになると、自分の相手は決まっていた。

「ザフィーラ……勝負だ!!」

「……いいだろう。こい!」

零弥はゼロのアーカナイトモードを起動させる。それを両手で構え、ザフィーラの向かいに立つ。ザフィーラもその手の手甲を握り締め、構える。

「今日は誰かを助けに行く必要も、逃げる理由もない。思う存分やりあえる」

「……そこまで自信があるということは、何か用意してきたか?」

「もちろん。だから、行くぜえ!!」

零弥はゼロを縦に大きく振りかぶり、突撃する。ザフィーラの目前まで近づくと一気にそれを振り下ろし、鈍い音が響く。おなじみ、ザフィーラの障壁だ。その硬さに舌を打つ。

「相つ変わらず硬いなもう!!」

それから小細工なしにガンガンと殴り続ける。その姿は到底訓練をしている人間には見えない。実際に対訓練など行っていないのだが。それでも間髪いれず振り下ろされるそれにザフィーラは反撃を許されない。

「つぐ、前回の戦いでもそうだが、貴様、本当に魔術師か？ 纏うそれも、その剣からもろくな魔力を感じ取れない」

「はっ！！ 知ったことかよ！ 子供が戦って、お兄さんな俺は傍観！？ んな耐え切れねえこととするよりなら戦いに走る。意地があるんだよ男には！！」

咆哮に似た声を上げた瞬間、零弥の黒い衣の魔力が急激に高まり、後方に集中する。両肩の後ろ、そして両足の踵から黒い光りが漏れ始める。

「これは……っ！」

「俺の研究成果！ フル・バーニアン！！」

漏れ出す黒い光りはやがて炎のように波立ち、バーナーのように黒い火を噴き出したかと思うと衝撃が体を駆け巡る。そのくらいは予想範囲内だ。歯を食いしばり、ゼロを握る力を強める。

「だあああああああああ！！！」

「ぐ……ぬう……ぬあああ！！！」

叫びと共に障壁を砕き、ザフィーラに剣を叩きつける。それをそのまま振りかぶり、吹き飛ばす。その衝撃で下にあったビルに真上から落ち、轟音とともに床を破壊して落ちていく。

「はあ……はあ。やっべ。体いつてー……」

零弥は肩を抑えながらへへっ、と笑った。使用するのはぶつつけ本番だったのでどれくらい衝撃が自分にくるか計算はしても実際は違う。

使えてあと二回、いや三回。

それまでにザフィーラが倒れなかったらこっちの負け。難しくもな
んとも無い。

「ておあああああ！！」

「きたか！」

突如落ちたその場所から急上昇してくるザフィーラ。お返しとでも
言わんばかりにその拳を振ってくる。咄嗟に開いた薄暗い障壁はザ
フィーラの拳を防ぐ。

「ぬうううう！！」

「ザフィーラ。俺はな、真正面からの攻撃なら障壁には自信があん
だよー！」

ザフィーラの拳をはじき、お互い距離を取る。ザフィーラを見てみ
るとわずかながらその肩は上下していた。

ふと上を見る。ピンクと黄色の閃光が夜空をそれらしく描いていた。

「シグナム……あんなに強いのか……」

「……シグナムは我らが将。当然だ」

「そっか。敵わないな。さて、そろそろ続き、やるか？」

「言われずとも……！」

再び二人はぶつかる。片方は灰色、片方は黒い閃光を発し、その夜空を彩るように駆けていく。

本来なら零弥の飛行速度はザフィーラに及ばない。しかし、バーニアの応用と短時間の特訓から飛行速度には若干の付加がかかっていた。

お互いの武器を叫びと共にぶつけ合い、その音は大きく響く。

（ゼロ……この短期間で私とここまで戦うとは……見事だ）

（やっぱり強い。今はなんとか合わせてるけど最初の一撃がなかったらもつとやばかった）

ザフィーラは前回零弥を倒したように無防備な腹に正拳突きを叩き込む。

「なんの……！」

しかし流石に予測の範囲内だったのかその部分の黒い衣を硬質化させ、直撃を防ぐ。そしてその隙を突いて零弥がゼロを振り下ろす。

「甘い!!」

だが、それも止められ、お互いに一進一退の攻防を繰り返すばかり。遠くからそれを見ていたアルフやユーノにしてみればとんでもない光景だった。

「あいつ……あんなに強くなったのかい!？」

「……いつの間に」

現在戦いを三人に任せ、二人とクロノはもう一人の敵と闇の書の主を探していた。それはここにいる三人がそれを所持していなかったからだ。元々蒐集が目的なはずなのに闇の書を持たないはずがない。

「行け! ダークシューター!」

「そんなもの!」

零弥が片手で発射した黒い魔法弾を軽々と手甲ではじく。しかし、今までそこにいた零弥はそこにはいなかった。辺りを見回す。左右前後、そして上を見上げたときに声は聞こえた。

「モード、バスターソード！ 必殺！！」
「下か！！」

背中から黒い炎のバーニアを吹かし、高速で上昇してくる。
更にそれに回転を加え、思い切り叩きつける。

あんけんいっせん
「闇剣一閃！！」

下からザフィーラを切り上げるようにゼロを振るう。咄嗟に発動させた障壁を砕き、ゼロは一刀両断する勢いでザフィーラを切りつけた。

衝撃で吹き飛ぶザフィーラ。しかし、その口元には笑みが浮かんでいた。

それに疑問を持った瞬間、結界の真上に薄暗い雲が出来上がっていることに気付く。

「これは……ッー！」

零弥が驚きに目を見開いた瞬間、結界を破壊せんと雷が落ちてくる。

「……ゼロ。今回は我らが引こう。しかし、次こそは我らヴォルケ

ンリッターが勝つ！」

「ザフィーラ。聞かせる！ お前らの主は、本当に闇の書の完成を……ッ……ッ！」

言葉を最後まで言う前に雷が結界を貫き、破壊する。

咄嗟に落ちてきたそれを防御する。余波のはずなのに障壁がやぶられそうだ。

閃光で前が見えなくなり、それが晴れたときシグナムもザフィーラも少女もいなかった。

「逃げられた……いや、どっちとも言えないか」

ふと上を見上げると先程の雲は既に晴れ、結界によって変わった世界は色を取り戻していく。視線を横にずらすとアルフとユーノに守られたのはとフェイトがおり、こちらに向かって視線を送っていた。

「エイミーさん……なんで二人のデバイスにカートリッジシステムを？」

「あの子達の頼みなのよ。装着しないとずっとエラーだぞって感じ」
「……いいのかそれで」

帰ってきて直ぐに不満をエイミーにぶつける。確かに重要戦力である二人が戦えないと痛いと言うことは納得できるが。

「まあいいや。クロノ、守護騎士達のデータを見せてくれよ」

「まだ見てなかったのか？ 仕方ないな」

クロノが近くのリモコンを操作すると空中にモニターが現れ、画像が表示される。

移っていたのは四人。シグナム、ザフィーラ、それに赤い少女に緑の女性。

「この剣を持っているのはシグナム。使い魔はザフィーラ。ハンマーを持っているのはヴィータで闇の書を持っているのはシャルダそうだ」

「シグナム、ザフィーラ、ヴィータ、シャル。オッケー、記憶した」

名前を頭に叩き込み、零弥は考え始める。

これは零弥の勝手な推測だが、闇の書の持ち主ははやてだ。だがおそらく騎士達が蒐集している事に気付いていない。だがこの前会ったシグナムが主人を嫌っている様子は全く見受けられない。はやてを思ってたか、もしくは本能的な者なのか、どちらにせよこうして敵対するには闇の書を蒐集する理由が知りたい。

「——い、零弥。聞いているのか？」

「え？ あ、すまん。聞いてなかった」

「全く……今まで闇の書が破壊以外で使われた例はない。闇の書にはそう言った力しかないんだ」

「破壊だけ……つまり、持ち主は破壊活動が目的で闇の書の蒐集をさせているのか？」

「それしかないはずだが……それからもう一つ、あの騎士達、闇の書の守護者の性質だ。彼らは人間でも使い魔でも無い。闇の書に合わせて魔法技術で作られた擬似人格。主の命令を受けて行動する、ただそれだけのプログラムにすぎないはずなんだ」

一同に衝撃が走った。無理もない、自分が戦った相手が生き物ではないプログラムと聞けばだれでも驚く。

しかし、零弥は実際にそう言われてもいまいち実感が沸かなかった。ザフィーラだって無口にして仲間の発言に気を使ったり、助けに行こうとしたりすることもあった。

本当にプログラムなのだとしても零弥には自分達と同じ存在としか

捉えられなかった。

と、フェイトが少し不安げに一步前に出た。

「あの……使い魔でも人間でもない擬似生命って言う……私みた
いな――」

「違うわ!」

フェイトの言葉をすぐさま否定したのはリンディだった。その顔は
少し悲しげだ。

「フェイトさんは生まれ方が少し違っていただけで、ちゃんと命を
受けて生み出された人間でしょ?」

「検査の結果でもちゃんとそう出てただろ? 変な事言うものじゃ
ない」

「はい。ごめんなさい」

「流石クロノお兄ちゃん。いい事言いますね」

「な!? からかうな! 大体なんでお前が知ってるんだ!」

「エイミィさんに聞いた」

「エイミィ……君って奴は」

「え!? ほ、ほら! モニターで説明しよ? ね!?!」

半ば逃げるようにしてエイミィがりモコンで先程より大きなモニタ
ーが現れ、守護騎士達と闇の書の映像が現れる。

「守護者達は闇の書に内臓されたプログラムが人の形を取ったもの。闇の書は転生と再生を繰り返すけど、この四人はずっと闇の書と共に様々な主の元を渡り歩いている」

「意思疎通のための対話能力は、過去の事件でも確認されてるんだけどね、感情を見せたって例は今までにないの」

「闇の書の蒐集と主の護衛、彼らの役目はそれだけですものね」

クロノ達はそう言うが、零弥達もまた思うことがあった。

「でもあの帽子の子、ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだりしてたし」

「それを言うならザフィーラも。こっちの事を気遣うような事も言ってた」

「シグナムからもしっかり人格を感じました。為すべきことがあるって、仲間と主の為だって」

「主のため、か」

零弥とクロノは無意識に同じ言葉を口にしていた。それを本人らが気にした様子はないが、思った事はまた別なようだ。

零弥を除く皆の視線は一段と暗いクロノへと向けられていた。

「まあ、それについては捜査にあたってる局員からの状況を待ちましょっか」

「転移付近から見ても主がこの近くに居るのは確実ですし、案外、主は先に見つかるかもしれません」

リンディとクロノのその言葉は前向きな物のはずなのに何処かいつもとは違う何かが見え隠れしていた。

そんな中、零弥は一人で考え込んでいた。

他の誰一人気付かないが、零弥の魔力やロストロギアを探知する力を使えば見つけられること、確証はないが。だがそれをこの場で発言しないのは一つの思いがあつたからだ。

闇の書の蒐集の理由。今最も謎で零弥の知りたい答え。

柄でもないが、シグナムの言うとおり仲間や主のためと言うほどならばなにか理由があるのかもしれない。

管理局と言う巨大な敵を作つてまで——そもそも闇の書自体がロストロギアとして危険視されているが——蒐集をする理由とはなんなんだろう？ やはり勝手な推測ながら騎士達が自分達の事だけを考えて行動しているとは考えにくいとは思わなかった。いや、それこそ零弥の勝手な妄想に過ぎないのかもしれないが。

でも、聞いてみたいと思った。

それがもしもはやてのためなのだとしたら、自分は考えを変える必要が出来る。

——心苦しいことにも、またなのは、フェイトと対立する道が出来るのかもしれない。

だがそれでもいい。ヴィータと言う少女にしろ、はやてにしろ、女の子の悲しい顔は心が締め付けられる。だからやるのだ、自分は。

なんとかして接触するなりして、はなしを聞かせてもらおう。

まるでなのはようだが、それ以外に答えはない。

A、S 編第6話 再び、戦いするとき（後書き）

今回は間章いれられなさそうですね。

まず、浮かばない。無理に入れるよりはそのままストーリーを進めることですね。

さて、本来ザフィーラと戦うはずのアルフは原作より更に薄いな

A、S 編第7話 砂漠の戦い（前書き）

タイトルで分かるように、今回はあの場所での戦闘です。

さて、そろそろ真面目に職探すか……（18歳男性）

A、S 編第7話 砂漠の戦い

「とは考えてみても、なかなか反応はないかあ……」

零弥は朝早くより魔力探知に精を出していた。とは言っても町を歩き回りながら探す程度なので簡単には見つかりそうに無いが。

昨夜は遅くまで起きて調べ物をしていた所為か眠そうだ。クロノに攻撃をしかけた仮面の男にしろ、今回はなにやり事情が違おうようだ。

この辺りにいると言うのが本当ならば、恐らく結界等で隠しているのだろう。しかし、結界の反応は何処から也觉得取れない。認識障害の微量の魔力か、そもそも使用していないのかもしれない。

本来ならユーノ辺りに手伝ってもらいたかったのだが……

「無限書庫で資料探しねえ……クロノもリンディもないし、なのは達は学校。一人でやるしかないよな」

若干苦い顔をしながら少しばかり冷めた朝の喧騒の中を歩いていく。その姿に目を止める者は決していない。

結局収穫はなし。カッコ悪いことこの上無し。今は一人戻ってきた
エイミイの買い物に付き合っていた。

「かぼちゃ……何に使うんだ？」

「今夜の晩御飯のおかずだよ。あ！　そこ！　勝手にお菓子をいれない！」

「ちえ、バレたか」

しぶしぶと持ってきたじゃ。りこを元の棚に戻す。何でそういうの
には敏感なんだ。

帰りの荷物持ちは零弥。ほぼ無理矢理に持たされる。
エイミイ曰く、「私はオペレーターだから荷物持ちには向いてない
の！」、らしい。

男の威厳として持つが、今後はクロノにでも頼んで欲しいと思う。

そのまま臨時駐屯地に帰宅すると学校を終えたフェイトとなのはがいた。足元には子犬のアルフが寝転がっている。

「アルフ……そう言えばお前、狼じゃなかったっけ？」

「いいんだよ！ 子犬と狼を使い分けてるんだ！」

いや、どちらも犬だろ。なんてツッコミは心の中にしまっておくことにした。

買ってきた材料を冷蔵庫につめる。さて、ゼロの手入れでもするか。そう考えた瞬間、いつもの警報が家に響き渡る。

「……………うそーん」

零弥の声は小さすぎて誰にも届かなかった。

「文化レベル0。人間は住んでない、砂漠の世界だね……」

備え付けられた管制室。複数のモニターがあるその部屋で唯一ついているモニターに移っていたのはシグナムとザフィーラ。昨日の今日だと言うのに大したものだ。

「で、魔法使いがないその世界で、あいつらはなにをやってるんだ？」

「リンカーコアの蒐集でしょ？ 原生生物だってリンカーコアを持つてるからね」

「……じゃあなんで人に攻撃するのか、謎だ」

「リンカーコアを持つてるって言うても大したほどじゃないの。それに強いしね」

それから黙ってその映像を見る。ザフィーラと戦いたいのはもちろんだが、ここはエイミイの指示を待つところだ。一人じゃ星の外にも出れないし。

そんな中、口を開いたのはフェイトだった。

「エイミイ。私が出る」

「ん？ フェイトが行くなら、俺もザフィーラの相手しなきゃな」

「……分かった！」

エイミイの言葉を聞き、零弥とフェイトは頷いた。

「や、ザフィーラ。また会ったな」

「ゼロ……お前か」

「いつも通り、俺さ」

転送された先にはこちらを見据えたザフィーラ。遠くでは早くも戦闘を始めたのかごろごろ雷が鳴っている。

ゼロを起動し、アーカナイトモードに設定する。いつも通り、そう同じ。

「いい感じに俺たちもぶつかるとようになってきたな。お前らの目的が、蒐集の理由だけが懸念だけど、その辺りは倒して聞かせてもら

う！」

「早くも私に勝つ気か。慢心は己を潰すぞ」

「ハッ！ 人間少し慢心するくらいがちょうどいいのさ！ 行くぜ！」

早々に零弥はゼロの先端をザフィーラに向ける。魔力が集まり、黒い先端が更に黒ずんでいく。

「アーカナイトバスター！ 発射！！」

先端から発射された魔砲はザフィーラを射抜こうと直線状に伸びていく。

しかし如何せん範囲も広くない攻撃など距離があれば簡単に回避が出来てしまう。体勢を瞬時に立て直し、こちらへ向かってくる。

「なんて、フェイクさ！！」

「なに！？」

後に残ったかと思われた黒い光線はその姿を200メートルもの巨大な直剣へと姿を変え、一気に振り上げたかと思うと次の瞬間には振られていた。倒れるビルのようにザフィーラを襲う。

大きさは許容範囲なら自在。ミドルレンジに使える新しい攻撃法だ。重さがないそれは振る側にも空気抵抗と言う重さが加算されるが、振られる側にはその重さが追加される。

「ぐおおおおおおお！！」

「一気に、叩けええええええ！！」

かろうじて止めたと思われたが、その刃はだんだんとザフィーラを押し潰すように力の均衡を壊していく。そしてとうとうザフィーラは砂漠の世界へと叩きつけられる。

と、その瞬間、砂漠の砂の中より巨大なワームのような怪物が這い出てくる。非常に嫌そうに零弥はそれを見た。始めてみるにしては若干刺激が強い。

「ザフィーラ！」

だが下を見るとそれに攻撃を受けているザフィーラ。怪物の数はだんだんと増えていき、勝負どころではない。ゼロの非殺傷設定をオフにし、怪物に斬りかかる。

別に殺すことがいいことだと思っっているわけではないが、少なくとも切れなければ零弥の攻撃での撃破は難しい。だから闇の衣の、純粹な剣の力だけで怪物を刻む。

真つ二つになった断面からは紫色の体液が噴き出すが、そんな物に気は取られない。

全ての怪物を一撃の元に切り伏せていく。そのうち敵わないとでも気付いたのか、残った怪物は砂の中に消えていく。

後にはお互い激しく肩を上下させた零弥とザフィーラが残った。

「……殺す必要はあったのか？」

「俺には、人間以外を相手に手加減なんかできない。未熟だからな。それより、聞かせるよ！ お前らが蒐集するのは主の命令か！？」

「闇の蒐集は我等が意思。我等が主は……我らの行動について何もご存知ない！」

「……一体、何のために！？」

「主のためならば、我らヴォルケンリッター、その手を血に染めることもいとわず、主の存在こそが我らの全てだ！！」

そう叫ぶとザフィーラは再び拳を構える。それを見て零弥はどこか安心しながらもゼロを構えた。しかし、それでいて推測が更に確信に近づいたことを悲しくも思う。

零弥も砂漠に足をつけながら両手でゼロを握り締める。その歳、モードをバスターモードに変更する。たとえ理由が分からずとも、戦うことをやめる理由にならない。向こうが悪とは思えない。だとしても、今度はフェイトやユーノ達まで蒐集されてしまう可能性がある。蒐集を、止める必要がある。

「行くぞザフィーラア！！」

「はあああああ！！」

お互いの武器をお互いに向けて突撃する。初めて戦ったときと若干似ていた。

ただ違ったのはその場所、今の考え、そして、

胸辺りに唐突に感じた違和感。

「カツ！ あ、あ、あ」
「ゼロ！」

ザフィーラがその足を止めてこちらに呼びかけているのが見えた。ふと視線を下ろす。そこには誰のものか分からない腕が生えていた。

そしてその腕の先にはやや黒ずんだ小さな光り、リンカーコア。そこまで来ると自分の状況がなんとなくだが分かった。

体の力が抜けていく感覚。立っていたくとも激しい脱力感がそれを許さず、膝をついた。

最後に見えたのはクロノと戦った仮面の男。それだけで自分の意識は儚くもとんだ。

A、S 編第7話 砂漠の戦い（後書き）

主人公もとうとう蒐集されてしまいました。

仕方ないじゃない、弱いんだもの。

どこか矛盾点等見つけた方は、もしくは疑問がある方、遠慮せずお聞きください。

明日は数学と建築ソフトのテストだ〜あ〜。

A、S 編第8話 見えない出口（前書き）

最近タイトルを突発的に考えるようになってしまった……

まあいいんだけど、たまに変なの閃くから質悪い……

A、S 編第8話 見えない出口

——暗転。近所の見慣れた通り道。

『あそここの家の家族、不幸な事に事故にあっただんですって』

『あら、いい人達でしたのに……』

『飛行機の事故だそうですよ。知ってます？ 最近ニュースであつた』

『あれですか？ 有名ですものね。不幸な事に』

『冥福を祈るしかなさそうですね。確かお子様を含めて四人家族でしたっけ？』

『父親に母親、それに女の子、三人家族じゃないですか？』

『あら、ごめんなさい』

暗転し、病院に変わる。そこにいたのは親戚。

『ただ一人、長男だけは生き残ったそうだよ』

『そうなの……その子はうちで引き取るの?』
『いや、どうしても家を離れたくないそうだ。今はそつとしておい
てやろう。それまで家から生活費を出してやるつもりだ』
『そう。あの子の名前、なんて言ったかしら?』
『あー、そう言えばなんて言ったかな?』

暗転し、見えたのは見慣れた学校の教室。

『せんせー! この席のやつはいつなったら来るんですか!?!』
『そついえば忘れてたわ。まだ家のほうがごたついているらしいか
ら来れないそうよ』
『名前はなんて言ったっけ?』
『えーと、あれ? なんだっけ?』
『こら! 皆さん! そんな態度をとっていてわその子が悲しみま
すよ!』
『じゃあ先生は名前を知っているんですか?』
『その子の名前は……あら? ど忘れしちゃったわ』
『ははは! せんせーひでー!』

『なえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんはるみが困ってたら助けに来てくれる？』

もちろんだ。絶対に行くさ。

『嘘。お兄ちゃんは助けてくれなかった。私を助けてくれなかった』
そんな事ない、絶対に助けるさ。

『どうやって？ どうやって私を助けるの？ もう死んでしまった私を』

……ごめん。ごめん。

『もういいの。失望しちゃったから。そうしてまたお兄ちゃんは女の子を見捨てようとしてる。私を捨てて手に入れた今の幸せに固執しようとしてる』

そんなことない！ お前を忘れたことは一度としてない！！

『本当に？ なのはさん達と遊んでいるときも？ クロノさんと笑

い合ってる時も？　口でなら何とでも言える』

……それでも、俺はっ！！

『もついいの。お兄ちゃんなんか……………

もついない！！』

「っうああ！！」

悲鳴に似た絶叫を上げ、零弥は飛び起きた。背中には嫌な汗が滲んでいる。心臓の鼓動も激しく、強く。零弥のその目には涙が滲んでいた。

「……………夢？　夢なのか？　嫌な夢……………」

自分に言い聞かせるように零弥は呟いた。
零弥自信、所詮夢とは思ってみても怖くなる。逝ってしまった妹が自分を強く憎んでいるのではないかと。

何も知らず、何も気付かず。零弥を責める人間などいる訳が無い。
事故の原因に気付いた人間はおらず、零弥自身もあの事件の被害者なのだから。

だが、その心がもしもと言う感情を促す。

激しい鼓動がやっとの想いで静かになり、ようやくまともに考えられるようになる。

「……今考えても仕方ないか」

自分の状況を判断しようと辺りを見回した。見覚えのある部屋、と言うよりは造りだ。恐らく管理局。

そしてようやく自分も蒐集されたのかもしれないと言う答えにたどり着く。

試しに片手で魔法弾を作ろうとする。少しばかり光って消えてしまった。憶測は確信へと変わる。

体を動かしてみるとどうも体がだるい。だが何処か怪我をしている訳でもなく、少し安心する。

その時、入り口のドアがスライドし、人が入ってくる。入ってきたのはクロノだった。

「気がついたかい？」

「ああ……なんかデジャブを感じるな」

「君は気絶するのは二回目だからね」

クロノが苦笑いしてそう言った。だがその表情は常のそれより暗い。

「クロノ。俺は蒐集されたのか？」

「君だけじゃない。フェイトもだ。彼女はまだ眠っているよ」

「そうか……詳しい状況を教えてくれ」

零弥がそう言つと、クロノは少しずつ話し始めた。

「そうか……何者なんだろうな、あの仮面のやつ」
「それに関してはまだ調査中だ」

どうも零弥は突如転移してきたそいつに攻撃されたく、リンカーコアを取り出された。仮面の男はそのまま気絶した零弥を放置し、フェイトの方へと向かった。

本当なら情報が渡ってフェイトだけでも無事になるはずだったが、駐屯地の管制システムがダウンし、情報が渡らず、フェイトもリンカーコアを引きずり出された。

そこにアルフも急行したが、既に魔力を蒐集され、シグナムに抱きかかえられていたそうだ。それと共に零弥を抱えたザフィーラが現れ、すまなそうに引き渡したそうだ。

恐らく管制システムがダウンしたのは仮面の男の仲間によるクラッキングと思われるが、どうやったのか分からないそうだ。

それもそうだろう。管理局のシステムにクラッキングなんてまともじゃない。それを踏まえて零弥は一つの答えにたどり着いた。

「クロノ。言いにくいんだが、内部の犯行とは考えられないのか？」
「ありえない！ 管理局員が闇の書の蒐集を促進させてなんの意味があるんだ！」

「だが実際外からの進入は難しいんだろ？ 一番らしいのはそれだと思うが……」

「滅多な事を言うんじゃないよ。ロストログアの管理が目的の管理局がそれを暴走させてどうする」

「……ありえない理由は、どこから来る？ クロノ・ハラウオン」

零弥はいつも以上に顔をしわをよせる。クロノの言い分に納得いかないのだ。まるで管理局が絶対正義のような言い方だ。実際どうなのか。巨大な組織にそれ相応の闇が存在しない訳が無い。

生まれた時からずっと正しいと信じてきたのかもしれない。そう言われてきたのかもしれない。

だが、実際は違う。前にフェイトが六つのジュエルシードを起動させた時、クロノはそれを傍観する事を選択した。組織的に見れば正しい。大のために小を捨てるのは。しかし、そんな確かな犠牲を強いて、管理局は存在している。

確かに犠牲者はいるのだ。隠された歴史の中で仕方ないと言うように。

それでも、人が死んで尚、正義とは語れてしまう物なのだ。

「何処からって……それが僕の知っている管理局だからだ！」

「そうか。ならお前は上っ面しか見えていないな」

「なに！？」

「大のために小を犠牲にする。おお！ 結構な考えだ。お前は歴史の中の小の気持ちを考えた事があるのか？ 大の為に切り捨てられた者たちの想いを！」

「ッ！！」

それは最早怒気としか言えなかった。それに殺気に似た物を含めて

クロノを睨んでいた。

「間違いとは言わない。管理局そのものが悪とは言わない。でもその基盤が人間な限り、悪い人間はいるんだ。それなりに苦しい思いをする人間はいるんだ。お前や俺には想像つかないほどの闇を抱える人間だっているんだよ！」

「……だからと言って、管理局を疑ってどうする！ それじゃ敵が何処にいるか分からないじゃないか！！」

「簡単だ。管理局の中でもあんな動きがある人間は少ないんだろう？ それで闇の書に関連した人物を洗えばいい」

「……………」

「あの仮面の男、意図的に顔を隠しているのは理由があるだろ。テロリストか何かなら顔を隠す理由は普通無い。……いや、まて、変身魔法？ そうだ、あいつら変身する魔法を使っていた！」

零弥は気を失う前に見た仮面の男を思い出す。密着していたからこそ分かった。その違和感。

「待て！ どうしてそんな事が分かる！」

「俺が魔力探知が出来る事、知ってるだろ？ 余りに微力で分かりにくかったけど確かにあの男の全身には魔力が付加されていた。多分姿を偽ってるんだ。……微力すぎて人物の特定は難しいけど、確かに」

「……信じていいんだな？」

「俺はダチに嘘の情報掴ませるほど腐っちゃいないさ」

「分かった。少しは信用する。平行して調べてみるよ」

そう言つてクロノは出て行つた。その表情は決して明るいものではなつたが。

数分後に来た医師に退院許可をもらい、地球へと戻つた。

既に太陽は落ち、時間は夜を迎えていた。

零弥は帰宅すると携帯を取り出し、ある人物にメールをした。数少ない電話帳の中の一ページ。

月村すずかのメールアドレスに。

「……もう、なりふり構つてられないもんな」

あの仮面の男の目的は分からない。変身した姿に仮面を付けるのは恐らく意識を逸らすためだろう。

だが、目的が不明ばだけで狙いは闇の書にあるのは確実だ。つまりシグナム達も主もいい感じに利用されている可能性がある。

ザフィーラは言った。主の為と。なにかあるのだ、闇の書の主には送信したメールが返ってくる。その内容は驚くものだった。

「はやてが入院した……？」

なんて事のない。事態は既に動き始めていたのだ。

翌日、零弥ははやての入院している病院へと来ていた。その手に見舞いの果物を持ち、

——なのは達も一緒に、だが。

「まさか零弥君もはやてちゃんと友達だったなんて」
「なんて言わなかったのよクロ！」
「クロじゃない。別に俺が言っても仕方ないだろう」

すずかが自分の友達としてなのは達に教え、そのはやてが急遽入院
と言っわけだからこうして見舞いにきたのだと言っ。

昨夜すずかに見舞いに行きたいから場所を教えてくれと言っ、何
故か一緒に行こうと言っことになったのでそうだったのだ。断るに
しても理由が浮かばず、結局一緒になった。

午前がバイトじゃなかったら一人で行けたのだが……

すずかの案内通りに道を進む。この病院を訪れるのは覚えているの
で二度目だ。

一度は事故で自分ただ一人生き返ったあの時に……

すずかが一つの部屋の前に止まる。そこにあつた『八神はやて』と
書いてある表札を一度見、その扉をノックする。

少し遅れて聞こえたどうそ、と言っ声を聞いてからその扉をスラ
イドさせた。

「……こんにちは」「……」

「ちわー」

「こんにちは！ いらっしゃい！」

ベッドで体を起こしていたはやては驚くが直ぐに、いらっしゃーいと
笑顔になった。

「やあやあ。突然押しかけてごめんな。あ、これ粗品ですが」
「どこが粗品やねん。ありがとな零弥君」

それからなんだかなのは達の自己紹介が始まったりして零弥は一時空気になる。部屋にいたのがはやてだけなことを見ると、もしかしたら守護騎士は出ているのかもしれない。

半ばはやてを主と決め付けているようで悪い気もするが。

そんな中、零弥ははやての体を、体の中の魔力について調べ始める。

やはりはやては魔力を持っており、再び確信に迫る。だが妙な事にその平均値がおかしいのだ。まるで鼓動のようにはやての魔力は激しく上下を繰り返す。生まれた瞬間消えてしまうかのよう。

（これが、闇の書の主ってことなのか……）

更に言うならその足。前は事故か何かで不自由なのだろうと思い、尋ねなかったが、そこには魔力の残留のような物が感じられる。

それに運動神経が阻害され、その足を動かさなくしているのかもしれない。

（だが、それが主の為になんの関連が……まさか、この残留は闇の

書が原因なのか？　だとしたら……闇の書が主を殺そうとしている？)

だとしたら、と零弥は更に深く考え始める。ヴォルケンリッターが蒐集するのははやての為、はやてを殺さない為と思われる。だとしたら……

「ちょっとクロ！　聞いてんの！？」

「っ！　なんだ？」

「全く。はやてが聞きたいことあるってさ」

どうもアリサは随分馴染んでしまったようだ。それに苦笑いしながらも視線をはやてに向ける。

「なんだはやて？」

「あのな零弥君。零弥君ってホンマは何歳？」

「13歳に決まってるだろコラ！」

「嘘や」。どう見たってギリ二桁の領域やで」

「おま！　気にしてることをホントに言っのな！　お兄さん傷つくぞ！？」

「お兄さんって面やないもん！　もはや弟って面やもん！」
「がーん」

零弥は言葉通りの様子で肩を落とした。そうして皆で笑い合う。闇の書など、今考えるのは無粋だ。今日は彼女の為にしよう。

その為にこうして見舞いに來たのだから。

歸る際、はやては寂しそうに手を振っていた。

こうして入院してる原因が闇の書にあることに恐らく気付いているのだろう。だが、人前では決して泣きはしない。

なのはやフェイトもそうだが、強い。なんで魔法に関わる女の子はこんなに強いんだと若干畏怖の対象として見ながらも、零弥は想った。

何とかする必要がある、と

A、S 編第8話 見えない出口（後書き）

主人公戦えよおおおおおおおおおおお！！！！！！

主人公が弱すぎる件、でもいちよう一般魔道士よりは魔力量が多い設定なんで本当は弱くないんだよなあ。

でも主人公には見えないな、うん。

A、S 編第9話　そして、夢に見た世界（前書き）

期末テストも終わり、今年中の予定は一応消化しました。

ですがやっぱり就職についてがまだ解消されてないのでそのうち更新が滞ってしまうかもしれません。

A、S 編第9話　そして、夢に見た世界

「…………死ぬ…………流石に死ぬ…………」

零弥は目に隈を作り、そして手にはコンビニ弁当の入った袋を持ち、夜の街を徘徊していた。最近はバイトの方も急に忙しくなり、疲れは溜まる一方だ。とは言っても労働条件に不満がある訳ではない。午前みっちり、午後はそれなりまで働いて、それ以降を零弥は訓練に割り当てているのだ。とは言っても未だに蒐集された違和感が消えず、本調子ではないのだが。

あれから数日経ち、この日はクリスマスの前々日、要するにクリスマス・イブ前日だ。特に明日は翠屋のバイトに午後を完全に消費し、休む暇もない。そんなこともあってすっかり休むようにといつもより早めにバイトを終えたが、その後の割り当てはやはり修行だ。休まなければならぬ事も分かつてはいるのだが、何故か無茶をしてしまう。だから今夜くらいはいつもより休む時間を増やそうと思ったがあら残念。晩御飯の材料が切れていた。

「…………クロノは…………クロノで…………調べ物は終わらないし…………シグナム達は…………見つからないし…………明日はバイトだし…………」

ここ最近、なのは達と顔を合わせることなかった。なのは達の学

校が終わる時間が翠屋のバイト終了と重なって直ぐ帰宅するようにしたり、はやての見舞いも一人で行くようにした。

偶然が重なったのか、ヴォルケンリッターの面々と遭遇する事はなかった。だがはやてが楽しそうに四人の話をするものだから気付いてしまったのだ。

因みにそれは管理局含めなのは達にも教えていない。その結果がどうなるか——確信は持てないが——考えたくも無いからだ。

ユーノが無限書庫とやらで闇の書の事を調べているうちにもしかしたらはやての治療法が見つかるかもしれない。でも、見つからないかもしれない。

そもそも彼女らの存在を教えれば間違いなく管理局は捕縛に乗り出すだろう。そうになったらはやては救われない。せつかく手に入れた家族を奪われるように手放し、その上で孤独に逝ってしまうかもしれない。

いつに無く弱気な考えかもしれないが、何をどうしたらどうなるのか複雑すぎて頭が痛くなる。

皆笑ってハッピーエンド、なんてあればこそいいが、なければ必ず誰かが泣く。

でもどうすればいいのか。その稚拙ながら最高の答えを導き出すには大事な物がいくつも足りない。

「…………随分と悩むようになった…………歳かな？」

そう呟いて一人ククツ、と笑う。誰かが聞いてたなら間違いなく否定してきただろう。

寄り道などせず、零弥は真っ直ぐに帰路に着く。道中ふらふらとまるで酔っ払いのような足で。

明日は、特に大忙しだ。

「……だからってわざわざ叩き起こしに人よこしますかい？」
「貴方が寝坊しそうだったからつい、ね」

前言撤回、やっぱり少し文句があるかもしれない。

気持ちよく眠りについていたと思ってたら頭がガンツ！ 殴られ、目の前にはうんざりした顔の恭也さん。ホントに、なんで俺が、と言った感じに。

忍さんとの時間を阻害してごめんなさいと言ってみると顔を赤くして殴られた。その時の一撃は流石に記憶が飛ぶかと思った。

とりあえずアレだ。なのは後で覚えてるあのヤロー。よくも恭也さんに合鍵（定価2千円）を渡しやがったな。こんなことで一体誰が幸せになると言うのだ。

今回のバイトはいつもと違って仕込みから手伝わなくてはならないようで、朝っぱらから大忙し。こんなことならもつと肉食つとけばよかった、なんてぶつくさ言っていると土郎さんに殴られた。これで殴られるの何回目だろう？

それでいて開店するかと並んでる並んでる。もの凄い数だ。これからこのお客様方を相手にすると考えると中々骨が折れる。他の店員達も早くも疲れた顔になっていたが、まんざらでもなさそうだ。

—— 去年のクリスマススを思い出す。

家族を失って間もなかったからただ一人で布団に包まった冬。クリスマスだろうが元旦だろうが例外はなかった。正直、寂しくて死にそうだったのを覚えている。ウサギも寂しくて死ぬと言うが、あんな気持ちだったのかもしれないと今なら思う。

町を歩いて家族と手を繋いで歩く子供すら妬ましいとも感じた。今

考えると大変恥ずかしい過去だが。

その時ばかりは自分は世界でもっとも不幸だと錯覚もしていた。だが実際はどうだろう？ フェイトは？ はやては？ 比べるつもりなどはないが自分の考えは一気に否定された。

不幸の背比べなんてするもんじゃない。しても、その分自分が悲しくなるだけだ。

それに今はこうして自分もフェイトも、日常に幸せを見出している。なら、はやてだってきつと、絶対に……

「零弥君。このケーキを届けてくれないかしら？」

「これ……翠屋の限定ケーキ。誰にですか？」

「ふふ……貴方の友達の分よ」

そう言った桃子は優しく微笑んでいた。零弥は驚いてその顔を見上げる。

「え……でも俺、仕事が終わってからって」

「届けるのは早い方がいいでしょう？ なら遠慮せず今持って行きなさい」

二人が言うケーキは零弥が頼んで予約したはやてへ持っていくためのケーキだった。友人のため、と言うと軽く引き受けてくれたが、もらうのは仕事が終わってから、と言うことだった。

もっとも、仕事が深夜までと言つのは後に聞いた話だが。

「分かりました。ありがとうございます！」

桃子に対して頭を下げると、その手にケーキを入れた箱を持って翠屋を飛び出した。病院までは少し遠いが、このくらいならやってこそ友人だろう。

コンコン、と中に聞こえる程度のノックをし、返事を聞いてからそのドアをスライドする。中にはいつも通り、ベッドで体を起こしたはやてが驚いた様子でこちらを見ていた。

「よう！ 暇だから見舞いに来たぜ」

「いらつしゃい。ありがとな。そんでその手のは？」

「おう！ 見て驚け……じゃじゃーん！」

興味津々な箱をパカッと開けてやる。中に入っていたのは1ホールのクリスマスケーキ。見る限りホイップクリームがたっぷりと塗られたやわらかそうなケーキで、上に乗ったチョコには『Merry Xmas』とデコレーションされている。

「うわー！ すっごいなあ！ これ買ってきてくれたん？ ありがとうー！」

はやては目を輝かせて喜んだ。それはやはり闇の書などに体を蝕まれている人間の顔には見えない。なんて言うと思いがちだったが、零弥も満足げに笑うと近くの椅子を引いて隣に座った。

（……さらば。俺のバイト代……）

涙だけは内側にとどめるようにして。

と、はやての顔が暗くなっていることに気付き、零弥は首を傾げた。先の喜びようを見る限り、ケーキに不満があると言う訳ではなさそうなのだが……

「どした？ どこか痛いのか？」

「うつん。そうやないんやけど……聞いてもいいかな？」
「俺が答えられる範囲でよければ」

はやてがなにやら苦しげ、と言うより自分えを卑下するような顔になりながらもこちらを真っ直ぐに見た。数秒沈黙を挟んで、ようやくその口を開いた。

「なんで、うちのお見舞いにこんなに来てくれるん？」

また数秒、沈黙を挟む。時が止まったようにも感じられた。

「なんでって……暇だから」

「真面目に答えてくれへん？」

瞬時に嘘を看破され、零弥は少し顔を歪める。いやな表情と言うよりはしまったと言った感じだ。

「……はあ……俺さ、家族、いないんだ」

「……………」

「つい最近、事故で失ってさ。なんつーか、世界で一人ぼっち、みたいな感じでさ。やる気もなんもなくなって、学校も行かなくなつて、俺はなんでいんのかなあ、なんて思ったりしてな。それで……」

ポツリポツリと話し出してみると、零弥は自分でも驚くほど言葉が出てくるのに気付いた。自分ではただはやてが心配だからと思ってきたのだが、そうでもないことに気付いて愕然とした。

「でも、なのはやらすずかやら。気付いたら友達がいて、いつの間にか満たされているような気がした。でも、そうでもなかったんだ。何か大事な物を忘れてるような気がして、毎度気付いたらここに来てた。足りない物探して来続けた。……今、ようやく分かった」

「……どうして？」

「友達として一緒にいてやりたい。一緒にいたい。そんで、いつかは皆で笑えるようになりたい。そして、俺はお前を——」

最後に何を言おうとしたのだろうか？ それは本人の心しか知らない。恐らく、再び誰かが問いだすことも無いだろう。

何故なら、言葉を発する前にドアがトントンとノックされたからだ。

「主？ 入ります」

聞き覚えのある声。零弥は驚きながらもそれを表情に出さぬよう必死だった。ガラガラと開かれた扉、その王に見えたのは見覚えのある三人。

シグナム。シャマル。ヴィータ。皆私服ながらも間違いない見覚えのある顔だった。ザフィーラはいなかったが、恐らく人型があれだからだろう。

シグナムはムツと人目見て顔を思い出そうとし、シャルは会ったことはないはずなのにあらあらと歓迎の笑みを浮かべ、ヴィータに關しては不審者を見るように睨んでいる。

「シグナム！ ヴィータ！ シャマル！ 話したよな零弥君？ シグナムには会ってると思うけど赤い子がヴィータ。そっちの人がシャルや」

「……ああ！ はやてから話は聞いてます。初めまして。黒野零弥です」

はやては先程までの様子は何処に行ったのか、ニコニコと家族を紹介し、零弥はあたかも初めて会うように笑顔で礼をした。

しかし、零弥の声を聞いたヴィータの顔が歪む。確かにヴィータとは直に会話をしたが、まさか覚えていたのだろうか？

ともかく零弥の自己紹介を聞いたシグナムはああ、と言った顔になり、シャルはニコリと笑って一歩前に踏み出した。

「初めまして。シャルです。はやてちゃんから話は聞いてますよ」
「へへ。因みになんと？」

「弟と兄を足して二で割ったような人だと」

「よし、はやて。詳しく話を聞かせてもらおうか？」

「じゃ、シャル！ 言ったらあかんで！」

ごめんなさいと笑うシャルをはやては恨めしげに見る。零弥もにやりと笑いながらはやてを見る。それからハッとしたように零弥の持ってきたケーキを指差した。

「そ、そや！ 零弥君が持ってきてくれたケーキがあるんや！ 皆で仲良^{なかよ}う食べようや！」

さて、それに対する答えはと、そう思いながら振り向くと三人の表情は打って変わっていた。

シグナムは無表情の中に警戒を潜め、シャルは先程お変わってないように見えて少し笑みがぎこちない。ヴィータに関しては親の敵^{かたき}を見るような目だ。

恐らく、念話で話が伝えられたのだろうと思った。そうでなければこつも変わらない。元々会話しただけと言う訳で確証には至っていないのだろうが、ヴィータに見るとそれだけで決定らしい。

もし会話したのがヴィータでなければまだ心の中で怪しむだけで済んだだろう。もっとも、ザフィーラがいたなら匂いで嗅ぎ分けられそうだが。

「さ、てと。じゃ、俺はそろそろ行くかな」

「え？ まだ来たばかりかやん」

「いや、でも……家族との時間を邪魔しちゃ悪いじゃん？」

「でも、零弥君。帰っても家族おらんやろ？」

はやてに背を向けて会話してたのが少しまずかった。無意識に顔を歪めてしまったのだ。それもシグナム達の方を向いたまま。

それを聞くと驚きやらなにやらの言葉を失った様子が見受けられた。はやてにしてみれば悪気もなにもない、ただ引き止めるだけの理由だったのだから。だが、それに素直に反応してしまうのは、ガキだからだろうか？ 昨日は歳をとったなんて思ったのに。

「あゝ、実はほら、俺さ。この後用事があるんだよ。だから……」

ドアがトントンと再びノックされ、零弥の頬を冷や汗が流れる。

——不幸には不幸が重なると、誰かが言った。

聞こえた聞き覚えのある声、こんにちは、と丁寧ながら友達に当てるような声。どう考えてもすずかの声だった。

（待てよ……まさかなのは達も一緒か！？ ダメだダメだダメだダメだ！）

カラカラと開き、入ってくる四人。悲しい事に願いは聞き届けられなかった。制服のところを見ると家には帰らずそのまま来たのだろう。なにやら手には布で隠したなにかを持っており、零弥を見た瞬

間あつ！ となる。

ただ、それはすずかとアリサだけ。なのはとフェイトは目を見開いて零弥とはやて以外を見ていたが。

（しまったー！ーっ！！）

本来なら頭を抱えて叫びたいところを、よ、よお！ とわざわざ気さくに返事した。

「クロ！ あんたバイトなんじゃ！？」

「あ、ああ。特別な休みを急にな。で、ケーキを持ってきたんだ」

「そうだったんだ」

「まるで計画性がゼロね。あんたの名前通り」

「か、関係ないだろ！？」

いつもより声を荒げてしまったのは言わなくとも分かるだろう。零弥のデバイス、ゼロは自分の名前から取ったものだ。そしてデバイスの名前を偽名のようにした。本名を知っていたなら安直を笑いそうだが、今は笑ってなんていられない。

友人の手でその名前を暴露されたのだ。察したのか、再び零弥への視線は鋭いものになる。

（ああ、もう……どうなるんだよ……クロノヘルプミー！！）

この状況からして、この後の展開がどうしても見えたりするが、
弥はもうため息をつくしかなかった。

A、S 編第9話　そして、夢に見た世界（後書き）

相変わらず無理矢理感あるな、と自分の文を見直しております。

運やらなにやらでヴォルケンズに会わないなんて普通ありませんよね。

因みにシャルマルが最初ニッコリしたのは覗き見して顔を知ってたから。

A、S 編第10話 悲しみは繰り返す（前書き）

妙にシリアス満天な回になるでしょうが願わくば笑わずに読んでや
ってください。

A、S 編第10話 悲しみは繰り返す

日も落ち、時間が遅くなる。

空は今にも崩れそうな程濃い雲によって覆われ、天気がよいとは言いがたい。

「やっぱこうなっちまうのか……」

零弥はガツクリと顔を抑えた。そこは病院からは少し離れたビルの屋上。シグナム、シャマルと向かい合うようになり、彼の隣にはなのはとフェイト。

「はやてちゃんが闇の書の主、なの？」

「……ああ、どうもそうらしい」

なのはの表情は悲しげだ。友達だと思っていた人が敵の総大将的な存在だったのだからそれも仕方ないのかもしれない。フェイトも似たような表情だ。

だがこの中でもっとも表情を歪めている人と言ったら零弥だろう。空元氣すらも見受けられないほどにその表情は暗い。

「ゼロ。お前は主はやてが闇の書の主と知って近づいたのか？」

「……否定はしない。初めてはやてを見たとき、あんたも一緒だったからな。戦うときにあんたを見てまさかと思って思った」

「なら、何故管理局に報告しなかった？」

「それではやてが幸せならそうしたさ。でも、違っただろ？」

零弥の言葉に嘘偽りはないと思ったのかシグナムは目を閉じて考えるようにした。その間にもこの険悪な空気は流れる。

「……悲願はあと僅かで叶う」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも！」

「そっちの悲願ってのは闇の書に侵食されたはやてを助けることか？」

それを聞いてシグナム達の表情が歪む。どうも間違いではないようだ。零弥はふっ、と笑みを零した。

「やっぱりそうなのか……お前達はずっとはやてを助けるために……」

「……」
「どういふことなの零弥君？」

「はやての足は闇の書の侵食が影響だったんだ。そしてこの入院。どうみても悪化してるとしか思えない。……どうにかしなければ、はやての命は削られるばかりのはずだ」

「でも！ ダメなのそれじゃあ！ だって——」

なのはの言葉を遮るように頭上に影がかかる。ハッとして見ると、

アイゼンを振りかぶったヴィータが落ちてくる。

「なのは！」

「えっ！？ きゃあああああ！！！」

ギリギリ障壁は作れたようだが、衝撃で吹っ飛び、屋上の隅の柵に背中を打ち付ける。

更に横を見るとシグナムがフェイトに向かって抜刀していた。

「やめろ！ 今俺達は戦う為にここにいるんじゃない！」

「管理局に知らされては困るのだ！ シヤマル。ゼロの相手を」

「っ！ シヤマルさん！」

見るとシヤマルの服装戦闘時の服に変わっていくのが見えた。それが示す意味は。

零弥の周りを緑のわっかが囲む。バインドだ。だがなんとか捕まる前にその場を飛びのく。尚も現れるバインドを発動したゼロで切り払う。一瞬気を抜いたらやられるため、闇の衣の展開もままならない。

「やめよう！ 俺は馬鹿だから分かんねえけど、何か戦わないですむ方法があるはずだ！」

「ダメ。もう、止まらないのよ！」

「っ！！ 分からず屋！！！」

零弥は一瞬の隙を突いてシャルに特攻する。今シャル念話妨害等で別に力も使ってるらしく、何とかそこに突け込むしかない。

「ゼロ！ デモンズランス！！」

振りかぶったゼロはどう見てもシャルには届かないように見えたが、刃だけが延長され、それで横から凪ぐようにする。完全に不意を突かれたようで、シャルは避けれない。

とつた！ その考えはそのコンマ一秒後に否定される。自分の体が青いバインドに捕まっていくのが見えたからだ。何がなんなのかわからないまま足はもつれ、転倒する。

「なのは！ 零弥！」

フェイトの声が聞こえ、うつぶせに転がって上を見てみるとなのはもバインドに高速されていた。フェイトはシグナムと武器を合わせていたが、飛びのき、辺りを警戒する。

と、その時零弥は覚えの無い魔力を感知する。

「フェイト！ あそこだ！」

「うん。プラズマランサー！！」

叫び、ある空間を顎で指す。そこにはなにもない。だがそれこそ誤りだ。

フェイトが魔法を放つと、そこに壁でもあるかのように魔法は爆発する。そこに向かって飛び掛ったフェイトはその手のバルディッシュを一閃する。

するとまるで滲み出すかのように空間が歪み、一人の人間が現れる。いつもながら最悪の仮面の男が。

「……この間のように、いけない！」

フェイトはバルディッシュを構えて飛び掛る。向こうも先ほどの一撃で怯んでいた。だからこそ行けると確信していた。

何処からとも無く、仮面の男がもうひとり現れるまでは。

攻撃をしようとしたフェイトの不意を完全に突き、ビルの上に蹴り落とす。激突する直後に体勢を立て直そうとしたがバインドされ、身動きが取れなくなる。

「もう一人だと……ッ!？」

二人の仮面の男はこちらを見下ろすようにし、その顔は見えずとも

狙い通りと笑っているように感じた。

片方が魔法陣を展開し、その周りにクロノが持っていたようなカードが浮かび上がる。

次の瞬間にはシグナムを初めとした三人までバインドにかけられていた。やはり、こいつらの狙いは完成した闇の書にあったのだ。

いつの間にか、闇の書はフェイトを蹴り落とした方の仮面の男の手の中にあつた。

まだ、完成していないはずなのに。

「まさか……よせ!!」

次の瞬間にはシャルルの、シグナムの、ヴィータのリンカーコアが引きずり出されていた。

なんてことのない。今ここにいる守護騎士達の魔力を蒐集しようと言っただ。だが彼らは闇の書の魔力で作りに出された擬似生命。そんなことをされたりしたら。

闇の書が嫌な光を発し始める。魔力が蒐集されていく。目の前にいたシャルルの体が消えていく。苦しげに、悔しそうに呻きながら。

「シャルルさん! シャマルさん!!」

その姿が消え、後に来ていた服だけが風に流されて落ちた。消えて、いや、消された。

次に聞こえたのはシグナムの呻き。少しずつ消えていく。

それを見て零弥は自分の中でなにかが崩壊するのを感じた。

はやてが笑ってられるように、シグナム達と一緒に、その為にこうしてきたと言うのに……全てを粉々に打ち砕かれた気がした。

「シャマル！ シグナム！ なんなんだ……なんなんだよテメーら！！」

ヴィータの声が聞こえた。悲鳴に近い叫びだったと言える。でも、そんな声すら零弥にはかすかにしか届かなかった。

「プログラム風情が、知る必要はない」

静かな声だった。それこそ、耳を澄ませなければならぬほどに。しかし、確実にヴォルケンリッターと言う存在を、彼女らの想い、魂を無下にした言葉。

「——んだと？」

それを聞いて零弥は立ち上がる。バインドなど知ったことではない。全てを切り伏せ、立ち上がる。

「バカな！？ 四重のバインドをいともたやすくっ！？」

「知ったこっちゃねえんだよテムエらの都合なンてよ。知りたくもねえンだよ。小さな子供の家庭ぶっ壊して、楽しいか？ 楽しいってんなら……」

零弥のその身を闇が包む。その目は空っぽだった。大事な何かが詰まっていたはずなのに、今は。

「お前ら、殺す！！」

零弥が吼える。汚された。彼女らの存在と魂にせめて報いるためにも。その手のゼロを血が滲むほど強く握り締め、その奥歯を砕けるほど強く噛み締め。

零弥の周りを青いバインドが囲む。その数は先程の五倍近く。だが、

だからなんだ？

「失せろ」

その一言で漣さざなみのように消えていく。その種など一瞬見ただけでは到底分かるものではない。

一歩、一歩。糸が切れかけた人形のように、零弥は向かっていく、その歩みはなんと遅いことだろう？　だが仮面の男達にはそれが死刑執行までの時間にも感じた。

「この世から抹消されるーーーーっ！！」

零弥の両の肩から闇が発射される。生憎と速度は遅い。避けられてしまう。

それでもそこにいる者全てが戦慄する。

ここにいる、この生物の名前はなんだ？

「ッ！ 援護する！ やつを叩け！」
「分かった！」

仮面の男は初めてそうしてまともな攻撃を繰り出す。

それでも繰り出されたバインドは消され、対空攻撃のような闇で近づくこともままならない。

化け物、その言葉が頭を過ぎった。

そうして苦肉の策にも近い、最終手段をとる。

「おい！ こいつらがどうなってもいいのか！？」

バインドに捕まったなのはとフェイトの首元にカードが添えられていた。非常に鋭利なのか首元からは血が滲んでいた。

「——クソが」

そうして零弥は足を止める。顔は見えないが、間違いなく憎憎しげになっているだろう。

次こそはバインドは消えることなく、零弥の体を闇ごと拘束する。重ねがけにしてもその数はおおよそ二十はあるだろう。更にそれでは足りないのか、身動きの取れない零弥を殴りつける。

何度も、何度も。

「——やめて！ やめてよ！」

なのは声が耳に入った。その姿はぐるぐる回る景色で見えなかったが。

ふと視線の端にバインドをされたヴィータの姿が見えた。その目は恐怖にも信じられないようにも見えたが、零弥は心の中でただすまないと謝ることしかできない。

やがて、脳震盪でも起こしたのか何かなんだか分からなくなる。その身の闇は気付けば消えていた。口からは血反吐を吐き、その目は虚ろだった。

ボロボロの零弥を投げ捨て、仮面の男は蒐集の続きを始める。

ヴィータが蒐集されていくのが見えた。だがザフィーラが現れるのも見えた。なんとか一撃を加えたようだが気を失い、ビルの屋上に落ちる。

ヴィータが礫はりつけのようにされ、仮面の男達はなのはとフェイトをクリスタルケージに閉じ込める。

もう首すら動かなくなってきた、ゴロリとうつぶせになると、そこに魔法陣が浮かび上がり、誰かが転送されてくるのが見えた。

病院にいた姿のままのはやてだった。もうその首は動かないが、はやてが何か言っている姿は見えた。ふと、はやてがこちらに気付く。やはり、何かを必死そうに叫んでいたがこの耳には届かない。

やがて、悲痛そうに、涙を流しながら何かを懇願する姿が見えた。

何とかしてあげたいとも考えた。だがそうにも体は動かない。

やがて、はやてを中心にベルカ式特有の三角魔法陣が発動される。それが白から黒に変わると強い光が発せられた。

それから前は見えなくなった。何も感じなくなった。

A、S編第10話 悲しみは繰り返す（後書き）

主人公の秘められし力発揮！　って感じですが実はそうでもありません。

ご存知の通り、零弥は闇の衣を形成する黒い物体（？）を自由に操れるわけです。

戦闘では手足しか使っていませんが、別にその場所以外から出せないわけじゃないのです。

つまり、バインドはその締め付けられている部分から闇を出し、迎撃にはそれこそ目に見えないような速度で叩き落としたに過ぎないと。

……ですが、結局負けてしまうのは零弥クォリティーですね。

A、S 編第11話 ココロノキオク（前書き）

最近担任の先生に石ころを見るような目で見られた。

A、S 編第11話 ココロノキオク

——黒野零弥と言う少年はそれなりに平凡な少年だった。

自分を愛してくれる両親に自分を慕ってくれる妹、一緒にいると楽しい学校の友達。

勝ち組負け組云々の言い方はあまり好ましくないかもしれないが、間違いなく少年は正しく、楽しい道を歩いていただろう。

あの事故が、起こるまでは。

アレが全てを奪い去り、アレが少年と言う存在を壊した。

もしもの仮定もなく、それがただ一つの真実だった。

自分と言う曖昧な存在に翻弄されながらも、誰かと言う他人の為に行動する少年を否定することは、また他人にはできない。

(……とうとう死んだか?)

何も感じられないその世界に沈みながら、疑問にしては突拍子もないことを零弥は思っていた。見る、と言う概念すら存在しないのか、目前は闇一色だった。それとも単に瞼が開かないだけなのか。

後悔やら悲しみやらが訪れる前に思ったのは残してしまった少女達

への謝罪。仕事を残してすまない。後は頼む、と。

ふと闇の中に一筋の光を見た。それが終わるか、それとも始まりなのか、それを知るのは直ぐ後の事。

「起きなさい零弥！」

「っ！？」

聞きなれた。しかしもう二度と聞くはずの無かった声が鼓膜を通して頭に響く。それほどまでに響く声を出した人物を責め立てる事はせず、静かに体を起こした。

——母が、そこにいた。

「はっ！？ え？ なんで……」

「何ぶつぶつ言ってるの。寝ぼけてないで起きなさい。今日は初詣はつもうでに行かなきゃならないんだから」

「初詣って……」

目の前の存在が幻や幻想と呼べるほど儚いものには見えなかった。夢にしても意識ははっきりしているし、自分が寝ていたのは自分の部屋。

頭をひねっても到底答えは出そうになかった。不快には思わなかつ

た。

「起きてないのはアンタだけよ。 るみもお父さんももう食べたんだから」

「父さん……るみ？」

夢にも思わなかった。（実際に夢かもしれないのは割合するが）再び誰かの声から妹の名前を聞くことになるなんて。

「お兄ちゃん！」

「あ……」

騒々しくも部屋のドアを開け、部屋に入ってきた者。もう二度と会はずもなかった。もう二度と聞くはずもなかった。守りたくて、でも守れなくて。

そんな、妹、るみがそこに立っていた。

きょとんとして自分の顔を見る零弥に向かって首を傾げた。

その瞬間、零弥の目から呆気ないほど簡単に涙が溢れ出した。

それを止めようとは思えなかった。止めたいとも。ただ、今は感謝で心が潰れそうだった。

「ご馳走様でした」

「はいはい。お皿持っていておいてね」

朝の食事を完食し、耳に届いた声に再び嬉しくなる。

考えず。今は目の前の好物に食らいつくように幸せを噛み締めた。

「お兄ちゃん！」

「ん？ どうしたるみ」

「悲しい事でもあったの？」

「ううん。どうしてだ？」

「朝、泣いてたから」

ああ、そうか。と零弥はそれを聞いてニッコリと笑ってるみの頭を

撫でた。悲しいことなどありはしない、今あるのは、幸せだけだ。

「驚かせてごめんな。でも全然悲しくなんかないよ」

「ホントに？」

「ホントに」

それを聞いてパアッ、と笑顔になるみに体が温まるような思いを感じながら、零弥はただひたすら心の奥の不安を隠そうとしていた。

「参ったな……」

「お父さんとお母さん何処にいったの？」

迷子、と言つより置いてきぼりだ。いそいそと何を急ぐのか。行列の神社の階段を少しずつ上っていく。そこはとても景色がよく、上から見える海はとても綺麗なんだそうだ

「？ お兄ちゃん、どうしたの？」
「いや……なんでもないよ」

神社への石段を一步、また一步と進むたびに自分の足が上手く動かないことに気付いた。まるでこの先にある何かを見るのを拒絶するかのような、そんな感じ。

もう直ぐ到着、と言うところで冷や汗まで出てきた。思わず引き換えそうになった。

「手、繋ご？」

「……ああ。そうだな」

そうして縋るように握り締めた妹の手は温かく、とても幻想とは思えない感触だった。そして、それは零弥の足の進行を妨げる何かを抑え、前へと進ませた。

上りついた神社はなんてこともない、何処にある普通の風貌の神社。何がそんなに怖いのだろうか？ 到着して尚、零弥は逃げたい衝動に駆られていた。

「遅かったわねあなた達」

「か、母さん達がずんずん先に行くんだろ！」

「もう、しょうがないわね」

零弥は二人を見上げた。父と母、（特に父は）口数が少ないが、それでも二人が自分やるみを愛してくれているのは言わずとも感じていた。ずっと、その愛情に包まれていたいと思った事もあった。

でもいつかは終わるからと決め付け、自分から両親を遠ざけるようにした。それをあの時は酷く後悔したのも覚えている。

家に帰ってきて、それでもまるでお祭騒ぎのような雰囲気は消えたりしなかった。クリスマスでもないのにテーブルに置かれたクリスマスケーキに手をつけ、家族と楽しく談笑する。

「お兄ちゃん！」
「ん？」

「遊ぼ！」

言うが早く、零弥は妹の小さな手に引つ張られていく。まんざらでもないような情けない雰囲気まで見て取れる表情で。

だがそれは、数秒後凍りついた。

妹が連れてきたのは一つのドア。そこでまた神社の時の様な足が重くなるような感じが零弥を襲う。

るみはいつまで経ってもそのドアを開けない零弥を見て首を傾げた。

「どうしたの？ お兄ちゃん。るみの部屋に入らないの？」

妹、るみの部屋。同じ家の同じ屋根の下の一室。零弥はそこに行くのが怖くて仕方なかった。その理由はどうあっても分かりはしなかった。

だが、嫌がるその体がなんとなく気まぐれにもその答えを教えた。

「るみ」

「なあに？」

「夢、なんだよなあ、これ」

零弥は虚ろな目で目の前の扉を見ていた。その返事は聞こえなかった。しかしそれに戸惑っているような様子は無い。まるで嘘がばれてしまった様なそんな感覚。

「バカだよなあ。俺。一時でもアイツらの存在を否定しちゃった」
「……そうでもしなきゃ、こうしてはいられないはずだもん」

妹の声は兄が知るものより大人びて聞こえた。でも、それはそうと聞こえ、否定しがたい妹の声。

「いいや、俺は臆病な寂しがり屋だ。神社の時はすっかり忘れてた。命を救われた場所だったのに」

両親が生きていて、魔法なんて存在しない世界を現実とし、両親がいなくて魔法がある世界を幻想に仕立て上げた。
ファンタジー

それは三者からすればまともな選択に聞こえるだろう。

だが違う。実際は現実が幻想で幻想が現実だった。

なんてことのない、家族がいない世界と言う厳しさも、辛さも、痛みも、向こうにはある。

でもこつちには幸せしかない。辛さが無い、何も得られていない。

「ごめんなるみ。お兄さん行かなきゃ」

「行つて、どうするの？ 夢から覚めたら痛いし悲しいよ？」

「痛くても、悲しくても、お兄さんだからやらなきゃダメなんだ。逃げちゃダメなんだ」

「いいでしょ。怖いから逃げても、孤独から逃げても。苦しんだ結果助かるのはお兄ちゃんじゃないよ？」

「でもさ、今逃げたら一生逃げ続けた。それだけはどうしてもヤダ」

零弥は膝を折り、るみと視線の高さを同じにする。その目は恐らく悲しいんだろう。それがまた零弥の心を責め立てる。でも、これ以上歩みを止める訳には行かなかった。

「いつかきつと、乗り越えてこの部屋に遊びにくるよ。絶対だ」

「……ホント？」

「ああ、俺が約束を破ったことあるか？」

そう言うとするみはふると首を横に振った。守れなかった事に関してはお咎めなしのようだ。

だが、だからといってその心を蝕むことがなくなるのは一生無いだろう。

るみはその頬に雫を流しながら右手をこちらに差し出した。十字架のキーホルダー、零弥のデバイス、ゼロ。

それを見て零弥はるみの頭を撫で、それからゼロを受け取った。

名残惜しくない訳が無い。でも、このままじゃ幸せ過ぎて辛いから。何も出来ないまま終わるのだけは嫌だったから。

最後に見えたのは涙に濡れながらも兄に向けてくれた満面の笑み。

そして、再び世界は閉じた。

何も無いように感じるその世界で零弥はもしかしたら泣いていたのかもしれない。叫んだのかもしれない。

本人すら分からなかった。でも、確かに言えたのはその言葉。

『ありがとう』

A、S 編第11話 ココロノキオク（後書き）

零弥の理想、心の記憶ってやつですね。

恐らく言わずとも分かると思いますが、零弥は気を失った直後に闇の書の意味に取り込まれました。

まあ、それが何故なのかはまた次回……

A、S 編第12話 兄貴分の決意（前書き）

何処まで行っても主人公（零弥）は主人公（零弥）ですね。

さて、今回も盛り上がって生きましょう！

A、S 編第12話 兄貴分の決意

暗闇から目を開くと、次にそこにあつたのは決して明るい景色ではなかった。

時刻は先程と変わらないようで、星が空を彩っていた。

そんな空の下、漆黒の翼を二対広げ、まるで執行者のようにたたずみ、こちらを見下ろす一人の女性がいた。

「……貴方は」

「ん……何処かでお会いしましたか？」

零弥は首を傾げ、女性の顔を見る。

銀の髪に赤い目、頬には赤い線が引かれ、黒いゴシックドレスのような鎧を身に纏う。そして、彼女の周りには禍々しい闇のような魔力、その手には闇の書。

「……何故、夢の中なら貴方は苦しまずに済んだのに？」

「あれを見せたのはアンタって事か？ なら一先ず、ありがとう」

零弥はニツコリと笑って感謝を述べた。すると女性はその表情こそ変わらないが、意表を突かれたようになる。

「どうして……礼を言うんだ？」

「……夢を見せてくれた。幸せな夢を。ほんの一時でも、俺は俺らしさを取り戻せた。だから……」

「零弥！」

「零弥君！」

後ろから聞こえた声に零弥は振り向く。そこにはデバイス等を解放した戦闘態勢のなのはとフェイトがいた。

「おお！　なんだかんだでやっぱり無事か」

「零弥君、今まで何処に？」

「ぐっすりすやすや夢の中、って感じたな。待たせて悪い」

零弥は大して悪びれた様子もないように頭を掻いた。二人からなにやら呆れた雰囲気を感じるが、今はこうして会えただけでよかったとしよう。再び銀の髪的女性を振り返る。

「さて、それで、やっぱりアンタは闇の書の関連者？　はやては何処に行ったんだ？」

「……主は私の中で穏やかな永久とわの夢を見ている。私は主の望みをかなえる者」

「ふん。で、その願いとやらは？」

「この世界を、主の愛する騎士達を奪った世界を夢にすること」

「……平たく言って、世界滅亡って事か？　そりゃ随分飛んでるな」

零弥は今度は困ったような表情で頭を掻いた。当然、この世界を生きた人間として受け入れられるものではない。ならばいい案があるのか、と聞かれれば何とも言えないが。

「……しかし、貴方は別だ」

「そりやまたなんで？」

「貴方は常に主の幸せの為に行動していたことは同化した騎士達や主から感る。貴方を殺せば主が悲しむ」

「はやてが悲しむ、か。なんか話せば分かりそうな気がするんだけど、対話って考えは？」

「私は主の願いを叶えるためにここにいます。そこをどきなさい」

零弥は首だけを後ろに向ける。そこにいるのはなのはとフェイトのみ。アルフとユーノは結界内にいるようだが随分離れた場所にいる。それ以外の反応は感じられない。

つまり、彼女の目的はなのはとフェイト、と言うことになる。

「ここを退く事と主の願いを叶えることになんの関連性が？」

「そこにいる二人は主の愛する騎士達を奪った。ならば、永久の闇を」

「いやゝな勘違いしてないか？ 俺の知ってる二人は傷はつけても奪いはしないよ？ やったのはあの仮面ツインズだろ。ああゝ、言ったらなんかムカついてきた」

そう言えば先程大分蹴られたりしたはずなのに傷がなくなってるな
く、と暢気に思った。流石にその空気を他人に伝えるのは不可能だ
ったが。

「ともかくだ。世界を夢にされるのも困るし、こいつらを闇に落と
させたらお兄さんの威厳が減るし、恩を仇で返すようなまねをした
くもない！」

「……貴方を殺したくはないのだが」
「勝手に人を値踏みするな。早々俺は死なねえぞコラ」

零弥は手のひらのゼロを起動する。殺すと言う選択肢は存在しない。
バッドエンドなんて終わらせ方も好きじゃない。皆が笑ってめでた
しめでたしなんて、所詮幻想かもしれない。

分からないことだらけ、でも決して妥協はしたくないから。

そして何より、救わない選択をしてそれを背負いたくなんてないか
ら。

「ただつこにはお兄さんのお説教タイムだ。お前も助けてはやても
救う。それで万事解決——！」

「……そんなことができるんでも——」
「出来る出来ないじゃなくて！ やってみせてこそのお兄さんだ！
！」

零弥はその手のゼロを強く握り締めた。

「ところでこの周りの噴火やらうねうねしたのはなんだー！ーっ
！！」

零弥は襲い掛かる火柱を避け、砂漠にいた怪物に似た虫を叩き斬り、
先程あんなに豪語しておきながら早くも泣き言をほざいていた。

余裕の表情（表情に変化はない、雰囲気）でこちらを見下ろす女性
は今限定で憎らしい。

「なのは！ フェイト！ でかいの頼む。足止めは任された！」

「れ、零弥君！？」

「おおおおおおおおおおお！ー！」

ゼロを掲げ、突撃する。芸がないと言われかねないほど攻撃パターンは単純だが、零弥とて無策で攻撃している訳ではないだろう。

「頑張つて30秒は持たせるからあああああ！」

訂正。やっぱり何も考えてないらしい。

世の中やる気や気合で何とか出来るならそうする。だがその選択ができない人間のほうが多いのだ。実際、零弥はその選択ができない側の人間だ、が。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラ!!」

「つ！！早い……」

弱い、だからこそ強くなれる。例えば戦闘中だろうと強くなる。状況を判断する能力だけは気配り精神から高かった。

まるで闇がそれよりも濃い闇に消されるように、二つの黒い閃光は空を駆けていく。

何度もゼロを打ち付ける。しかし、ダメージは皆無と言えるだろう。一撃の重さが軽い零弥は絶対不利。重いだけの攻撃ならなくはないが相手が早すぎて捉えられない。

情けなくも他人を頼る以外の選択肢は持ち合わせていないのだ。

「デモンズランス！」

「ダークインパクト」

相手に向かって伸びるゼロ。間一髪と言ったように突き出した拳に阻まれるが、伸縮は止まらない。捉えられた女性はゼロに押されて遠く離れていく。

「サンダースマッシュャー！！」

背後から聞こえたフェイトの声。振り向く間もなく零弥の真横を巨大な雷の槍が通過する。ちよつと冷や汗が流れた。

だがそれは難なく止められてしまう。威力不足など零弥が言えるものではないが、やはり足りない。

と、

「エクセリオンバスター！ A・C・S！！」

今度はなのは声が聞こえる。エクセリオン？ なにそれ？ と零弥が振り向くとなのはの手の中のレイジングハートの形状が変わっ

ていることに気付いた。それはどう見ても杖と言つより槍に近かった。

それに呆氣にとられて見ていると、それを女性に向けて突つ込む。どう考えても近接戦闘苦手なのはの装備とは思えない。しかし、驚くのはその後なのだ。

女性は軽く片手で障壁を張り、真正面から受け止める。如何にも軽そうに。だがその女性の表情が崩れることになる。

「——ブレイク！」

レイジングハートのカートリッジが一気に三発リロードされる。そして、

「……シューーーート……！」

それは女性の障壁を碎き、その身に最高出力の光線をお見舞いすると言つ言葉に出来ないほどの荒業。

（いや、そりゃあでかいの頼むとは言つたけど、ここまでかよ？
なんだこのスペックの差は……）

もくもくと煙が立ち、女性の姿を覆い隠す。流石に大ダメージだと

思っただったが、現実には時に厳しい。その場所の、それより高い場所に平気そうな顔をしていた。服の損傷はあれど肉体的損傷は皆無だ。

「うつわ……こりやもう少し頑張る必要があるのかね？」
「うん。次は、必ず」

なのはの目が燃えている。完全に本気になったようだ。

再びその手の武器を構える、と急に女性の体が白く光り出し、仰け反る。

『外の方！ えと、管理局の方！ 私はそこにいる子の保護者、矢神はやてです！』

「「はやて！？」」

「はやてちゃん！？」

頭に響いた念話。それが聞き覚えのある声で耳を疑った。どうやら向こうも驚いた様子だが。

『なのはちゃん！？ それに零弥君にフェイトちゃんも……』

「そうだ！ 俺達だ！ そっちは無事なのか！？」

『大丈夫や！ それよりお願い！ そとにいるその子を何とか止めてあげて！』

「止めるって……」

『魔道書本体からはコントロールを切り離れたんやけど。その子があおしてると管理者権限が使える！今そっちに出てるのは自動行動の防御プログラムだけやから！』

はやての言葉に零弥は頭を傾げる。止めると言われても既に硬直してるし、止まっているのは止まっているのだ。

『皆！聞いて！彼女を魔力ダメージだけで攻撃するんだ。そうすれば――』

「はやてを助けられる。そうなんだな？」

「分かった！さすがユーノ君！」

「うん……バルディッシュ！」

三人は同時にデバイスを構え、女性、防衛プログラムへと向ける。

「準備はいいか？なのは、フェイト」

「オーケーだよ」

「うん！全力全開で行くよ！」

キィィィン、耳鳴りのような音を立て、魔力が収束されていく。

今ここに、目の前の少女を救う手段がある。

あると分かっているんだ。なら、それに従ってやろう。

証明する。黒野零弥は、絶対に、二度と――！ 見捨てたりはしない――！！

「サンダー……スマツシャー――！！」

「エクセリオンバスター――！！」

「アーカナイト……バス、ター――！！！！」

光と桜と、闇が交わり、たった一つの未来目掛けて向かって行く。最上の選択なんて、いつでも出来ることじゃないから。だから、出来るときにはしておきたい。

そして、それが誰かを助けるためなら、それこそ――

A、S 編第12話 兄貴分の決意（後書き）

違和感バリバリ。

アニメと同じ感動を出したかったが自分の実力では無理がありすぎたか。

ともかくこれに関して思うことがあったなら意見お願いします。

A、S 編第13話 そうしてまた、明日を望もう 前編（前書き）

主人公って言ってもいつだって平均的な能力を持つ人間って目立たないよね？

別に零弥の力やらを平凡と言っわけじゃないけど、見劣りするよね
どうしても。

A、S 編第13話　そうしてまた、明日を望もう　前編

閃光が収まる。目に見える範囲でなんらかの変化が訪れたようには見られない。それでも、その静けさが何かが変わったことを示していた。

「やった……のか？」

安堵が混じった呟き。しかし、直後に起きた出来事でそれが嵐の前のほんの一瞬の静けさに過ぎなかった事に気づく。

——目に見える世界が振動を始める。

「おいおいおい！　どういうことだユーノー！！」

『みんな、気をつけて！　闇の書の魔力、まだ消えてないよ！』

半ば悲鳴に近い零弥の言葉に返したのはエイミィだった。なるほど、確かにびんびん感じる。と零弥は冷や汗を流しながら目の前の空間を凝視する。

「まさかここでラスボス登場か？　笑えないぞまったく！」

「無駄口叩かないで警戒しな！」

「手厳しいお言葉で……」

零弥とて怒られているが悪気があって軽口を叩いたわけではない。そうでもないとい目の前の闇に怖気づいてしまいそうだったからだ。零弥の闇の衣を純粋な闇と例えるとそれは余りにも毒々しい色。少し前まであの闇の真上辺りには闇の書の防御プログラムが点在していたはずだったのだ。

「近づける状況でもなさ気だし、大人しく様子見でも——っ！？」

と、零弥は感じ取る。

禍々しい暗闇の中に、光り輝く四つの星のような力。覚えがある魔力。

気付けばそれは自分より高い位置に集結し、四方の敵を迎え撃つような体系を取る。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

剣の騎士が言葉を発する。

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

湖の騎士が言葉を繋げる。

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

盾の守護獣がそう繋ぎ、

「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

鉄槌の騎士が言葉を紡ぐ。

空には雲がある。例え夜でも朝でもいつだってついて回るものだ。

それを象徴する雲の騎士
ヴォルケンリッター

絶対の存在と言い切ることは出来ないけど、それでもいつだって雲は天の下に存在するもの。主に絶対の忠誠を誓い、今ここに蘇る。

そして、その直後に四人の中心に巨大な光の柱が立ち昇る。

四人の中心にいたのは八神はやてその人。しかしその服装は先程の防衛プログラムが着ていた物に似ており、その手には魔法使いの杖が握られていた。

「アイツら……はやても。よかった……」

少年の呟きなどあつてないものだった。そうして夜天の主はその手の杖を掲げ、声高々に宣言するのだ。

それこそ、闇夜に輝く、闇を照らすものとして――

「夜天の光よ、我が手に集え。祝福の風、リインフォース、セットアップ！」

その背に三対の漆黒の翼を生やし、その髪はブロンドに染まる。その手に剣十字の杖を持ち、夜天の主、八神はやてが君臨する。

そうして、先程までのシリアス感は何処へやら、今はやて達は家族との再会を喜んでいた。

それを見てパアツと顔を輝かせたなのはとフェイトはそれに近寄っていく。零弥も行こうと思ったが、ふと真上を見て見つけた人物に笑みを零す。

「クロノ。お前は行かないの？」

「……別に、僕と彼女達に接点はないからね。君はいいのかい？」

「いやいや。こう言う時は一緒に行くのがそれらしいでしょ？ 数

少ない男性陣としてさ」

「ようするに道連れが欲しいだけか、君は」
「そうとも言つ」

ニツと笑ってから零弥ははやて達に近付いていく。

「ちわーッス！ 元氣そうで何よりだ」

「零弥君！」

「「ゼロ！」」

「ゼロじゃない。黒野零弥だ！」

とてもいい雰囲気。少し混ざり辛さも感じてしまうほどだが、上から降りてくるクロノを一度チラ見して、口を開いた。

「作戦タイムだ」

「氷結魔法に……ラルクアンシエル？ の二択ねえ」
「アルカンシエルだよ零弥君……」

クロノの説明を聞く限り、今の状況は決して好ましいものでないことははっきり理解できた。

氷結魔法じゃ難しいとシャルマルは言うし、アルカンシエルでは海鳴市が吹っ飛ぶと言う。

普通に攻撃してもコアがある限り再生するやら、あと十五分やら。

「だからってそれ以外の案を求めるってのはねえ……アルカンシエルか……」

零弥は一人で顎を持ってうんうんと悩み始めた。そんな中反対！やらそれはダメ！と言う声が耳に届き、考える頭を遅らせる。

「あゝっ！ なんかごちゃごちゃうつとうしいな！ 皆でズバツとぶっ飛ばしちまうわけにはいかないの！？」
「まったくだ！ コアだかモ力だか知らないけど！ それを取り出して破壊するって方法はないのかよ！！」

我ながら無策すぎる言葉。それができれば苦労しないというのに。奇跡やらは信じる柄だがそもそも手段がなければどうにもならない。再び頭を傾けようとした時、魔法少女三人組み何か閃いたようにアツと言った顔になった。

「クロノ君！ アルカンシエルってどこでも撃てるの？」

「何処でもって……たとえば？」

「今、アースラのいる場所」

「軌道上、宇宙空間で！」

「その発案は俺でも頭が痛くなるなあ……」

「……言つな零弥。僕だつて痛いよ。実に個人の能力頼みでギャンブル性の高いプランだが」

「やってみる価値はある。だろ？」

零弥の言葉にクロノは頷く。作戦は言うならば至つて単純。まず防衛プログラムの四層のバリアを破り、その後全員の一齐砲撃でコアを露出させる。露出したコアをシャマル、ユーノ、アルフの力で宇宙空間に転送。アルカンシエルで蒸発。

一度聞いたら行き当たりばつたりに聞こえるがそれが計算上可能なのだからまた怖い。

「恐ろしや、魔法文化つか……オーケー。援護に回る」

「零弥君は一齐砲撃に参加しないの？」

「生憎と。本気でやって海を叩き割らない自信がないんでね」

それを聞くとはやてや騎士達がまさかと言つた顔になるが、ぶつちやけマジだ。零弥の黒い衣を全力解放した結果、その刃の大きさがどれほどの物になるか未だ試したことは無い。

これは本人の見解だが、極細にさえすればなのはのディバインバスターの射程並みに伸びる計算だ。もっとも、憶測を越えないが。

「クロノ、あと何分？」

「あと二分と三十秒だ！ 何回も言わせないでくれ！」

「ラジャ。さて、ゼロ。準備をしますか？」

結局、ストレージデバイスのゼロは言葉を発しない。それでも声をかけてしまうのはやはり話相手が欲しいからなのかもしれない。ゼロの魔力の供給は少し前からシャットダウンされ、戦いのときを待っている。

A、S編第13話　そうしてまた、明日を望もう　前編（後書き）

零弥の力は魔力攻撃にカウントされないんですね。だからついつい戦いどころを間違えてないか不安になってしまっんです。

さて、零弥君はバックアップをするそうですが仮にも主人公がこのままなんて……あるかもね！！

A、S 編第14話　そうしてまた、明日を望もう　後編（前書き）

更新大変遅れて申し訳ありません！！

卒業生として少なからずやることがあつてどうしても遅れてしまいました。

レポートとか宿題とか作文とか論文とか……

あ、あと就職はまだ決まってません。そろそろ本格的にニートな予感。

A、S編第14話　そうしてまた、明日を望もう　後編

今だけ、一分一秒がいつもの数十倍にも感じる。そう思ってしまうのはやはり緊張からなのかもしれない。

だが焦っているようには感じられなかった。少年はぶかぶかヴォルケと雲の騎士に並ぶようにして虚空を見据えるだけなのだから。

「——奇跡って、意外とあんのね」

無言の空間に少年の声が響いた。

ある者は軽口と捉え、聞き流し、ある者は何かと目を向けた。

「だって、はやてがこうして目覚める確立って、計算上で言えば大分低いだろ？　でもこうしてここにいる。俺なんか妙に袋叩きにされたりして痛い目見た気がするけど」

その時、遠い空間からそれを見ていた格闘担当の猫使い魔がぶるつと震えた。

「だけど、今はこうして皆でハッピーエンドを掴むために同じ方向

を見てる。ホント、人生つてのは何があるか分からんよ」

一瞬、少年の目が悲しげに歪んだ。だがやはりそれは一瞬で、次の瞬間には狐のような細目になっていた。

それに気付いた物は余りに少なかったが。

「俺が何を言いたいか。それはずばりここまできたんだから皆で未来を掴もうぜ、ってこと。その為に戦うんだから」

少年の言葉に頷く者もいた。目を閉じて思考に浸る者もいた。

時間はそろそろタイムリミットを迎える。

少年、黒野零弥は口元を歪めて、言葉を発した。

「さて、たまには英雄^{ヒーロー}みたいに世界でも救ってみますか」

振動が激しくなる。それと同時に滲み出す魔力が濃くなっていく。

誰かがはじまる、と呟いた気がした。もっとも、それを耳に入れられるほど零弥に余裕はなかったが。

「夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム……闇の書の闇」

所有者であるはやてには色々と思うことがあるのだろう。その目に見て取れるのは決意。

そして、魔力の塊は割れ、その中から様々な生物を混ぜ合わせたような怪物が現れ記——否、孵化する。

正にラスボス登場。自分達は世界を守るために戦うのだから英雄と言ったところだろう。

怪物の体はとてつもないほど巨大で、強固な装甲がその身を包んでおり、その背にある甲羅のような甲殻には漆黒の翼が生えていた。

更に目を引くのは悪魔のような角を生やした頭。そこから上半身だけを出して悲しげな声を上げる魔性の歌姫^{セイレーン}

おぞましく、醜悪で、だけど何故か悲しくなってしまうて仕方がない。

誰かの手によって生み出され、しかしその存在は誰にも認められず、常に魔性とされてきた物。

だが戦わなければならないだろう。こちらにはこちらの譲れないものがあるのだから。

「チェーン・バインド！」

「ストラグル・バインド！」

「……ダーク・バインド！」

アルフと、ユーノと、零弥の赤緑黒のバインドが走り、闇の書の闇の近くの触手を束縛し、切断する。

「縛れ……鋼の軛^{くびき}！」

三人に並んだザフィーラも負けじと魔法を発動する。鞭のような魔力刃は作り出し、辺りの触手を一斉に風ぐ。

「ちゃんと合わせるよ……高町なのは！」

「ヴィータちゃんもねっ！」

夕方までの空気はどこへやら、なのはとヴィータは小さな肩を並べ、軽口を叩いた。自慢の相棒を掲げ、ヴィータは声を上げた。

「鉄槌の騎士”ヴィータ”と鉄の伯爵くろがねはくしゃく”グラーファイゼン”」
『G i g a n t f o r m 』

ヴィータの声に応えたグラーファイゼンはその形を変えていく。

「轟天、爆砕！！」

そしてそれは振り上げられると同時に巨大化する。それは言うならば巨人の鉄槌。

「ギガント、シュラーク！！」

そうして振り下ろされたとてつもない一撃はまるで全てを破壊する

ように叩きつけられる。呆気なくもバリアを一枚砕いたが、その下の二段目に阻まれる。

だが当然、これで終わりの訳がない。

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン、行きます！」
『Load cartridge.』

レイジングハートのカートリッジが一気に四発も装填される。そして彼女の足場を作るように現れた巨大な桃色の魔法陣。

「エクセリオン・バスターーッ！」
『Barrel Shot.』

迫り来る触手を零弥が切捨て、なのはのエクセリオンバスターは発射段階に入る。目に見えるほどの衝撃波が放たれ、バリアを直撃する。

「ブレイク、シューーッーッー！」

そうして桃色の巨大な閃光はかけていく。何者にも遮られず、ただ真っ直ぐに。

バリアを砕き、そうしてまたその下のバリアが見える。

「次、シグナムとテストロッサちゃん！」

「剣の騎士”シグナム”が魂、炎の魔剣“レヴァンティン”。刃と連結刃に続く、もう一つの姿……」

『B o g e n f o r m . 』

シグナムが自らの魂と呼ぶその刃を掲げる。その様は戦に赴く聖騎士を彷彿ともさせる。カートリッジが装填され、柄頭に鞘を当てる。とそれらは繋がり、一つの武器へと姿を変える。

その姿形は……弓。

きりきりと光の矢が引き絞られ、それに準じて光の強さは増していく。

「翔^かけよ、隼^{はやぶさ}っ！」

『S t u r m f a l k e n . 』

膨大な魔砲とはまた違い、一筋の閃光は真っ直ぐ、目にも留まらぬ速度で目標へと翔けていく。また一枚、バリアを破壊する。次が最後だ。

「フェイト・テストロッサ、バルディッシュ・ザンバー、行きます
！」

バルディッシュを巨大な大剣状の魔力刃へと変形させ、回転しながらそれを振るう。なのはの時のような衝撃波が発生し、対象までの道のりの触手を切り刻んでいく。

「撃ち抜け、雷神!!」

『Jet Zamber.』

上段から一気に振り下ろされた魔力刃はそれと同時に長大化し、やすやすとバリアを砕いて肉薄する。

その際、防衛プログラムから新しい触手が出現し、その先に魔力が収束されていく。砲撃魔法だ。

しかし、

「盾の守護獣“ザフィーラ”、砲撃なんぞ撃たせん!」

誰よりも早く反応したザフィーラが鋼の軛でそれらをなぎ払う。

そのザフィーラの目下でゼロを片手に零弥がたたずむ。その表情はうかがう事ができないが、その口からはため息が一つもれる。

「……皆ノリノリだな……じゃ、俺もいっちゃ言ってみますか!」

零弥はゼロを握る力を強くする。そうして怪しげな光がゼロに集ま
っていく。

「お兄さん役、守護者でも、騎士でも、魔法使いでもない……ゼロ
だ！！」

零弥の猛りとともにゼロは瞬時に長大化し、そして瞬時に十字に振
るわれる。

「秘技、あんけんじゅうもんじ闇剣十字字！」

振るわれ、その魔力刃が消えた瞬間、防衛プログラムは四つに分断
される。

しかし、まるでボンドで接着するように直ぐに再生してしまい、零
弥は舌を打った。

「彼方より来たり宿り木の枝、銀月の槍となりて撃ち貫け！」

零弥のいる場所より上空。そこにいた巨大な魔力の当事者、八神は
やては左手に書を、右手に杖を持ち、詠唱する。

「石化の槍、ミストルティン！」

再生途中の防御プログラムに容赦もなく飛来した七本の槍は射止めるように突き刺さり、その周囲から石化していく。あつという間に全身が石化し

、魔性の歌姫は崩れて粉塵となって舞う。

しかし、それで済むなら苦労はない。どうにも石化して割れた部分よりまた触手や巨大な口のようなものが生えてくる。

『やっぱり、並の攻撃じゃ通じない。ダメージを与えた側から再生されちゃうー!』

エイミーからの通信は下手をすればこちらの士気を下げかねない言葉だったが、それは無用の心配であった。今の今まで傍観していたクロノが不敵に笑う。

「だが、攻撃は通っている。プラン変更はなしだ！ 行くぞ、デュランダル」

『O k , B o s s .』

そうしてクロノは英雄の聖剣を冠する名の杖に呼びかける。そして目を閉じ、魔力を高める。

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて永遠の眠りを与えよ」

クロノの足元に描かれたのは青い魔法陣。それが輝いたかと思うと
防御プログラムを中心に海が凍り始めていた。その対象も当然例外
ではない。

「凍てつけ！」

『E t e r n a l C o f f i n .』

ついには完全に凍りつき、静寂が訪れる。無論。数秒に過ぎない時
間稼ぎとも言えないものかもしれないが、今はそれで十分だった。

激しい魔力の高まり。それも三つ。誰か、なんて分かりきった問い
など今更する事は無い。

桃色と、黄色と、純白と。

三つの光は目下の零弥を照らし、眩しいとさえも感じさせる。

いつだってそうだ。彼女らの強さ。魔力の量は勿論、諦めない事。
言うだけなら簡単、だがそれを実際に出来る人間はどれだけいるだ
ろう？

恐らく。ほとんどいない。

時に挫折はするし、立ち止まって泣きじやくるときもあるだろう。
でも、また立ち上がって歩き始めることができる。

零弥は、黒野零弥という人間は、一個人としてそんな彼女達を尊敬

できる。

彼はこの戦いや先の戦いにおいて脇役に過ぎないだろう。しかし、それで構わない。むしろそれで本望なのだから。

——戦いの終局を見届けられるものとして。

「全力全開！ スターライト……」

「雷光一閃！ プラズマザンバー……」

「ごめんな……おやすみ。ラグナロク……」

「……ブレイカー……ッ……!……!……」

そうして、戦いは終焉を迎える――

A、S 編第14話　そうしてまた、明日を望もう　後編（後書き）

黒野零弥。主人公……ですよね？

って俺が聞いちゃダメですね。主人公です。

これはアレだ。舞台上で光が当てられているのに自分以外がめっちゃ目立つ感じ。それに近い。

零弥も十分に特別ですが、なのはとフェイトに比べると……

更にはやてと比べたりしたら……orz

ともかく、もう直ぐA、S 編も終わりを告げますゆえ、よろしくお願ひします

A、S 編第15話 それは、多分愛しい終わり（前書き）

本当ならこれで最後にしたかったんだけど少し長くなりそうなので次が最終話です。

A、S 編第15話 それは、多分愛しい終わり

——物事には終わりが存在する。

それはこの世界の間違いのない絶対真理であり、誰もが逃れることができないこと。

それと同様に、終わりに始まりは付き物だ。例えばAと言う人物が死んだとしてそこでAのいる世界が終わりを告げ、同時にAのいない世界が幕を上げる。これは今回の話には関係のないことだが。

だが、それだけ。あらゆる物事に始まりと終わりがあることを除けばそれ以外の全ては完全に異なるものへと変革する。

過程というその間があるにしろ、その長さもまたあらゆる事象で異なる。

人一人の大きな始まりと終わりを挙げるなら、誕生と死だろう。

誰もが自ら望んで生を受けた訳でもなく、死にたくななくても死ぬしかない。

逃れられない絶対真理。零弥にしろ、なのはにしろ、フェイトにしろ、はやてにしても、いつかはその身はこの世から消えてなくなる。

いつかは消えてしまう。この世界を宇宙として見ると本当に些細で全くな無意味。

誰もが望もうが望むまいが終焉を迎える。
今回の事件にしろ、それは確かなことだ。

「……今、なんて言った？」

アースラの広い食堂、ガラガラで人は全然いないが、その墨に座っていた零弥は呆けたに聞き返した。信じたくない、そう滲み出すように。

「夜天の書の……破壊？」

だが、それは隣にいる少女が復唱することで決して聞き間違いではないことに気付く。

防御プログラムとの戦闘を終えて直ぐに眠りについてしまったはやてをアースラに収容し、ようやく休息かと思った間際のことだった。それを言った当の本人、クロノもまた到底明るいとは思えない表情をしていた。

零弥はハッピーエンドを目指した。PT事件のようではなく、今度こそ悲しませないで済ませられるように。だが、まるで幻想と嘲笑うかのように現実を決してそれを認めてはくれなかった。

防御プログラムは確かに破壊した。しかし、管制プログラム、リインフォースが存在する限り何度でも防御プログラムは再生する。夜天の書は根本的な基礎部分が既に変えられているために修復手段は存在しない。何とかしようにも、修復方法すらももう失われている。

「でも……それじゃあシグナム達も——」
「いや、私達は残る」

会話に入ってきたのはシグナムにシャル、狼形態のザフィーラだった。ヴィータの姿が見えないが、大体の予想はついた。

「防御プログラムと共に、我々守護騎士プログラムを本体から解放したそうだ」

「それで、リインフォースからなのはちゃん達にお願いがあるって」
「……お願い？」

そうして、再び零弥達は地球に戻ることになる。

なのはとよく訓練をしていた見晴らしのいい山の上の公園。

つい先日までは雪なんてほとんどなく、今のような雪景色は稀なものだ。

そして、そこへ向かう零弥達を待つ影が一つ、寂しく佇んでいた。

「ああ、来てくれたか」

「リインフォース……さん」

夜天の書の管制人格、リインフォース。ノースリーブにミニスカートと言う景色とは対照的な服装な彼女は、しかし寒そうな様子は見られなかった。

それは単に寒さを感じないからなのか、それとも自ら必要ないと思
ったのか、そんなどうでもいい考えが零弥の中を巡っていた。そし
てそんなどうでもいい事を考える自分に腹を立ててもいた。

無理矢理でもどうでもいい事を考えようとする自分が許せなかった。

「そう、呼んでくれるのだな」

抑揚もないリインフォースの声は逆にもの哀しさを感じさせた。

なんてことはない。これから彼女を空へ帰す。夜天の書と共に。

防御プログラムが再生すれば再び破壊が困難になる。だから、今の
うちに――

「……なんでだ」

「どうした？」

「……はやてに、会わないのか？」

「主はやてを、悲しませたくないんだ」

「――っ!」

それから零弥は口を閉じてしまった。なんと口を開くべきなのか、
全く分からなくなった。

「リインフォース……」

「でもそんなの、なんだか哀しいよ……」

「お前達にもいずれ分かる。海より深く愛し、その幸福を守りたいと思う者に出会えればな」

フツと笑い、リインフォースは零弥達に後ろに目を向けた。そこにいたのはシグナム達ヴォルケンリッター。しかしその中にはやての姿はなかった。

「そろそろ始めようか、夜天の魔道書の終焉だ」

白い雲で覆い隠された空を見上げ、リインフォースはそう口を開いた。

その目はもう哀しさなど感じられず、なにやら懐かしい物を見る目にも感じられた。

皮肉にも三人。リインフォースが自ら作り出すベルカ式の魔法陣と

零弥、なのは、フェイトが作り出し、繋いだ形は三角形。二つの三角形が重なるようにして輝いていた。綺麗なのに、それは彼女という存在を破壊する魔法。

その手にゼロを握り締め、零弥はただ一心に魔法陣の継続に努めていた。

そんな時だ。

「リインフォース！！ みんなぁ！！」
「っ！？」

声が聞こえた。その方向から近づいてくる小さな影。

はやては自らの足でもある車椅子を一生懸命に動かし、悲鳴に近い声を上げながら近づいてきていた。

「はやて……」
「動くな！！」

思わず駆け出しそうになったヴィータをリインフォースが制した。魔法陣はヴォルケンリッターも経由している。ヴィータが今離れたら魔法陣は不安定になる。

「あかん！ やめてえ！！ リインフォースやめてえ！！ 破壊な

んかせんでええ！ 私がちゃんと抑える！ 大丈夫や！ そんなこと、せんでええ！！」

はやては魔法陣に近づき、必死に声を上げる。悲しげにその表情が歪む。

だがリインフォースは優しく微笑むと、しかし悲しそうに口を開いた。

「主はやて、よいですよ」

「いいことない！ いいことなんか、なんもあらへん！！」

「随分と長い時を生きてきましたが、最後の最後で私はあなたに綺麗な名前と心をいただきました。騎士達も貴方のそばにいます。何も心配はありません」

「心配とかそんなん……」

「ですから、私は笑ってゆけます」

それを聞き、はやての表情が一層歪む。反してリインフォースの表情は非常に穏やかだった。それがまた、救いでありながらはやての心を抉るのかもしれない。

「——話聞かん子は嫌いや！ マスターは私や、話聞いてえ！！」

私がつとなんとかする！ 暴走なんかさせへんて約束したやんか」

「……その約束は、もう立派に守っていただきました」

「リインフォース！」

「主の危険を庇い、主を守るのが魔道の器うつわの務め。貴方を守るため

にもっとも優れたやり方を、私に選ばせてください」

「そやけど……ずっと悲しい想いしといて……やっとな……やっとなと救われたんやないか……！」

はやてには長い間家族がいなかった。失って分かるもの。それをはやてにはめるなら家族を失うことの辛さに繋がるのだろう。期間の差にしろ、家族のいない零弥には痛いほどその気持ちがわかってしまう。

かけがえのない大事な物は、何故か失ってしまう。

「私の意志は、あなたの魔導と、騎士達の魂に残ります。私はいつも、あなたの側にいます」

「そんなんちゃう！ 本当に言うことはそんなんやないやろ、リインフォース！」

きつと少女も気付いているのだ。嘆いているのだ。

自らの無力、そしてどうしようもないこの状況でさえ。

だが、諦めたくない。だから、今もこうして声を上げているのだ。

「ただっ子はご友人に嫌われます。聞き分けを、我が主」
「リインフォース……」

はやては涙を零しながら車椅子を魔法陣へと近づける。しかしその直ぐ手前で車椅子は転倒してしまい、少女は投げ出されてしまう。だが今少女を抱き起こせるものはいない。

「なんで？　これから、これから、うんと幸せにしてあげなならんのに！」

どうしようもないと分かっているながらも、はやてはただリインフォースを見上げて口を開くことしか出来ない。

そんなリインフォースは魔法陣の中心を離れ、半歩だけ魔法陣から足を出して跪いた。

「大丈夫です。私はもう、世界で一番幸福な魔道書ですから」

「リインフォース……」

「主はやて、一つお願いが。私が消えて、小さく無力なカケラへと変わります。もしよければ、私の名はそのカケラではなく、あなたがいずれ手にするであろう新たな魔道の器に送ってあげていただけますか？　祝福の風”リインフォース”。私の魂は、きっとその子に宿ります」

「……リインフォース」

「はい。我が主——」

そうして立ち上がり、リインフォースは魔法陣の中心へと戻っていく。自らを破壊するために、はやての為に。

そうしてそつと、目を閉じる。

『主はやて。守護騎士達。それから、小さな勇者達』

頭に、心に直接響く声。リインフォースの体が光を帯び始める。

『———ありがとう。そして、さようなら』

そうして、祝福の風”リインフォース”は光となり、空へと還っていった。

「……本当に、こんな終わりしかなかったのかよ」

零弥は光が上っていった空を見上げた。だが落ちてくるのも、見えるのもただ白の一色だけ。

様々な者達を不本意ながら巻き込み、狂わせていった夜天の書――
否、闇の書事件は終わりを告げた。

A、S編第15話 それは、多分愛しい終わり（後書き）

零弥が会話に混ざれないから……原作と8割くらい変わらない……

かといって無理にいれたら違和感あるし、仕方ないか。

次、A、S編最終話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4222o/>

魔法少女リリカルなのは-Eternal Activity-

2011年8月14日00時04分発行